

東禅寺・黒山遺跡Ⅷ

2014

公益財團法人 山口県ひとづくり財團

山口県埋蔵文化財センター

とうぜんじ くろやまいせき
東禪寺・黒山遺跡Ⅷ

2014

公益財團法人 山口県ひとづくり財團

山口県埋蔵文化財センター

序

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解するうえで、大変貴重な財産です。この文化・伝統を継承し、未来へ伝えていくことは、21世紀に生きる私たちに与えられた責務であると言えるでしょう。

遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図って記録保存を行うこととしております。

本書は、山口市鋳銭司地内に所在する東禅寺・黒山遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。この調査は、南若川流域治水対策河川工事に伴い、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて、公益財団法人山口県ひとづくり財団が実施しました。

調査の結果、平安時代から室町時代にかけての集落跡が確認され、地区における当時の生活のようすや社会の状況等を知るうえで、重要な成果を収めることができました。

本書が文化財保護に対する理解を深め、教育ならびに学術研究や郷土史理解の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後になりましたが、当発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、ご指導・ご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団
理事長 松永貞昭

例 言

- 1 本書は平成24・25年度に実施した、東禪寺・黒山遺跡（山口県山口市銅鏡司地内）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとづくり財団が山口県防府土木建築事務所の委託（平成24年度契約名：南若川 流域治水対策・地域自主戦略交付金工事に伴う調査業務委託 第16工区 および 平成25年度契約名：南若川 流域治水対策工事に伴う調査業務委託 第1工区）を受けて実施した。
- 3 調査組織は次のとおりである。

調査主体 公益財団法人山口県ひとづくり財団・山口県埋蔵文化財センター

調査担当 文化財専門員 高木英明

文化財専門員 四元努

文化財専門員 小河泰史

調査員 山田圭子

- 4 調査にあたっては、山口県教育委員会、山口市教育委員会、山口県防府土木建築事務所ならびに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「小郡」「台道」を複製使用した。第2図は山口県防府土木建築事務所提供的地図を元に作成した。
- 6 今年度の調査から、調査区の名称は煩雑さを避けるため算用数字を使用することとした。昨年度までの調査についても、調査区名をローマ数字から同様に変更することとした。
- 7 本書で使用した方位は、國土座標（世界測地系）の北で示し、掘立柱建物跡以外の個別遺構に関しては磁北で示している。また、標高は海拔高度（m）である。
- 8 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 9 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 10 掘立柱建物跡実測図の薄い網かけは、柱痕を表す。
- 11 出土遺物実測図について、断面黒塗は須恵器を表す。
- 12 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B : 掘立柱建物跡	S A : 構列	S D : 溝	S K : 土坑
S T : 墓	S E : 井戸	S P : 柱穴	S X : 性格不明遺構
- 13 資料の分析・鑑定に関して、出土金属製品有機物の材質同定については株式会社吉田生物研究所、リン酸・カルシウム分析ならびに放射性炭素年代測定（AMS測定）についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を付録として掲載した。
- 14 報告書作成の過程で、磁器の鑑定については上田秀夫氏・徳留大輔氏・市来真澄氏（山口県立萩美術館・浦上記念館）にご教示・ご協力を賜った。
- 15 本書の作成・執筆は、高木・四元・小河・山田が共同で行い、編集は高木が行った。

本文目次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯と概要	3
III 調査の成果	5
1 遺構	5
2 遺物	33
IV まとめ	55
付録1 東禅寺・黒山遺跡出土金属製品有機物の材質調査結果	57
付録2 東禅寺・黒山遺跡における自然科学分析	59

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1	第20図 17地区検出遺構実測図（18）	27
第2図 調査区設定図	3	第21図 18地区遺構配置図	28
第3図 17地区検出遺構実測図（1）	7	第22図 18地区検出遺構実測図（1）	29
第4図 17地区検出遺構実測図（2）	8	第23図 18地区検出遺構実測図（2）	30
第5図 17地区検出遺構実測図（3）	9	第24図 18地区検出遺構実測図（3）	31
第6図 17地区検出遺構実測図（4）	10	第25図 17地区出土遺物実測図（1）	34
第7図 17地区検出遺構実測図（5）	11	第26図 17地区出土遺物実測図（2）	35
第8図 17地区検出遺構実測図（6）	12	第27図 17地区出土遺物実測図（3）	36
第9図 17地区検出遺構実測図（7）	14	第28図 17地区出土遺物実測図（4）	37
第10図 17地区検出遺構実測図（8）	15	第29図 17地区出土遺物実測図（5）	39
第11図 17地区検出遺構実測図（9）	16	第30図 17地区出土遺物実測図（6）	40
第12図 17地区検出遺構実測図（10）	17	第31図 17地区出土遺物実測図（7）	41
第13図 17地区検出遺構実測図（11）	19	第32図 17地区出土遺物実測図（8）	42
第14図 17地区検出遺構実測図（12）	20	第33図 17地区出土遺物実測図（9）	43
第15図 17地区検出遺構実測図（13）	21	第34図 17地区出土遺物実測図（10）	44
第16図 17地区検出遺構実測図（14）	22	第35図 17地区出土遺物実測図（11）	45
第17図 17地区検出遺構実測図（15）	23	第36図 17地区出土遺物実測図（12）	46
第18図 17地区検出遺構実測図（16）	24	第37図 17地区出土遺物実測図（13）	47
第19図 17地区検出遺構実測図（17）	25	第38図 18地区出土遺物実測図	48

表目次

第1表 据立柱建物跡一覧表	32
第2表 出土遺物觀察表	49

図版目次

図版 1	調査区遠景	S K72土層断面
図版 2	調査区全景	S K72完掘状況
図版 3	17地区全景	S K72遺物出土状況
図版 4	17地区中央部遺構密集部分	図版12 S K77遺物出土状況①
図版 5	17地区東部掘立柱建物群	S K77遺物出土状況②
図版 6	S B 1 完掘状況	S K78遺物出土状況
	S B 2 完掘状況	S K78完掘状況
	S B14・15完掘状況	S D13遺物出土状況
	S B20完掘状況	図版13 S D 7・S D11トレンチ2土層断面
	S B10 S P538遺物出土状況	S D11遺物出土状況
	S B19 S P474遺物出土状況	S D12遺物出土状況
	S P80遺物出土状況	S D41遺物出土状況
	S P88遺物出土状況	S E 1 遺物・礫出土状況
図版 7	S P113遺物出土状況	S E 2 磚出土状況
	S P134遺物出土状況	S E 3 土層断面
	S P257遺物出土状況	S E 3 完掘状況
	S P272遺物出土状況	図版14 S T 1 遺物出土状況①
	S P338遺物出土状況	S T 1 遺物出土状況②
	S P352遺物出土状況	S T 1 遺物出土状況③
	S P355遺物出土状況	S T 1 遺物出土状況④
	S P376遺物出土状況	S T 1 完掘状況
図版 8	S P385遺物出土状況	図版15 18地区全景
	S P401遺物出土状況	図版16 S K 1 土層断面
	S P425遺物出土状況	S D 4 完掘状況
	S P426遺物出土状況	S D 4 トレンチ1土層断面
	S P462遺物出土状況	S D 4 トレンチ2土層断面
	S P464遺物出土状況	S T 1 完掘状況
	S P479遺物出土状況	図版17 出土遺物（1）
	S P487遺物出土状況	図版18 出土遺物（2）
図版 9	S P491遺物出土状況	図版19 出土遺物（3）
	S P492遺物出土状況	図版20 出土遺物（4）
	S P586遺物出土状況	図版21 出土遺物（5）
	S P588遺物出土状況	図版22 出土遺物（6）
	S K 9 遺物出土状況	図版23 出土遺物（7）
	S K11土層断面	図版24 出土遺物（8）
	S K12土層断面	図版25 出土遺物（9）
	S K12遺物出土状況	図版26 出土遺物（10）
図版10	S K15土層断面	図版27 出土遺物（11）
	S K32炭検出状況	図版28 出土遺物（12）
	S K32焼土検出状況	図版29 出土遺物（13）
	S K33土層断面	図版30 出土遺物（14）
	S K35遺物出土状況	図版31 出土遺物（15）
図版11	S K35土層断面	図版32 出土遺物（16）
	S K35完掘状況	

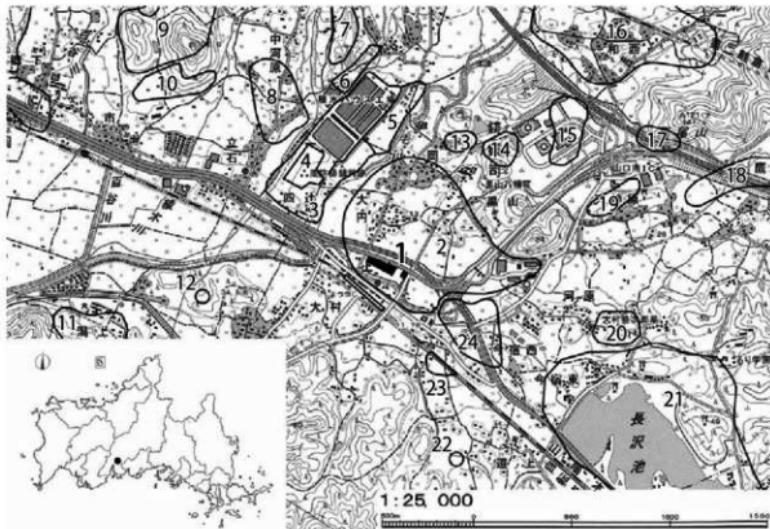
I 遺跡の位置と環境

東禅寺・黒山遺跡は、山口市銅銭司地区に所在する。同地区は、椹野川河口一帯に広がる吉南平野の北東部に位置する。平野は北側に標高300~400mの山口山地、南には標高200~300mの秋穂山地が連なり、南北を山に囲まれている。今回の発掘調査区は山口山地の黒河内山麓に形成された段丘面南側の低地に位置しており、本遺跡のこれまでの発掘調査区の中で最も標高が低く、なおかつ南若川に一番近い。

銅銭司地区の標高は7~12mであり、古代・中世における海岸線が標高6~7mであったと推定されることから、平安期の海進時には、本遺跡から近い位置に海岸線があったと考えられる。

気候は瀬戸内式である。年間を通じて温暖少雨で安定しているものの、古くから水資源の確保が困難であったようで、灌漑用の人工池が多く見られる。本遺跡の東には、慶安4(1651)年築堤の長沢池がある。これら人工池の築堤には、ある程度の財政的な蓄えが必要であり、往時には108を数えたという人工池の存在は、この地域に暮らす人々の生活水準がうかがえる。また、本遺跡の西側に流れる金毛川と合流して水勢を増し、大雨の度に氾濫して地域一帯に被害を及ぼしてきた南若川の治水に苦労を余儀なくされ、その克服に尽力してきたことを表している。

本遺跡の歴史的環境にふれる時、2つの国指定史跡「陶陶窯跡」・「周防銅銭司跡」と山陽道、すな



1. 今回調査区 (17地区・18地区)
2. 東禅寺・黒山遺跡
3. 周防銅銭司遺跡
4. 周防銅銭司跡
5. 上北田遺跡
6. 八ヶ坪遺跡
7. 糸根遺跡
8. 下糸根遺跡
9. 陶窯跡群
10. 銅銭坊遺跡
11. 潟上遺跡
12. 蓬富窯跡
13. 舟木遺跡
14. 井面山遺跡
15. 桐ヶ谷・尾口山遺跡
16. 和西道路
17. 嶺(志)釜遺跡
18. 星原・弥市原遺跡
19. 天神原遺跡
20. 河原遺跡
21. 長沢池遺跡
22. 道の上遺跡
23. 織河内遺跡
24. 今宿遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

わち基幹となる産業とそれを支える交通を抜きにして考えることはできない。

大化の改新以降、中央集権的制度が確立すると、官道が整備され、延喜式に「周防国八千二十四」と記され、この地は八千郷^{さち}と呼ばれ、山陽道の宿駅として栄えたとされる。また、中世になると、大内氏の城下町山口とその外港秋穂舗を結ぶ秋穂街道が、四辻で山陽道と交差していたことから、当時の四辻周辺は、大変なにぎわいをみせていたといわれている。

奈良時代には、鋳銭司地区の西側に接する陶地区に須恵器を生産する陶窯跡群が築造された。国史跡の窯跡は、丘陵の南斜面（標高約80m）を利用した半地下式構造の登り窯がほぼ完全な形で残っている。生産された須恵器は周防国府や周防鋳銭司などに供給されていたとみられている。

周防鋳銭司跡は、天長2年（825）に開設された平安時代の官営鋳銭所の遺跡である。律令制の崩壊に伴って終焉を迎える11世紀初頭までの約200年間にわたって存続した。9世紀前半から10世紀中頃にかけては、わが国唯一の鋳銭所であり、皇朝十二銭のうち8種を铸造した。

窯業と鋳銭という二大工業がこの地で展開・発展した理由として、良質な陶土や粘土、銅鉱が産出し、また製造の過程で欠かせない燃料となる森林資源も近隣で豊富に入手できたことに加え、販路や運搬に直結する水陸の交通の便に恵まれていたことや、中央政府により設置された周防国府が近かつたことを大きな理由として挙げてよいだろう。

本遺跡における人間活動の痕跡は、縄文時代までさかのぼることができる。平成22年度の調査で玦状耳飾が出土したことも記憶に新しく、平成24年度の調査で、草創期の有舌尖頭器が出土し、縄文時代の前半期から人々の活動の場であったことがわかるとともに、当該調査区を狩猟スペースに持つ居住区域（集落）の存在の可能性が示唆された。

現在の国道2号線バイパス上辻付近で発掘調査された上辻遺跡・鋳銭司大歳遺跡は、周辺の調査の広がりと共に東禅寺・黒山遺跡に内包され、中世の集落跡の調査成果としてその範囲を拡大している。また、同遺跡東に位置する今宿西遺跡・今宿東遺跡も、今宿遺跡として統合された。周防鋳銭司の開設以降に形成された集落が、「西から東へ、低地から微高地へ」と推移していく状況と、治水の成果とともに工業生産地帯から水田稲作地帯に推移していくことが明らかになってきている。

参考文献

- 山口県埋蔵文化財センター「東禅寺・黒山遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ」1996, 1997, 1998, 1999, 2000, 2011, 2013年
山口県埋蔵文化財センター「東禅寺・黒山遺跡（東大門・上徳田地区）」2003年
山口県埋蔵文化財センター「東禅寺・黒山遺跡（岡上ノ原・後子庵地区）」2009年
山口市教育委員会「東禅寺・黒山遺跡」2000年
山口市教育委員会「山口市内遺跡詳細分布調査 鋳銭司地区」2000年
山口市教育委員会「山口市内遺跡詳細分布調査 附地区」1999年
山口市教育委員会「周防鋳銭司跡」1978年
山口市教育委員会「陶窯跡群Ⅱ」2007年
山口市「山口市史 史料編考古・古代」2012年
山口市史編集委員会「山口市史」1982年
山口市教育委員会文化課編「弥市原・東禅寺」1982年

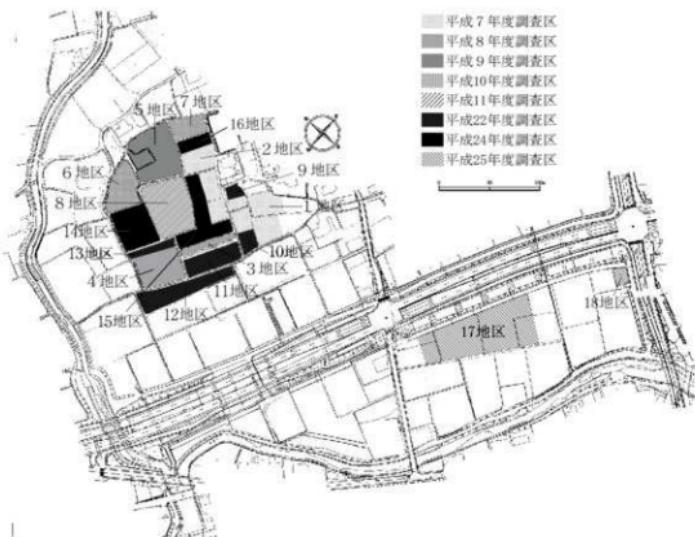
II 調査の経緯と概要

東禅寺・黒山遺跡が位置する山口市鈎銭地区は、北から金毛川、東から高橋川が流下し南若川に合流する地点にあり、標高が7~12mと低いため、度々大雨による水害に見舞われてきた。そこで山口県は、この地域に調整池を建設する工事を計画し、これに伴って平成7年度から平成11年度までの5年間、当該地区的埋蔵文化財発掘調査が実施された。その後、工事計画の変更に伴い、調査も一次中断していたが、平成22年度には調査が再開され、平成24年度末には第7次調査の成果として『東禅寺・黒山遺跡Ⅶ』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第84集)が刊行されている。

こうした状況下、平成24年度に山口県防府土木建築事務所と山口県教育委員会が協議し、南若川流域治水対策河川工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査(東禅寺・黒山遺跡)を実施することとなり、山口県防府土木建築事務所から委託を受けて公益財団法人山口県ひとづくり財團・山口県埋蔵文化財センターが、記録保存を図るために発掘調査を行うこととなった。

現地調査を始めるに当たり、調査対象地区の現況確認や関連資料調査等を行ったうえで山口県防府土木建築事務所との打ち合わせを行うとともに、近隣の小・中学校、警察署、地元自治会等に調査期間中における安全確保のための理解と協力を要請した。その後、5月13日に作業員説明会を実施し、作業内容の確認や安全管理等について周知徹底を図った。

調査開始当初の対象範囲は3,800m²で、平成24年度までの調査を踏まえて17地区と命名し(第2図)、現地調査を開始した。5月15日から重機による表土除去を開始し、その後作業員を投入して本格的な遺構検出作業に入ったが、地形的要因等で調査区の排水環境はたいへん悪く、特に梅雨時期に入ると



第2図 調査区設定図

調査区全体が冠水する日が続き、作業は難航した。そこで當時水中ポンプを可動させることによって何とか検出作業を終え、遺構配置図を作成して7月18日から遺構の掘り込みを開始した。7月下旬から8月にかけて連日猛暑が続いたが、調査区東側については比較的浅い遺構が多く、掘り込み作業は順調に進んでいった。調査区中央部では多くの土坑や溝が集中しており、大量の土器が出土した。また調査の進展に伴い、調査員が隨時各遺構の実測図作成および記録写真撮影を行った。

いっぽう、調査の進行と並行して、山口県防府土木建築事務所と山口県教育委員会は調査対象範囲の変更について協議し、17地区西側部分の拡張ならびに東方に約100m離れた旧耕作地を新たに調査地とすることを決めた。公益財團法人山口県ひとづくり財團が山口県防府土木建築事務所からあらためて委託を受け、調査面積は最終的には4,740m²となり、旧耕作地については18地区と命名した。

9月初旬から17地区拡張部分ならびに18地区的表土除去を17地区遺構掘り込みと並行して行い、遺



表土除去



調査風景



現地説明会

構検出ならびに平板測量・遺構配置図作成の後、10月から作業員を2班に分け、17地区と18地区的遺構掘り込みを同時進行で実施した。18地区については後世の削平等により、遺構の残存数は少なく、状況はあまり良くなかった。

10月後半から11月中旬にかけて周期的に雨が降り、作業は難航したが、11月23日には何とか現地説明会を実施することができた。地元住民を中心として約40名の参加があり、盛会のうちに終了することができた。その後、遺物の取り上げならびに全ての遺構掘り込みと個別図面の作成を終え、12月1日には空中写真撮影および測量作業を実施した。

12月6日には、作業員による簡易の埋め戻し、調査員による図面の補足作業等を全て終え、12月10日に調査事務所の撤去等を行い、約7ヶ月におよぶ現地調査を無事終了することができた。

現地撤収後は、山口県埋蔵文化財センターにおいて、記録類の整理に本格的に着手し、新たに出土遺物の実測図作成および写真撮影を行った。併せて挿図・写真図版等の作成、原稿執筆等の作業を続け、この報告書を刊行するに至った。

III 調査の成果

1 遺構

今回の発掘調査では、古代・中世の掘立柱建物、土坑、墓、井戸、溝、性格不明遺構などを検出した。ここでは17・18各地区の主な遺構を取り上げ、解説を行いたい。

(1) 17地区検出遺構

17地区においては、調査区中央部北側に遺構が最も集中しており、以後調査区中央部遺構密集部分と呼ぶ。いっぽう、調査区南端は遺構がほとんど確認できなかったが、これは地山が砂質土で安定しないことが主たる原因である。また、調査区東端には遺物包含層の存在が認められ、土師器や瓦質土器など中世後半期の遺物が多く含まれていた。

17地区では掘立柱建物20棟を復元したほか、土坑78基、溝44条、井戸3基、墓1基、性格不明遺構4基を検出した。掘立柱建物の時期には若干の幅があるが、中世のものが大半を占める。また調査区北東部に位置するSB9・SB10はともに廂を持つ比較的大きな建物で、この地域の当時の有力者が居住した建物の可能性がある。

溝はいずれも浅く、建物等の区画というよりも、主として排水用の施設として構築されたものと考えられる。土坑は比較的深いものが多く、調査区西側半分に大半が集中していた。

①掘立柱建物跡

SB1(第3図 図版6)

調査区東端に位置する建物跡で、桁行2間(4.9m)×梁行1間(3.7m)、床面積18.13m²を測る。棟方向はN65°Wで、SB11、SB13とほぼ同じである。桁行の柱間が揃っていない。

SB2(第3図 図版6)

調査区東部に位置する建物跡で、桁行2間(2.5m)×梁行1間(2.4m)、床面積6.00m²を測る。棟方向はN17°Eで、隣接するSB5、SB8とほぼ同じである。SB5に伴う納屋のような役割をもつ建物の可能性がある。瓦質土器足鍋(1)ならびに土師器の鍋・皿が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。

SB3(第3図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行2間(5.0m)×梁行2間(3.4m)、床面積17.00m²を測る。棟方向はN69°Wで、南側に隣接するSB4、SB6、SB14とほぼ同じである。土師器碗(2)が出土した。出土遺物から中世前半期の建物と考えられる。

SB4(第4図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行3間(7.1m)×梁行2間(4.0m)、床面積28.40m²を測る。棟方向はN69°Wで、前述のSB3、西側に隣接するSB6とほぼ同じである。

SB5(第4図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行3間(5.3m)×梁行2間(4.7m)、床面積24.91m²を測る。棟方向はN14°Eで、前述のSB2、北西側に位置するSB8とほぼ同じである。遺物は出土していないが、隣接するSB2の棟方向から中世後半期の建物と考えられる。

S B 6(第5図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行2間(3.7m)×梁行1間(2.5m)、床面積9.25m²を測る。棟方向はN70°Wで、S B 3、S B 4、S B 14とほぼ同じである。青磁碗(3)が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。

S B 8(第6図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行3間(5.6m)×梁行2間(3.8m)、床面積21.28m²を測る。棟方向はN15°Eで、前述のS B 2、南東側に位置するS B 5とほぼ同じである。土師器の杯・碗・皿が出土した。出土遺物から中世前半期の建物と考えられる。

S B 9(第6図 図版4)

調査区北東部に位置する建物跡で、桁行3間(6.1m)×梁行2間(3.8m)、床面積23.18m²を測る。棟方向はN77°Wで、隣接するS B 10、南西側に位置するS B 17とほぼ同じである。北面に0.6mの一面廂を有する。白磁片・土師器の杯・碗が出土した。出土遺物から中世前半期の建物と考えられる。

S B 10(第5図 図版4)

調査区北東部の遺構密集地区に位置する建物跡で、桁行3間(8.7m)×梁行2間(4.0m)、床面積34.80m²を測る。今回の調査で検出された20棟の中で最大規模であり、建物西側に欄列を伴う。棟方向はN74°Wで、前述のS B 9、南西側に位置するS B 17とほぼ同じである。南面に1.8mの一面廂を有する。土師器碗(4)・青磁皿(5)ならびに土師器片が出土した。出土遺物から中世前半期の建物と考えられる。隣接するS B 9とともに、集落の中心的役割を担う建物だった可能性もある。

S B 11(第7図 図版4)

調査区中央部東側に位置する建物跡で、桁行2間(4.6m)×梁行2間(3.6m)、床面積16.56m²を測る。桁行の柱間が揃っていない。棟方向はN66°Wで、前述のS B 1、南西側に隣接するS B 13とほぼ同じである。S B 13と一部重複するが、先後関係は不明。青磁碗(6)ならびに土師器片が出土した。

S B 12(第7図 図版4)

調査中央部東側に位置する建物跡で、桁行2間(3.6m)×梁行1間(2.5m)、床面積9.00m²を測る。棟方向はN55°W。土師器の皿(7)ならびに杯が出土した。出土遺物から、中世後半期の建物であると考えられる。

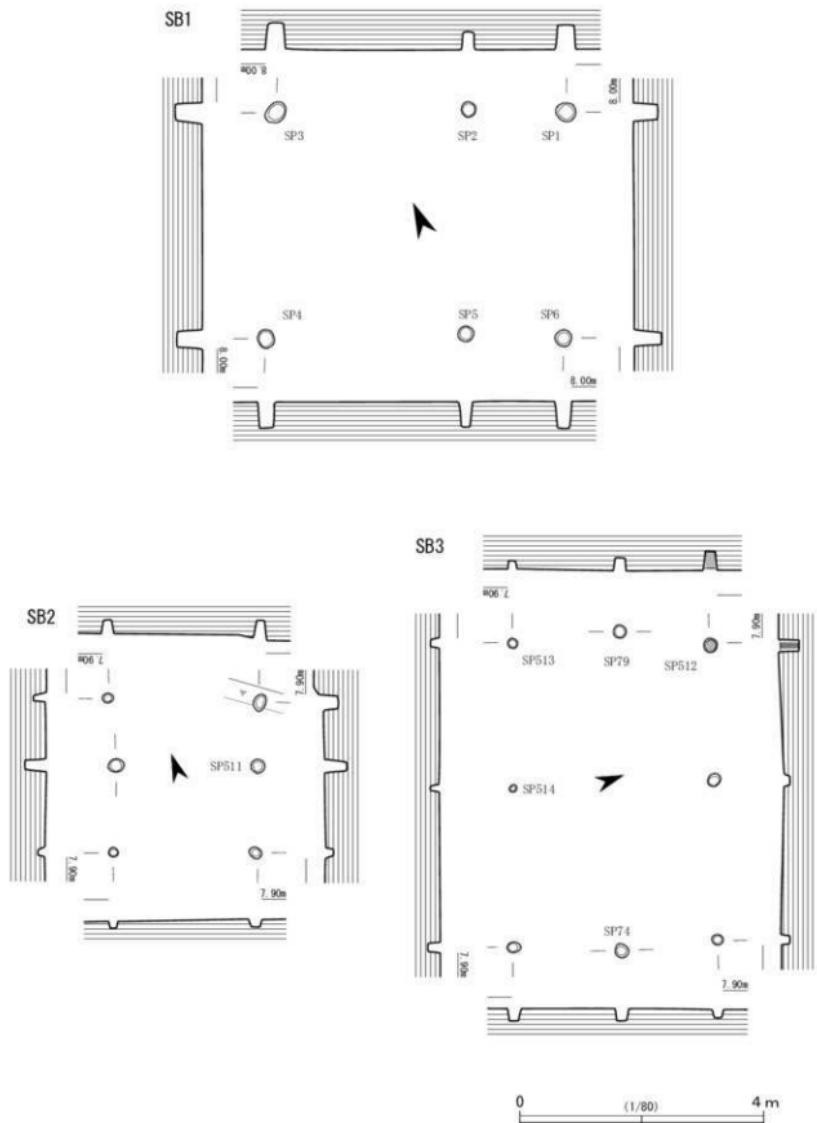
S B 17(第7図 図版5)

調査区中央部遺構密集部分に位置する建物跡で、桁行3間(6.2m)×梁行2間(4.5m)、床面積27.90m²を測る。今回の調査においても大型の建物の部類に属し、個々の柱穴も大きい。棟方向はN75°Wで、前述の一面廂を有するS B 9、同じく大規模な建物のS B 10とほぼ同じである。瓦質土器の擂鉢(11)・鍋・羽釜ならびに土師器の杯・碗が出土した。出土遺物から中世後半期の建物と考えられる。

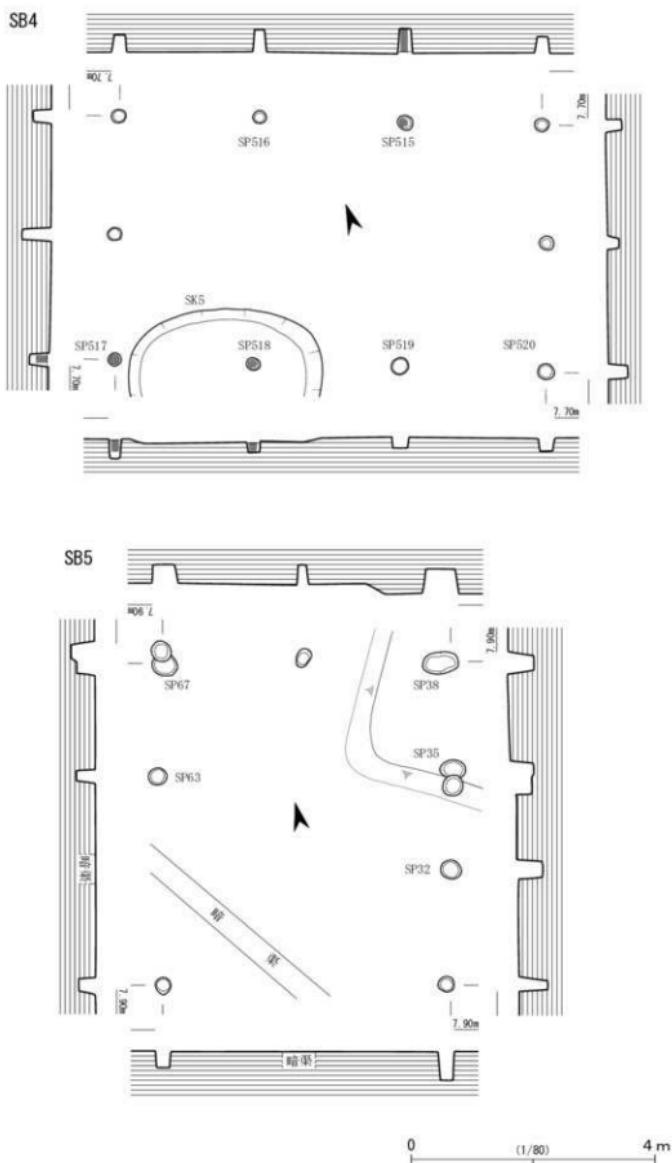
S B 18(第8図 図版5)

調査区中央部西側に位置する建物跡で、桁行3間(5.3m)×梁行2間(3.8m)、床面積20.14m²を測る。棟方向はN16°E。土師器の皿(13)・杯または皿(12)ならびに瓦質土器鍋が出土した。出土遺物から、中世後半期の建物であると考えられる。

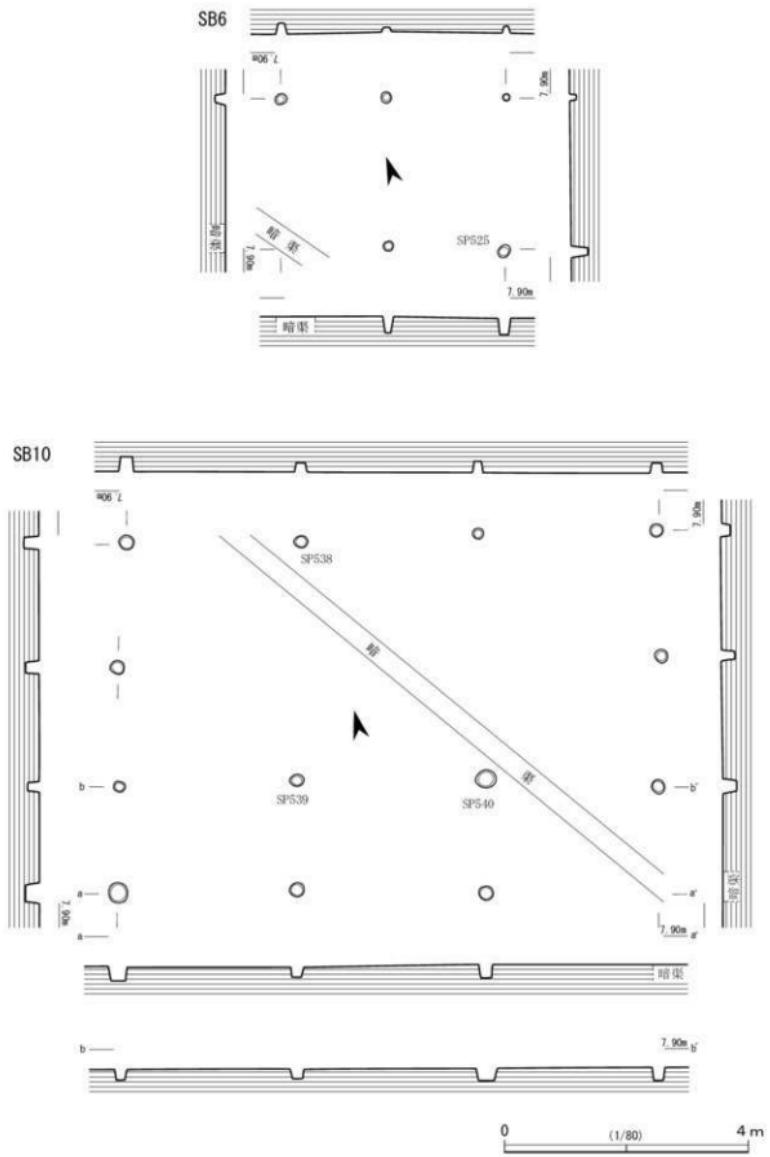
S B 20(第8図 図版6)



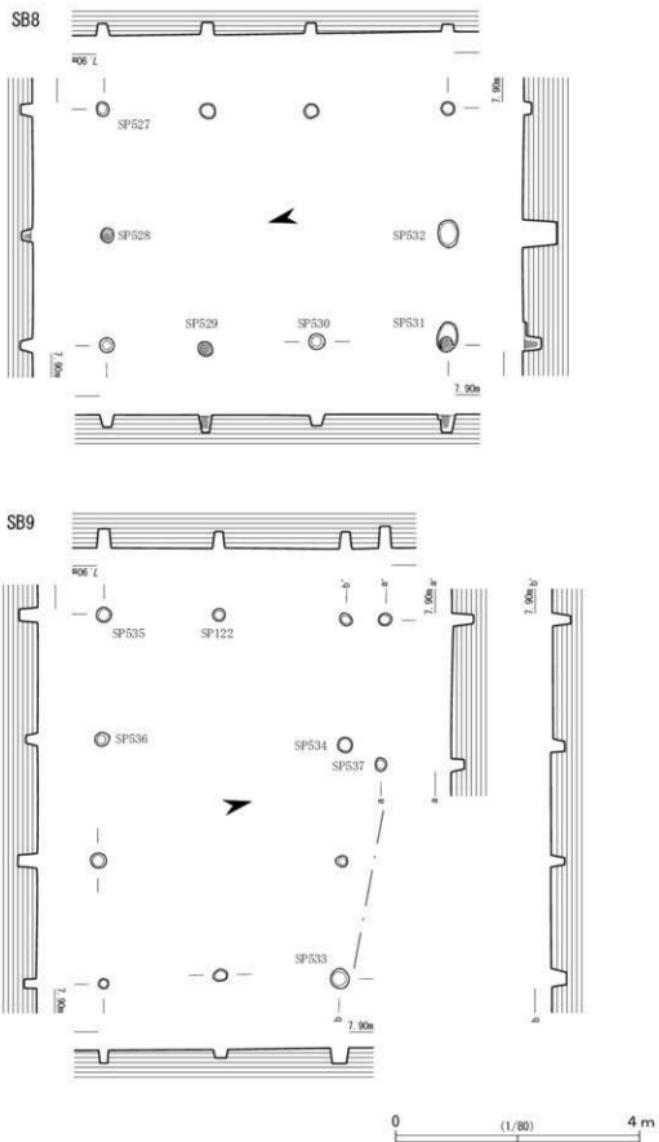
第3図 17地区検出構造実測図(1)



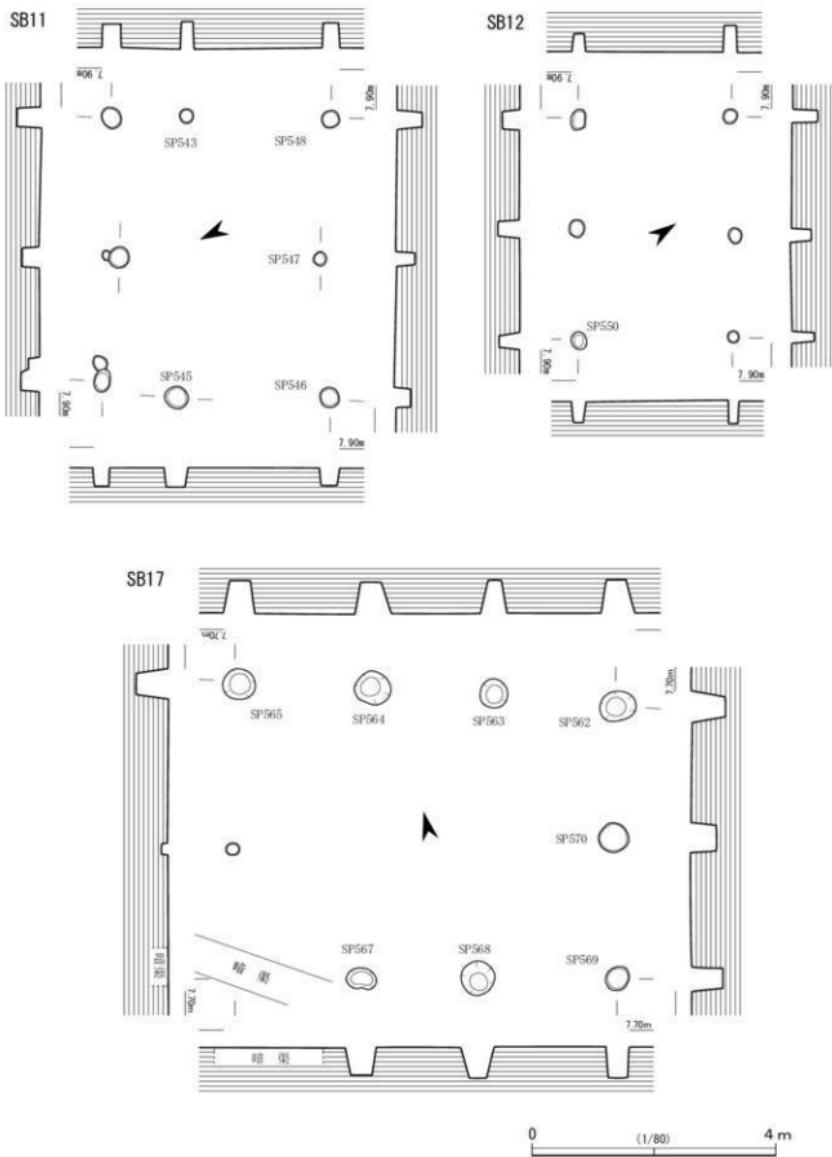
第4図 17地区検出遺構実測図(2)



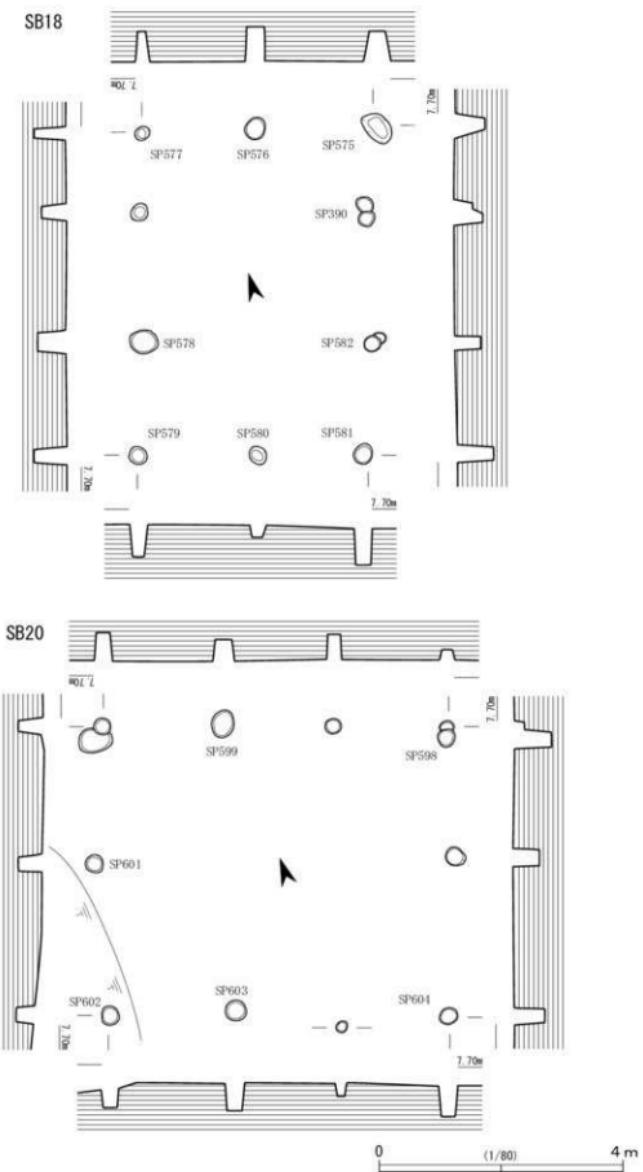
第5図 17地区検出遺構実測図(3)



第6図 17地区検出遺構実測図(4)



第7図 17地区検出遺構実測図(5)



第8図 17地区検出遺構実測図(6)

調査区西部に位置する建物跡で、桁行3間(5.6m)×梁行2間(4.7m)、床面積26.32m²を測る。棟方向はN71°Wで、前述のSB3、SB4、SB6、SB14とはほぼ同じである。土師器皿(16)ならびに瓦質土器鍋・土師器鍋が出土した。出土遺物から、中世後半期の建物であると考えられる。

②柱穴

S P 80(第9図 図版6)

調査区北東部に位置する。平面形は長軸22cm、短軸20cmの円形を呈し、深さは31cmを測る。埋土下層から土師器台付皿(35)が出土した。

S P 88(第9図 図版6)

調査区北東部に位置する。平面形は長軸27cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。埋土下層から土師器皿(17)が出土した。

S P 113(第9図 図版7)

調査区北東部に位置する。平面形は長軸35cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さは31cmを測る。埋土中層から土師器椀(43)が出土した。

S P 134(第9図 図版7)

調査区中央の東側に位置する。平面形は長軸31cm、短軸25cmの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。埋土中層から伏せた土師器皿の上に有孔の土師器台付皿(36)が横向きに置かれた状態で出土した。

S P 257(第9図 図版7)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸41cm、短軸20cmの不整円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土中層から土師器皿(22)ならびに土師器椀、瓦質土器鍋が出土した。

S P 272(第9図 図版7)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸30cm、短軸27cmの不整円形を呈し、深さは10cmを測る。埋土中層から白磁椀(88)が出土した。

S P 338(第10図 図版7)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸27cm、短軸22cmの不整円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土上層から土師器椀(44)、土師器杯(55)が出土した。

S P 352(第10図 図版7)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸25cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。埋土中層から土師器椀(45)、須恵器片口鉢(82)が出土した。

S P 355(図版7)

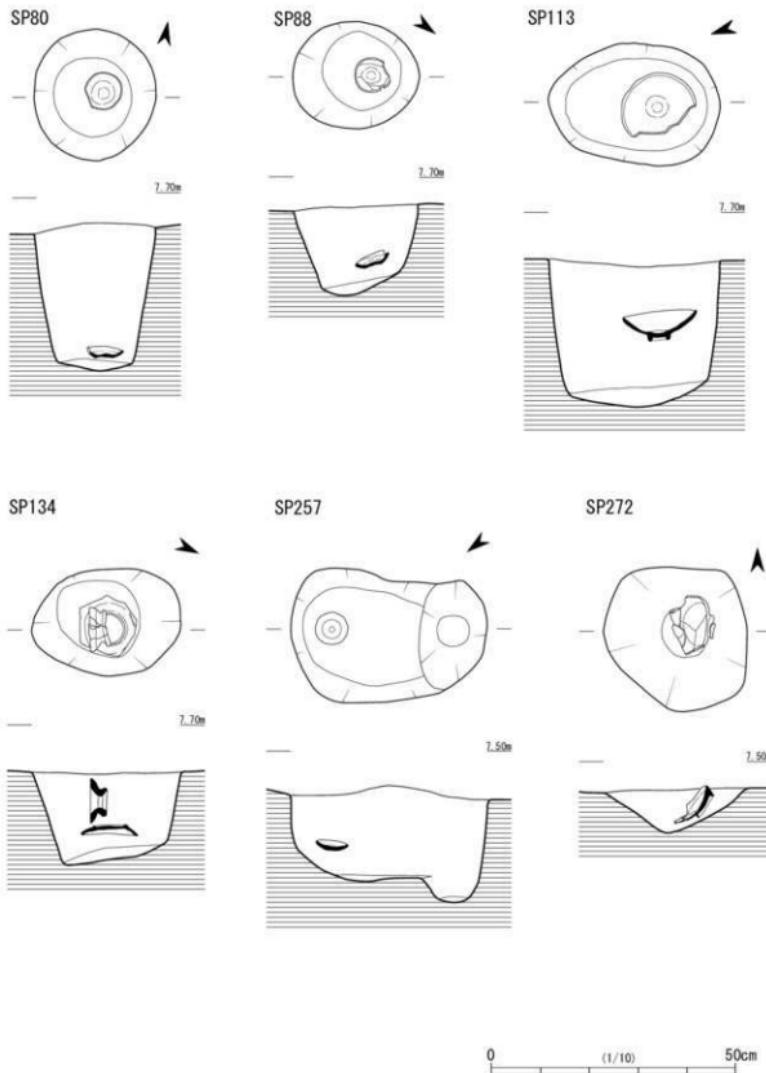
調査区中央部遺構密集部分に位置する。埋土中層から銅錢7枚(皇宋通寶1枚:241、元祐通寶2枚:242・246、聖宋元寶1枚:247、不明銭3枚:243~245)が出土した。

S P 376(第10図 図版7)

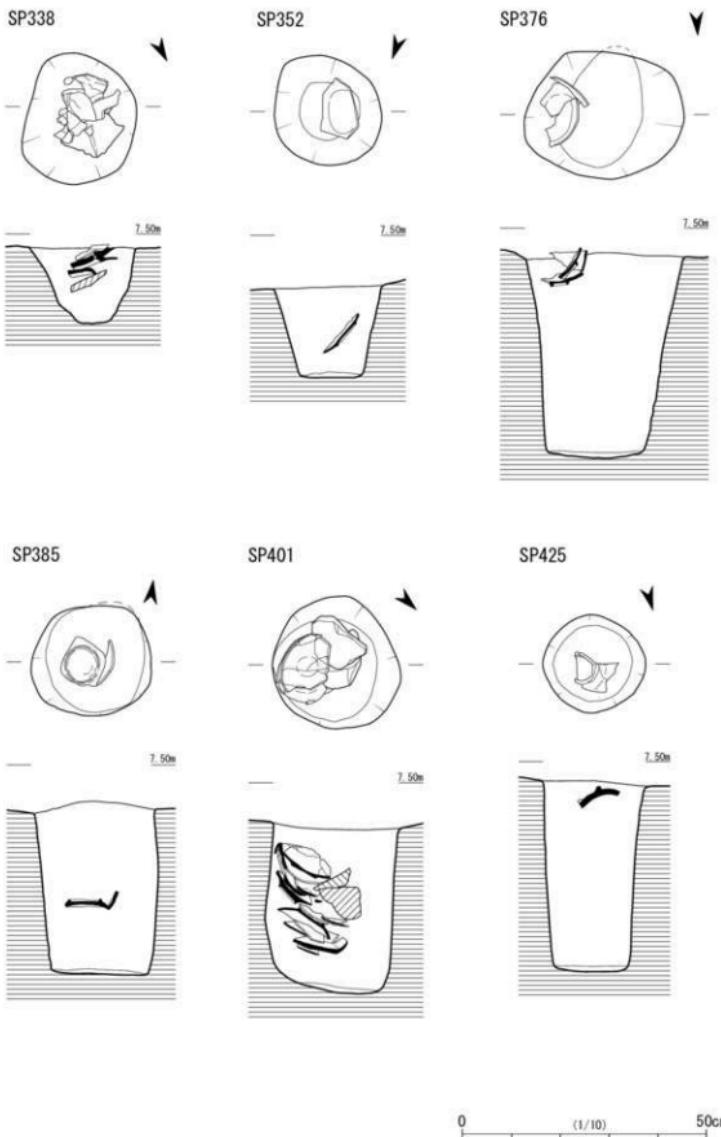
調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸33cm、短軸26cmの楕円形を呈し、深さは42cmを測る。埋土上層から土師器椀(47)ならびに土師器杯が出土した。

S P 385(第10図 図版8)

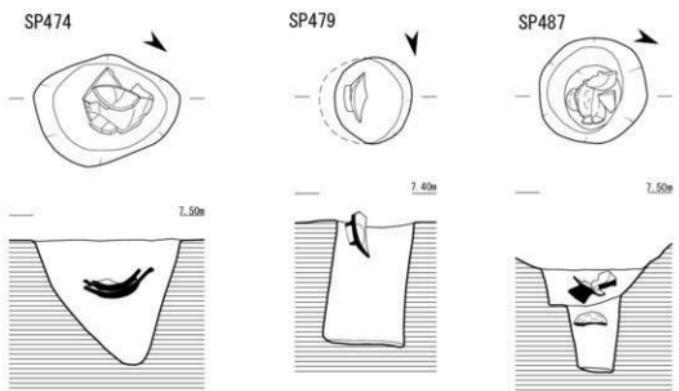
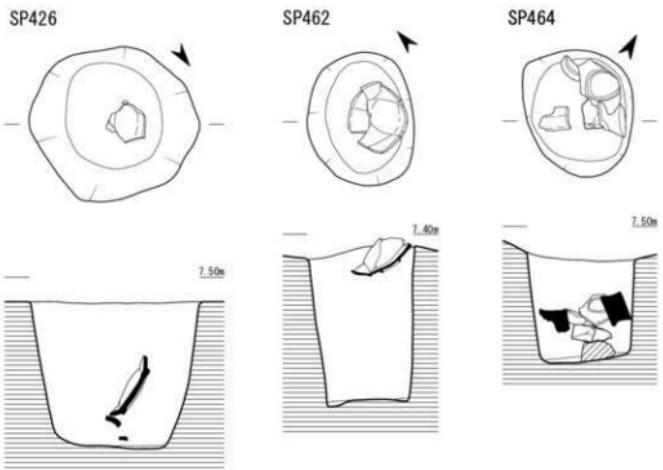
調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸25cm、短軸24cmの円形を呈し、深さは36cmを



第9図 17地区検出遺構実測図(7)

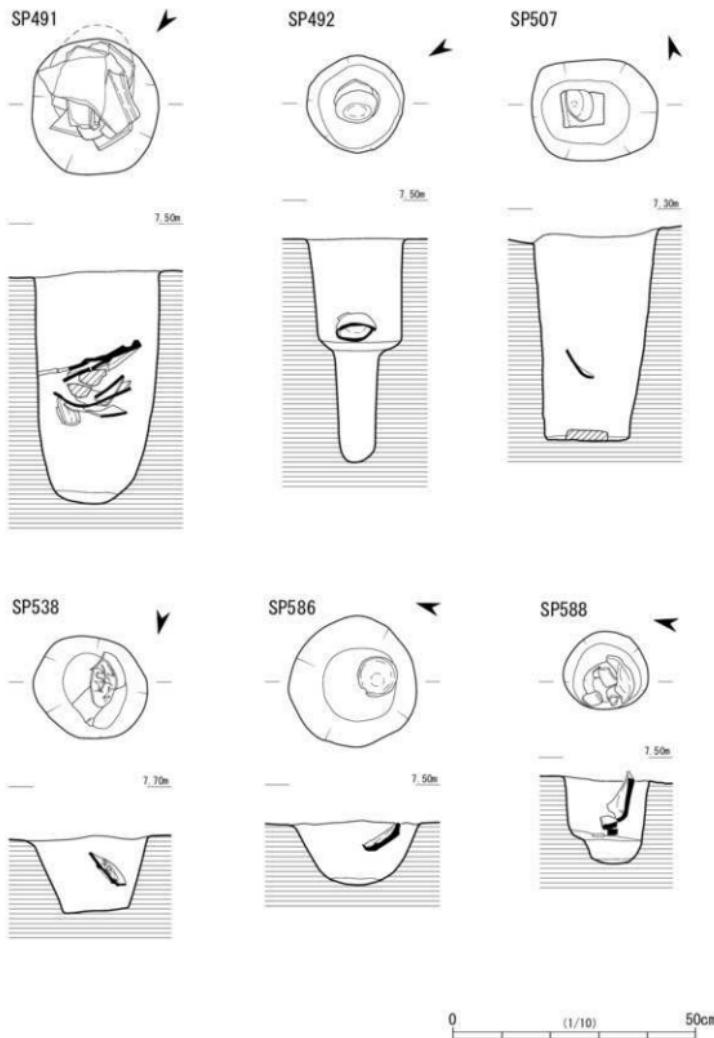


第10図 17地区検出遺構実測図(8)



0 (1/10) 50cm

第 11 図 17 地区検出遺構実測図 (9)



第12図 17地区検出遺構実測図(10)

測る。埋土中層から土師器椀(46)、土師器杯(58)が出土した。

S P 401(第10図 図版8)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸27cm、短軸25cmの円形を呈し、深さは36cmを測る。埋土中層から土師器杯4点(61~64)、土師器椀2点(48・49)、土師器羽釜(72)が出土した。

S P 425(第10図 図版8)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸22cm、短軸21cmの円形を呈し、深さは39cmを測る。埋土上層から土師器杯(59)、青磁椀(93)が出土した。

S P 426(第11図 図版8)

調査区中央部遺構密集部分に位置する。平面形は長軸35cm、短軸31cmの不整円形を呈し、深さは31cmを測る。埋土中層から土師器椀(50)が出土した。

S P 462(第11図 図版8)

調査区中央部西側に位置し、S D 30を切る。平面形は長軸28cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。埋土上層から土師器椀(51)ならびに土師器の皿・杯・椀が出土した。

S P 464(第11図 図版8)

調査区中央部西側に位置し、S D 27を切る。平面形は長軸27cm、短軸22cmの不整円形を呈し、深さは23cmを測る。埋土中層から土師器台付皿(38)、土師器椀(52)、支脚状土製品(97)が出土した。

S P 474(第11図 図版6)

調査区北東部に位置し、S B 19を構成する柱穴のひとつである。平面形は長軸30cm、短軸21cmの不整円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土中層から土師器杯2点(14・15)が出土した。

S P 479(第11図 図版8)

調査区北西部に位置する。平面形は長軸18cm、短軸16cmの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土上層から白磁椀(89)が出土した。

S P 487(第11図 図版8)

調査区北西部に位置し、S K 36を切る。平面形は長軸23cm、短軸23cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。埋土上層から土師器台付皿(41)ならびに土師器の杯・椀が出土した。

S P 491(第12図 図版9)

調査区北西部に位置する。平面形は長軸29cm、短軸26cmの楕円形を呈し、深さは49cmを測る。埋土中層から土師器皿2点(29・30)、陶器(96)、瓦質土器火鉢(84)が出土した。

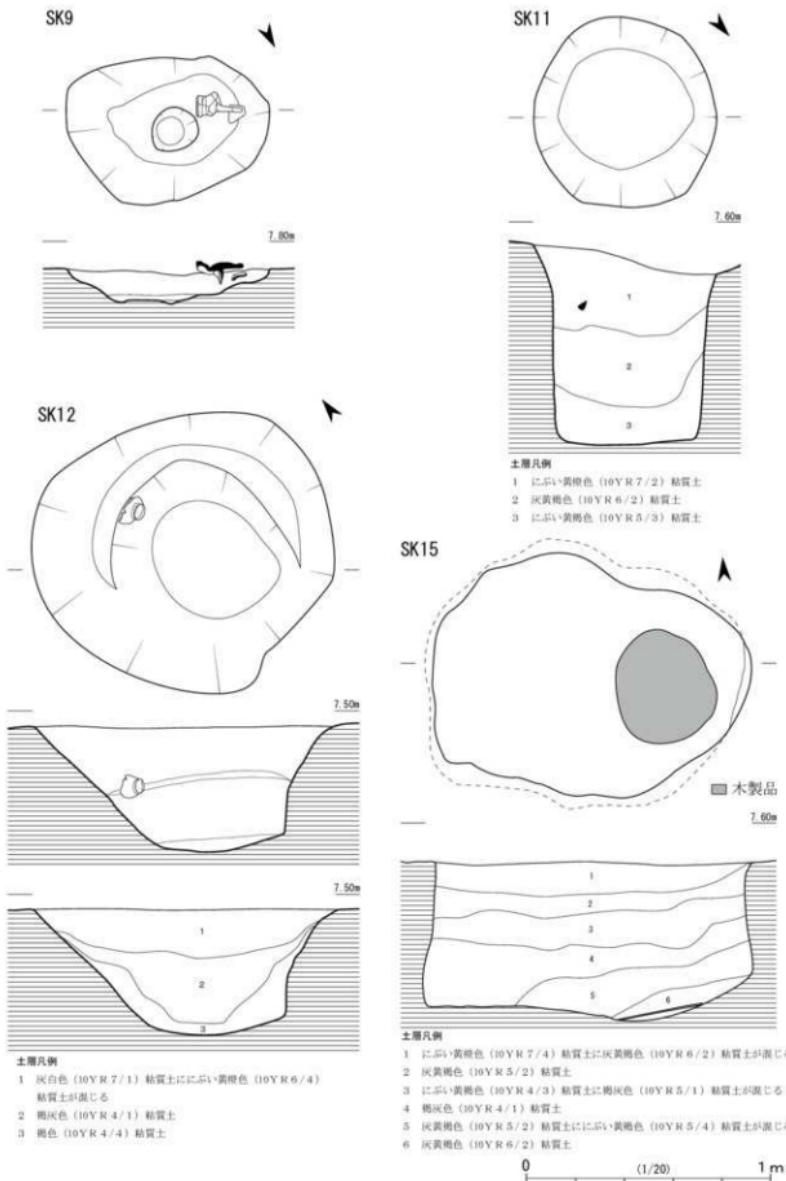
S P 492(第12図 図版9)

調査区北西部に位置する。平面形は長軸21cm、短軸20cmの円形を呈し、深さは47cmを測る。埋土中層から土師器皿2点(31・32)が口縁を合わせて重ねた状態で出土しており、建物廃絶時の地鎮行為によるものと考えられる。

S P 507(第12図)

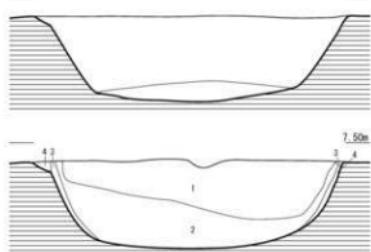
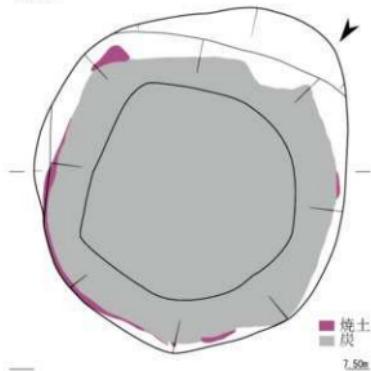
調査区西部に位置する。平面形は長軸26cm、短軸21cmの楕円形を呈し、深さは43cmを測る。埋土中層から土師器皿(33)が出土した。

S P 538(第12図 図版9)



第13図 17地区検出構造実測図 (11)

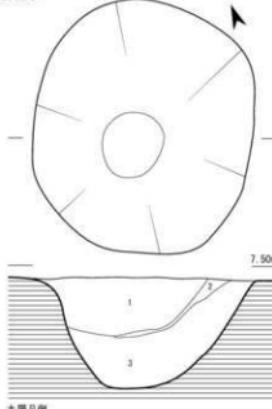
SK32



土層凡例

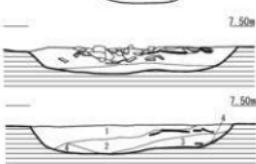
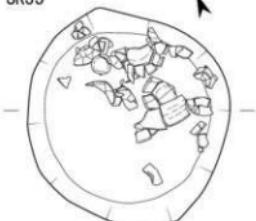
- 1 明黄褐色 (10YR 7/6) 粘質土 マンガン。炭を少量含む
- 2 黑褐色 (5YR 2/1) 硫鐵
- 3 棕色 (5YR 6/8) 粘質土 固く締まる
- 4 黄褐色 (10YR 8/8) 粘質土 炭を少暈含む

SK33



- 土層凡例
- 1 灰白色 (10YR 7/1) 粘質土に明黄褐色 (10YR 6/6) 粘質土ブロックが混じる マンガンを多く含む
 - 2 黒色 (10YR 2/1) 硫鐵、鐵鉻?
 - 3 黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土に褐灰色 (10YR 6/1) 粘質土が混じる

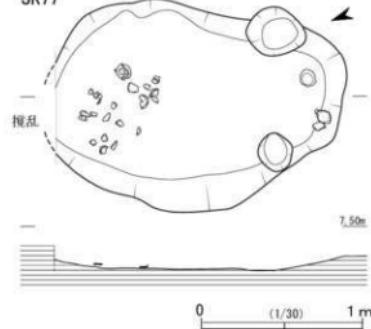
SK35



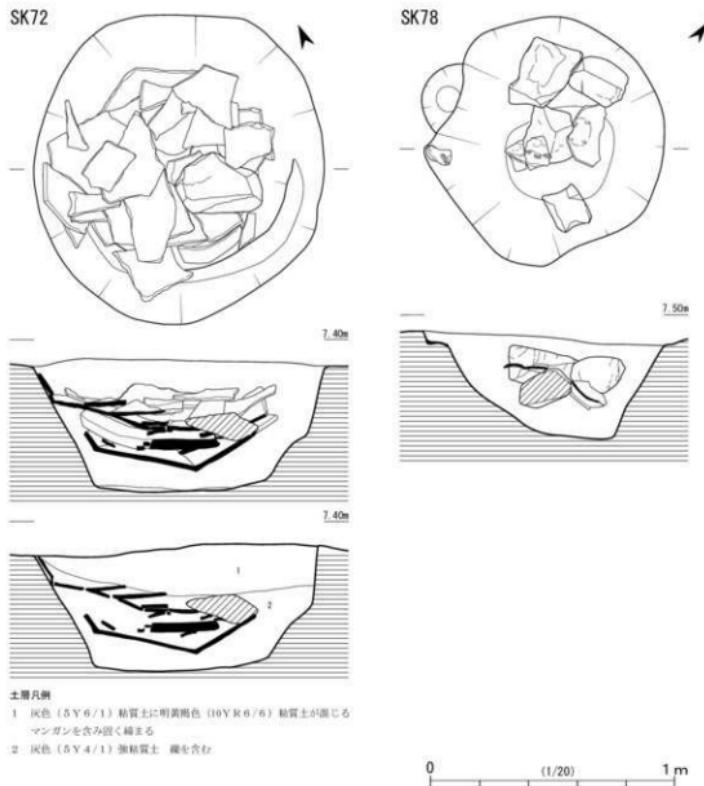
土層凡例

- 1 褐灰色 (2.5YR 4/1) 粘質土に明黄褐色 (10YR 5/6) 粘質土、炭白色 (5Y 7/2) 粘土ブロックが混じる
- 2 褐灰色 (2.5YR 4/1) 強粘質土 炭を少暈含む
- 3 褐灰色 (10Y 7/1) 強粘質土
- 4 黒色 (5Y 2/1) 強粘質土

SK77



第14図 17地区検出遺構実測図 (12)



第15図 17地区検出遺構実測図(13)

調査区中央部北側に位置し、S B10を構成する柱穴のひとつである。平面形は長軸24cm、短軸21cmの楕円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土中層から青磁皿(5)が出土した。

S P 586(第12図 図版9)

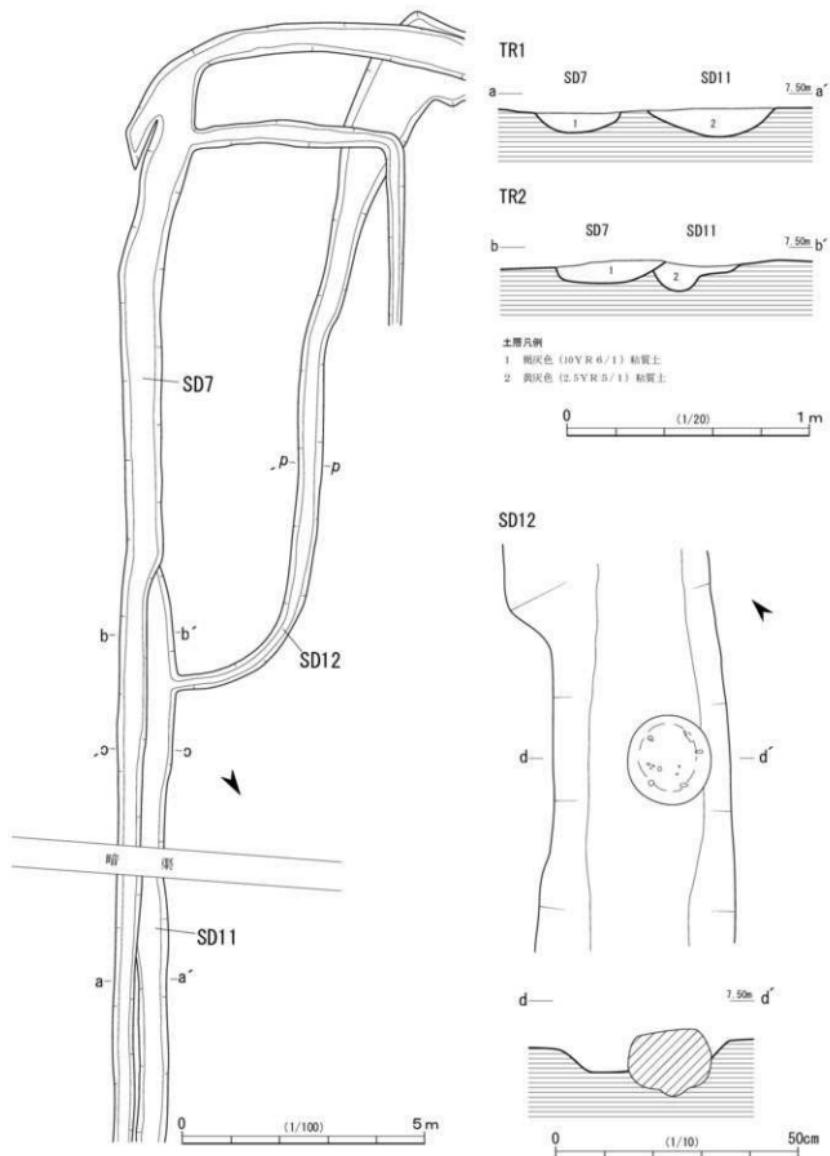
調査区中央部北側に位置する。平面形は長軸28cm、短軸26cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。埋土上層から土師器杯(65)、土師器皿(34)が出土した。

S P 588(第12図 図版9)

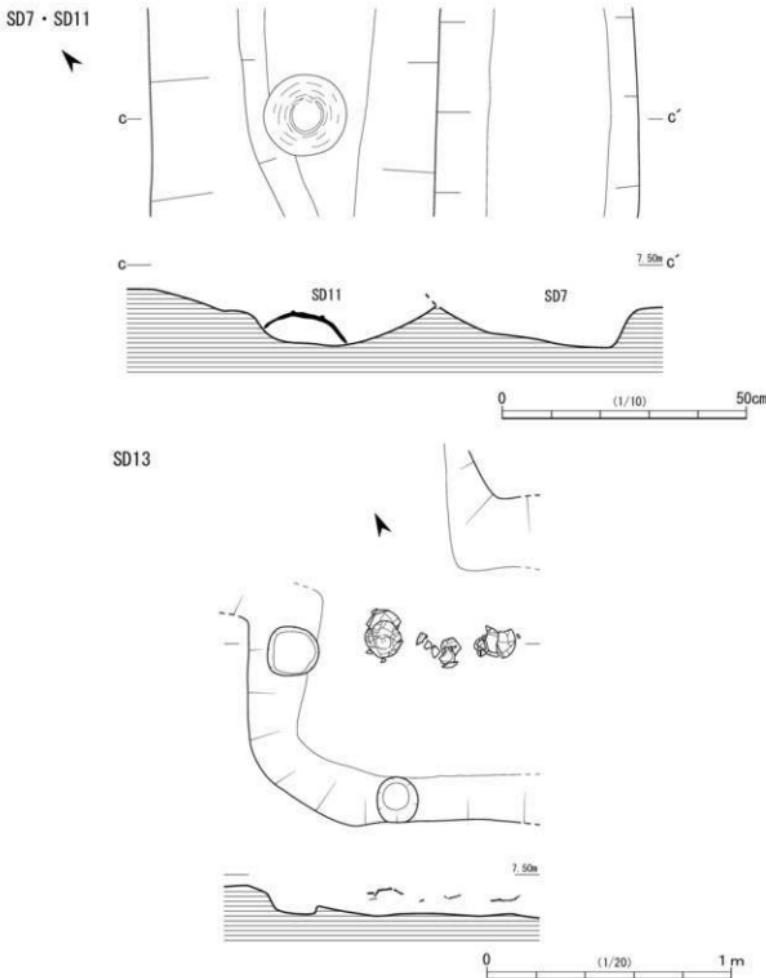
調査区中央部西側に位置する。S D28を切り、平面形は長軸18cm、短軸16cmの楕円形を呈し、深さは19cmを測る。埋土上層から土師器杯(66)ならびに土師器の皿・椀・鍋が出土した。

③土坑

S K 9(第13図 図版9)



第16図 17地区検出遺構実測図 (14)



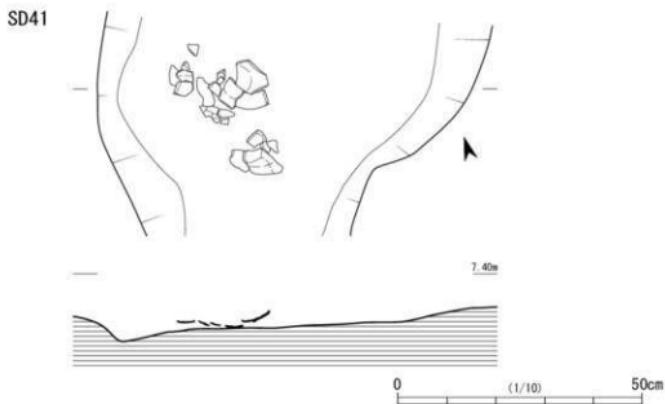
第17図 17地区検出遺構実測図(15)

調査区南東部に位置する。平面形は長軸84cm、短軸58cmの不整円形を呈し、深さは14cmを測る。瓦質土器足鍋(100)が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S K 11(第13図 図版9)

調査区中央部南側に位置する。平面形は長軸78cm、短軸75cmの円形を呈し、深さは82cmを測る。床面直上から、瓦質土器鍋(101)が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S K 12(第13図 図版9)



第18図 17地区検出遺構実測図(16)

調査区中央部に位置する。平面形は長軸126cm、短軸109cmの不整円形を呈し、深さは52cmを測る。埋土は3層で、中層から青磁碗(103)が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S K 15(第13図 図版10)

調査区中央部北側に位置し、S D20を切る。平面形は長軸131cm、短軸90cmの不整円形を呈し、深さは66cmを測る。埋土は6層で、下層はフラスコ状にオーバーハングする。床面直上から瓦質土器擂鉢(104)が出土した。また、床面から約40cm大の円形状の木製品が出土したが、用途は不明である。

S K 32(第14図 図版10)

調査区中央部西側に位置する。平面形は長軸147cm、短軸131cmの楕円形を呈し、深さは35cmを測る。埋土は4層でいずれも炭を多く含むが、特に2層は10~30cm堆積した炭層である。また、壁全体に被熱痕が広がり、内部で何らかの焼成が行われたものと考えられる。鉄釘(118)が出土した。

S K 33(第14図 図版10)

調査区北西部に位置する。平面形は長軸104cm、短軸90cmの楕円形を呈し、深さは47cmを測る。瓦質土器火鉢が出土したが、小片のため図化していない。

S K 35(第14図 図版11)

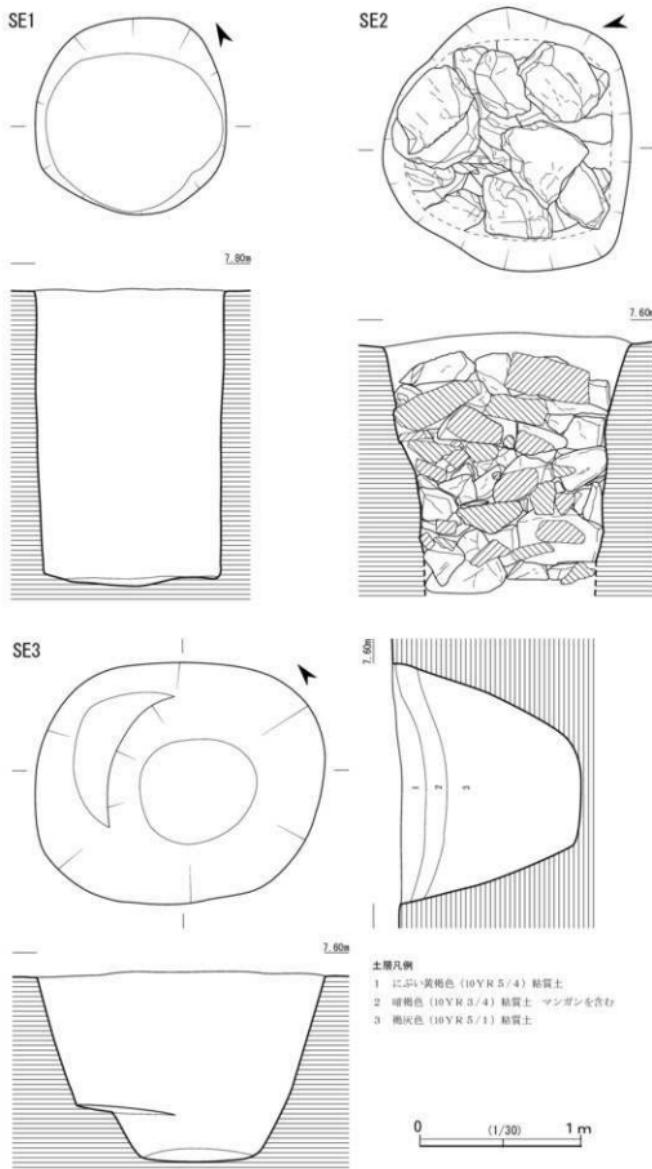
調査区北西部に位置する。平面形は長軸187cm、短軸166cmの円形を呈し、深さは22cmを測る。埋土は4層で、土師器皿(126)、土師器碗5点(127~131)、土師器杯3点(132~134)、須恵器片口鉢(135)がまとまって出土し、良好な一括資料となった。出土遺物から時期は古代後半期に比定される。

S K 72(第14図 図版11)

調査区西部に位置する。平面形は長軸120cm、短軸126cmの円形を呈し、深さは56cmを測る。埋土は2層で、下層から瓦質土器大甕(145)が出土した。出土遺物から時期は中世末~近世初頭に比定される。

S K 77(第14図 図版12)

調査区中央部北西端に位置し、S D41を切るとともに、S P 508に切られる。平面形は長軸190cm、



第19図 17地区検出遺構実測図 (17)

短軸124cmの楕円形を呈し、深さは12cmを測る。埋土は褐灰色粘質土の単層。底面から土師器皿3点(138～140)、土師器椀(141)、土師器杯(142)、白磁椀(143)が出土した。出土遺物から時期は中世前半期に比定される。

S K 78(第15図 図版12)

調査区中央部北端に位置する。平面形は長軸102cm、短軸87cmの不整円形を呈し、深さは44cmを測る。埋土は灰黄褐色の単層。瓦質土器湯釜(136)、陶器鉢(137)、土師器皿、瓦質土器鍋が出土した。

④溝

S D 11(第16図 図版13)

調査区中央部に位置し、ほぼ南北方向にのびる。S D 7を切る。確認長は26.20m、幅0.28～0.82m、深さ0.09～0.11mを測る。土師器皿(154)、土師器杯(155)、土師器椀(156)、瓦質土器鍋(157)、土師質土器鍋(158)、瓦質土器擂鉢(159)、土師質土器足鍋(160)ならびに多くの土師器片や瓦質土器片等が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S D 12(第16図 図版13)

調査区中央部に位置し、S D 11から分流して途中からほぼ直角に西方向に屈曲する。確認長は14.90m、幅0.26～1.44m、深さ0.04～0.15mを測る。瓦質土器鍋(161)と伏せられた状態の五輪塔の空輪(162)が出土した。

S D 13(第17図 図版12)

調査区中央部造構密集部分に位置し、ほぼ東西方向にのびる。確認長は23.32m、幅1.30～5.16m、深さ0.05～0.23mを測る。土師器皿4点(163～166)、土師器杯6点(169～174)、土師器台付皿(167)、白磁椀(168)、土師器香炉(175)、土師質土器鍋(176)、瓦質土器鍋2点(177・181)、土師器土器足鍋(178)、瓦質土器擂鉢(179)、土師質土器擂鉢(180)、瓦質土器捏鉢(182)、石鍋(183)ならびにおびただしい量の土師器片・瓦質土器片等が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S D 41(第17図 図版13)

調査区西端に位置し、ほぼ南北方向にのびる。確認長は10.92m、幅0.40～1.22m、深さ0.05～0.15mを測る。土師器の皿(189)、杯2点(194・195)、椀あるいは杯(196・197)、台付皿2点(190・191)、椀2点(192・193)ならびに多量の土師器片・瓦質土器片等が出土した。

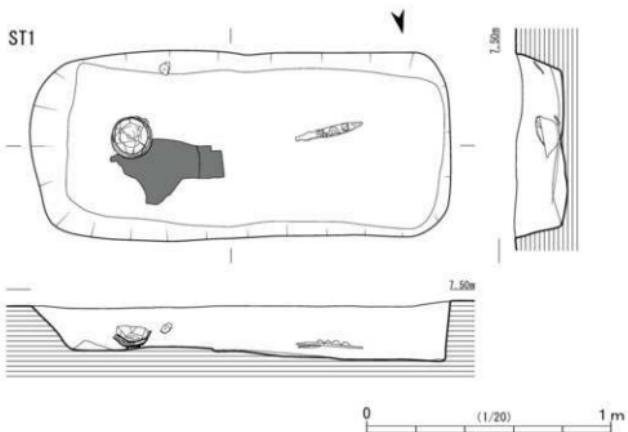
⑤井戸

S E 1(第18図 図版13)

調査区北東部に位置する素掘りの井戸である。平面形は長軸81cm、短軸79cmの円形を呈し、深さは122cmを測る。埋土は3層に分かれ、下層は褐灰色粘質土と被熱痕を伴う20～30cm四方の礫約20個ならびに土師器皿(198)、石臼(203)、瓦質土器足鍋2点(199・201)、瓦質土器火鉢(202)が混在しており、人為的に短期間で埋められたものと推測される。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

S E 2(第18図 図版13)

調査区南東部に位置する素掘りの井戸である。平面形は長軸109cm、短軸100cmの楕円形を呈する。深さ1.1mで湧水量が増したため、作業の安全上掘り込みを中止した。遺構内部には、白磁椀(205)、土師質土器甕2点(206・207)、瓦質土器擂鉢(208)、土師器皿(204)と、投棄されたとみられる20～30



第20図 17地区検出遺構実測図(18)

cm四方の大量の礫が混在していた。

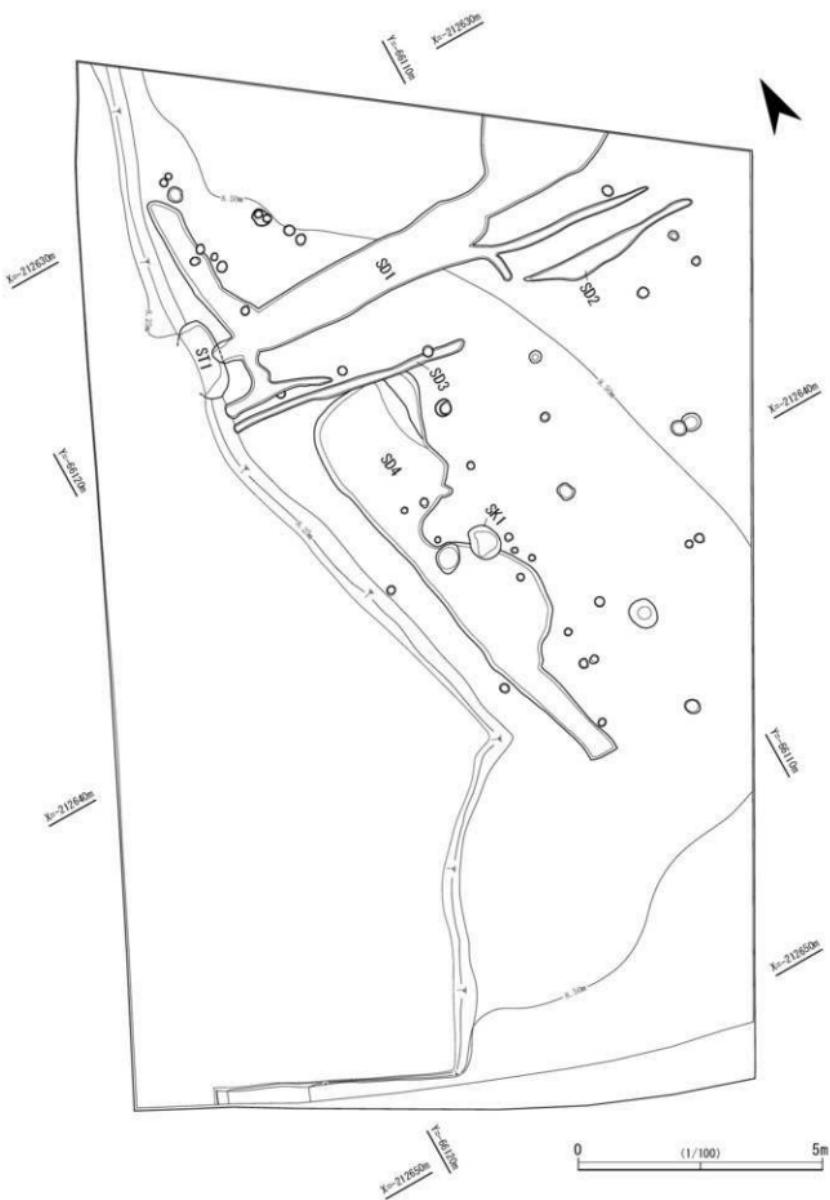
S E 3(第18図 図版13)

調査区中央部北端に位置する素掘りの井戸である。平面形は長軸178cm、短軸149cmの楕円形を呈し、深さは117cmを測る。埋土は3層に分かれ、3層中部では投棄されたとみられる20cm四方の礫10数個と大量的自然木が混在していた。また、3層下部から土師器杯(213)、土師器皿3点(209~211)、曲物の底板(214)、瓦質土器足鍋(212)、小柄(215)が出土した。出土遺物から時期は中世後半期に比定される。

⑥墓

S T 1(第19図 図版14)

調査区中央部南側に位置する土坑墓である。平面形は長軸173cm、短軸76cmの隅丸長方形を呈し、深さは25cmを測る。埋土は単層で、褐灰色粘質土が混在する黄褐色粘質土である。墓坑の東端から副葬品と考えられる土師器皿5点(216~220)、土師器杯(221)、青磁碗(222)が重なった状態で出土した。また墓坑中央部からは鉄製小刀(223)、用途不明鉄製品(224)が出土した。床面直上で黒色の漆膜が確認されたが、鳥帽子の布に塗布されたものと考えられる。布の痕跡は残っていない。人骨ならびに歯冠は残存していなかったが、自然科学分析の結果、上層よりも中層・下層でリン酸値が高く、遺体などリン酸を多く含む物質が埋納されていた可能性が高いとの所見を得ている。詳しい分析結果は付編2を参照されたい。出土遺物から時期は中世前半期に比定される。



第21図 18地区遺構配置図

(2) 18地区検出遺構

18地区においては、後世の開発時に傾斜地が削平されているため、遺構の残存状態は良くない。今回の調査で土坑2基、溝4条、墓1基を検出したが、掘立柱建物跡を確認することはできなかった。

①土坑

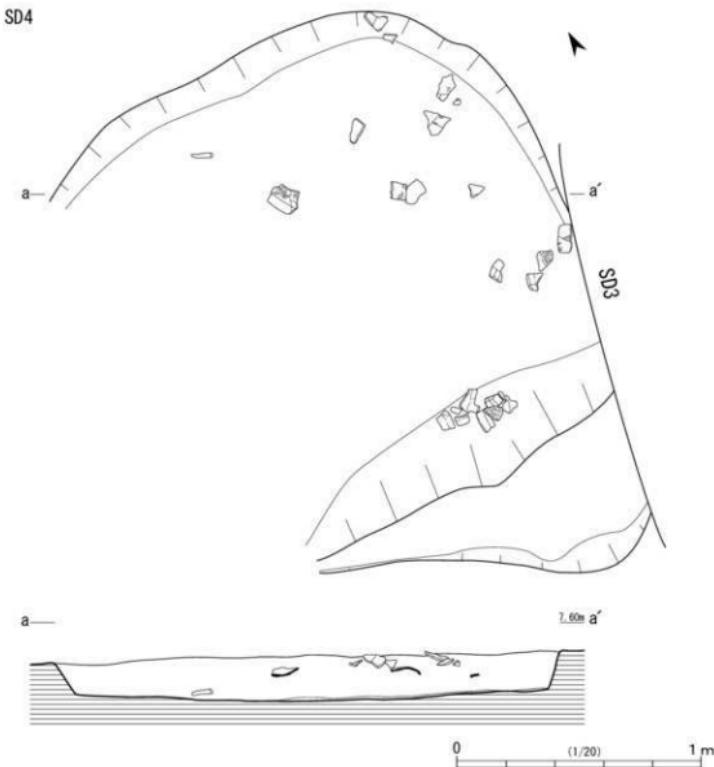
S K 1 (第22図 図版16)

調査区中央部に位置し、S D 4 を切る。平面形は長軸72cm、短軸62cmの不整円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土は2層で、にぶい黄褐色粘質土の上に褐灰色粘質土が堆積する。土師質土器鍋(225)ならびに土師器の皿・羽釜が出土した。出土遺物から時期は、中世後半期に比定される。

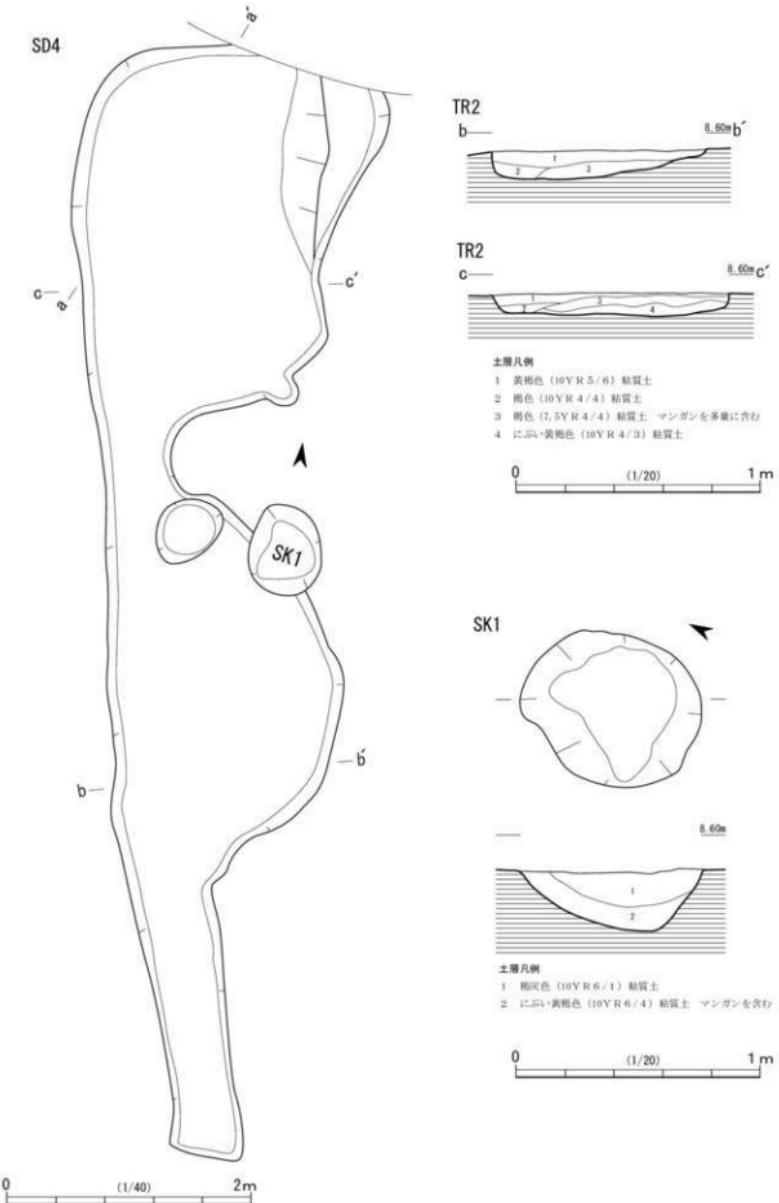
②溝

S D 4 (第21・22図 図版16)

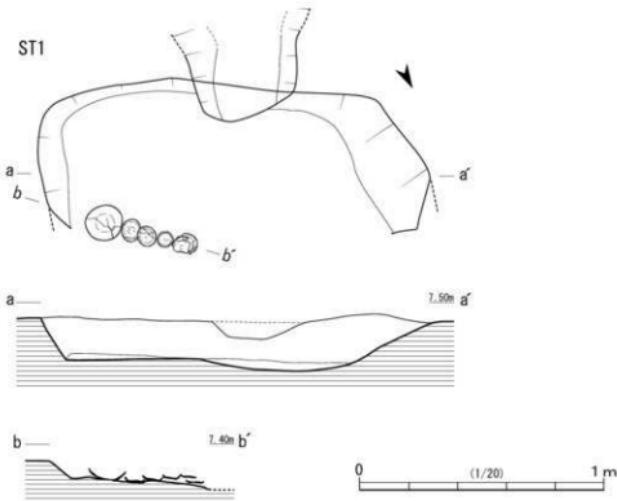
調査区中央部に位置し、ほぼ南北方向にのびる。S D 3・S K 1 に切られる。確認長は9.40m、幅0.58



第22図 18地区検出遺構実測図(1)



第 23 図 18 地区検出遺構実測図 (2)



第24図 18地区検出遺構実測図(3)

~1.92m、深さ0.13~0.23mを測る。瓦質土器の足鍋4点(226~229)、焰烙(230)、白磁椀(231)、瓦質土器足鍋脚部(232)、用途不明鉄製品(233)・鉄釘(234)・銅錢(248)が出土した。出土遺物から時期は、中世後半期に比定される。

③墓

S T 1 (第23図 図版16)

調査区北東部に位置する土坑墓で、西側部分が削平されており、東側部分もS D 1に一部切られる。残存する平面形は楕円形を呈し、長軸163cm、短軸62cm、深さは24cmを測る。埋土は単層で褐色粘質土。底面から副葬品と考えられる土師器皿5点(235~239)、土師器杯(240)が直線上に並んだ状態で出土した。人骨ならびに歯冠は残存していなかった。出土遺物から時期は中世前半期に比定される。自然科学分析では、周辺土との間でリン酸値の有意な差が確認できなかったが、遺構の形状ならびに土器の出土状況から墓と判断した。詳しい分析結果は、付編2を参照されたい。

第1表 据立柱建物跡一覧表

遺構番号	地区	規模 (間)	棟方向	柱 間		面積 (m ²)	出土遺物	備考
				平行	梁行			
SB 1	17	2 × 1	N65°W	4.9 (1.6-3.3)	3.7	18.13		
SB 2	17	2 × 1	N17°E	2.5 (1.4-1.1)	2.4	6.00	土師器 瓦質土器	中世
SB 3	17	2 × 2	N69°W	5.0 (2.6-2.4)	3.4 (1.8-1.6)	17.00	土師器	中世
SB 4	17	3 × 2	N69°W	7.1 (2.4-2.4-2.3)	4.0 (2.0-2.0)	28.40	土師器	
SB 5	17	3 × 2	N14°E	5.3 (1.9-1.4-2.0)	4.7 (2.4-2.3)	24.91		柱間北東隅から 中世
SB 6	17	2 × 1	N70°W	3.7 (2.0-1.7)	2.5	9.25	青磁	中世
SB 7	17	2 × 2	N26°E	4.3 (2.1-2.2)	3.1 (1.5-1.6)	13.33	土師器	
SB 8	17	3 × 2	N15°E	5.6 (2.2-1.7-1.7)	3.8 (2.0-1.8)	21.28	土師器	中世
SB 9	17	3 × 2	N77°W	6.1 (2.0-2.0-2.1)	3.8 (1.9-1.9)	23.18	土師器 白磁	北面に廻 (0.6m) 中世
SB10	17	3 × 2	N74°W	8.7 (2.9-2.9-2.9)	4.0 (2.0-2.0)	34.80	土師器 青磁	柱間北東隅から 南面に廻 (1.8m) 中世
SB11	17	2 × 2	N66°W	4.6 (2.3-2.3)	3.6 (2.4-1.2)	16.56	土師器、青磁 瓦質土器	
SB12	17	2 × 1	N55°W	3.6 (1.8-1.8)	2.5	9.00	土師器	中世
SB13	17	2 × 1	N65°W	3.5 (1.7-1.8)	3.4	11.90	瓦質土器 土師器	中世
SB14	17	2 × 1	N70°W	3.9	3.8 (2.0-1.8)	14.82		
SB15	17	2 × 1	N19°E	3.7	3.4 (1.7-1.7)	12.58	土師器	
SB16	17	2 × 1	N81°W	3.8 (1.6-2.2)	2.4	9.12	土師器	古代
SB17	17	3 × 2	N75°W	6.2 (2.0-2.0-2.2)	4.5 (2.2-2.3)	27.90	土師器 瓦質土器	柱間北東隅から 中世
SB18	17	3 × 2	N16°E	5.3 (1.8-2.0-1.5)	3.8 (1.8-2.0)	20.14	土師器 瓦質土器	中世
SB19	17	(3 × 2)	N83°E	8.2 (2.5-3.0-2.7)	2.7	-		
SB20	17	3 × 2	N71°W	5.6 (1.8-1.7-2.1)	4.7 (2.6-2.1)	26.32	土師器、白磁 青磁、瓦質土器	中世

2 遺物

調査の結果、古代(平安時代後期)、中世(鎌倉・室町時代)、近世(江戸時代初期)の各時代の遺物が出土した。主な遺物の種類としては、土師器・瓦質土器・須恵器・輸入磁器・国産陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品などがある。柱穴・土坑・溝・井戸・墓などの遺構に伴う出土遺物が比較的多く、良好な一括資料を得ることができた。

なお、各遺物の法量や調整・特徴などについては、遺物観察表に掲載している。

(1) 17地区出土遺物 (第25~36図 図版17~31)

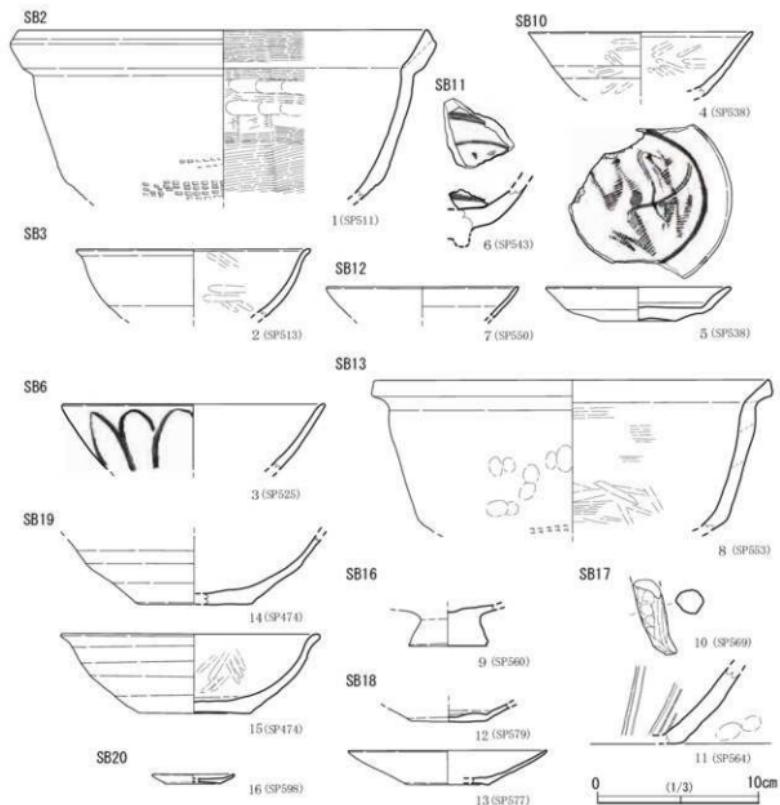
①掘立柱建物跡出土遺物 (第25図 図版17)

1はSB2出土の瓦質土器足鍋で、口縁下部に強く横ナデを施し、口縁端部は上方に拡張する。2はSB3出土の土師器碗あるいは杯で、口縁部は外反する。3はSB6出土の龍泉窯系の青磁碗で、蓮弁は鋸がなく平面的である。4はSB10出土の土師器碗あるいは杯で、体部は直線的に開き、端部は細く尖る。5は同安窯系の青磁皿で、内面に櫛目文を施す。6はSB11出土の龍泉窯系の青磁碗である。7はSB12出土の土師器皿あるいは杯で、内外ともに丁寧なナデを施す。8はSB13出土の瓦質土器足鍋である。9はSB16出土の土師器台付皿で、高台は底部に向かって次第に開き、皿部との境がくびれる。10~11はSB17出土の遺物である。10は瓦質土器足鍋の脚部で、先端部は外方へ屈曲する。11は瓦質土器擂鉢である。12~13はSB18出土の遺物である。12は土師器皿あるいは杯。13は土師器皿である。14~15はSB19出土の遺物で、ともに土師器杯である。15は口縁部が外反する。16はSB20出土の土師器皿である。復元口径5.0cm、器高0.6cmと極めて小さい。

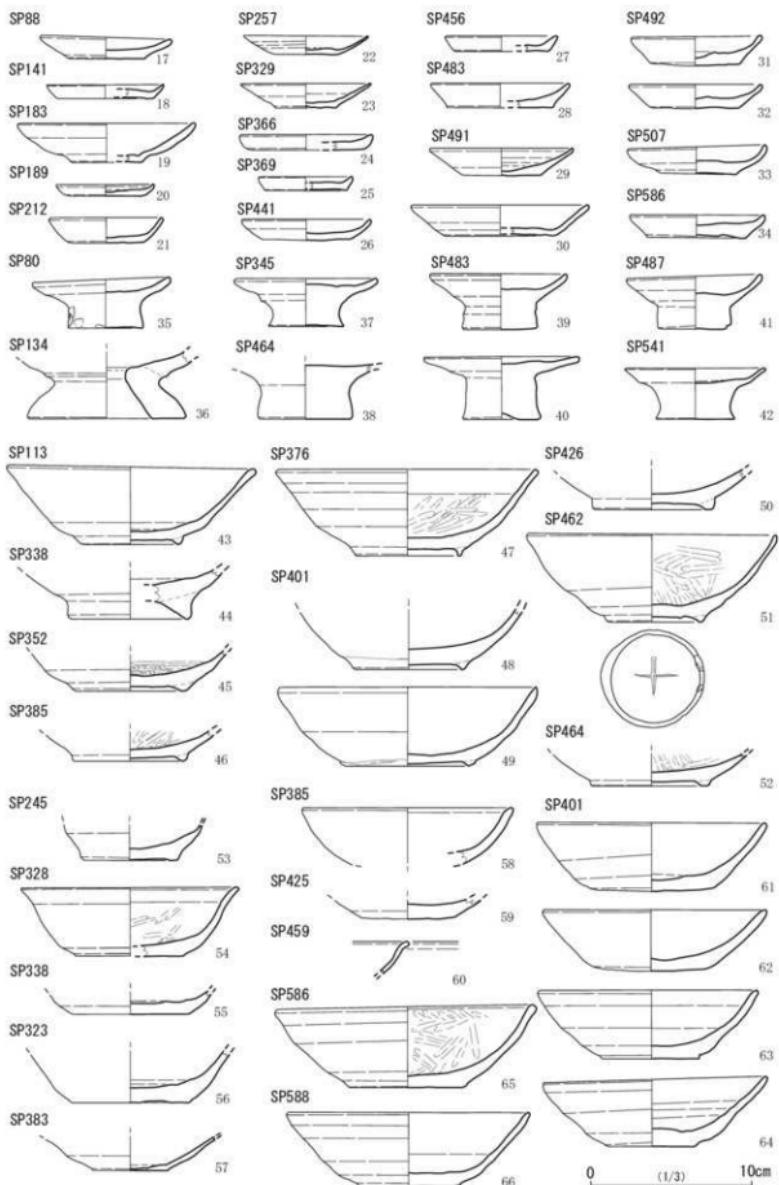
②柱穴出土遺物 (第26~28図 図版18~23・32)

17~34は土師器皿である。17は底部から体部が内湾気味に立ち上がり、端部は丸味をもつ。18~20・24~25・27~34は、口縁部が短く先端が尖り気味である。19は、底部から体部が内湾気味に立ち上がりつて口縁部に至り、端部は丸味をもつ。21~30は、底部から口縁部にかけて器壁の厚さがほぼ一定で、端部に平坦面をもつ。22~23・29は器壁が薄く、体部外面にロクロ目を残し、口縁部に向かって直線的に開く。26~28・31~32は底部から口縁に向かって直線的に開き、端部内面がわずかに膨らむ。33は底部から内湾気味に立ち上がり、端部は細くなる。35~42は土師器台付皿である。36は底部中央を貫通する穿孔が施されているが、他は全て柱状高台とも呼ばれる中実の高台をもつ。建物廃絶に伴う地鎮祭祀に用いた皿と考えられる。43~52は土師器碗である。43は体部が下位から口縁部に向かって直線的に伸び、端部は丸く膨らむ。44は断面三角形の大きな高台をもつ。47はロクロ目が残る体部がわずかに内湾し、口縁端部に平坦面をもつ。49は体部が内湾し、口縁端部は尖り気味である。51は内湾する体部の器壁が比較的薄く、口縁端部はやや尖る。底部外面にヘラによる「十」記号を施す。44を除き、いずれの碗も高台は小さく低い。53~66は土師器杯である。54は口縁部が外反する。58は杯あるいは碗で、大きく内湾する体部をもち、口縁端部内面は内傾し平坦面をもつ。61~64はSP401出土の杯。底部から緩やかに内湾して口縁部に至る。碗の48~49と共に伴っている。65は口縁部がわずかに外反し、端部に平坦面をもつ。66は底部から緩やかに内湾して口縁部に至る。67は須恵器杯で、焼成は不良である。68は瓦質土器鍋で、口縁部は直線的に外反し、端部は内上方に突出する。69は土師質土器鍋で、半球状の体部をもち、口縁部は直線的に外反する。70は土師質土器鍋で、内湾して立ち上

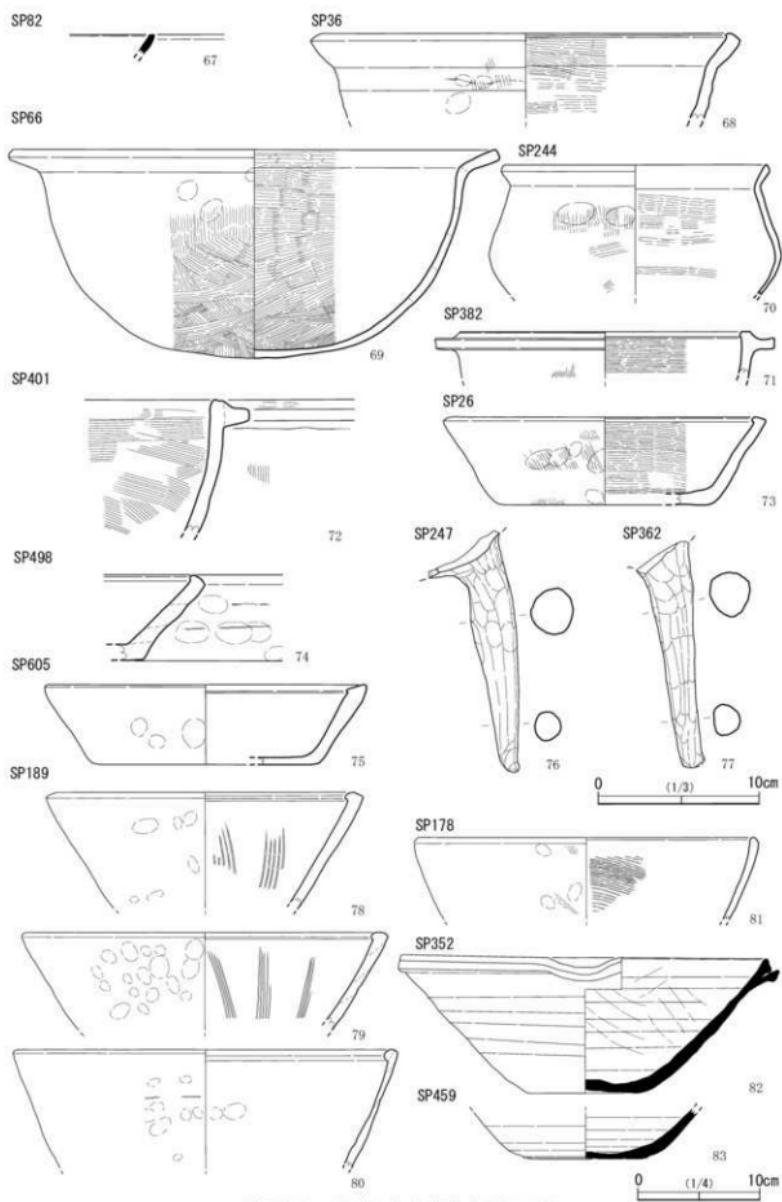
がる体部をもち、口縁部は短く外反する。71・72は土師質土器羽釜である。71は外面に化粧土を施しているのか、赤色を呈する。73～75は瓦質土器焙烙で、いずれも外面中位に顕著な指頭圧痕を残している。76・77は瓦質土器足鍋の脚部。76は脚部上位で最も膨らみ、先端部は細くなり小さく外方へ屈曲する。78～80はS P189出土の瓦質土器擂鉢と土師質土器捏鉢である。擂鉢はともに5条1単位の擂目をもつ。81は土師質土器捏鉢で、内面にハケ目を施す。82・83は東播系須恵器の片口鉢で、82は口縁端部が外側に張り出し、断面三角形を呈する。内面に斜め上方向と横方向のナデを施す。84～86は瓦質土器火鉢で、84は口縁部がやや短めに内傾して立ち上がり、端部外面に肥厚帯を貼り付ける。85は口縁部がくの字状に内傾する浅火鉢。86は火鉢底部で、手づくねの脚を貼り付ける。87～89は白磁椀である。87は幅広な玉縁口縁をもち、釉調は灰オリーブ色を呈する。88・89は、高台が高く直立する。



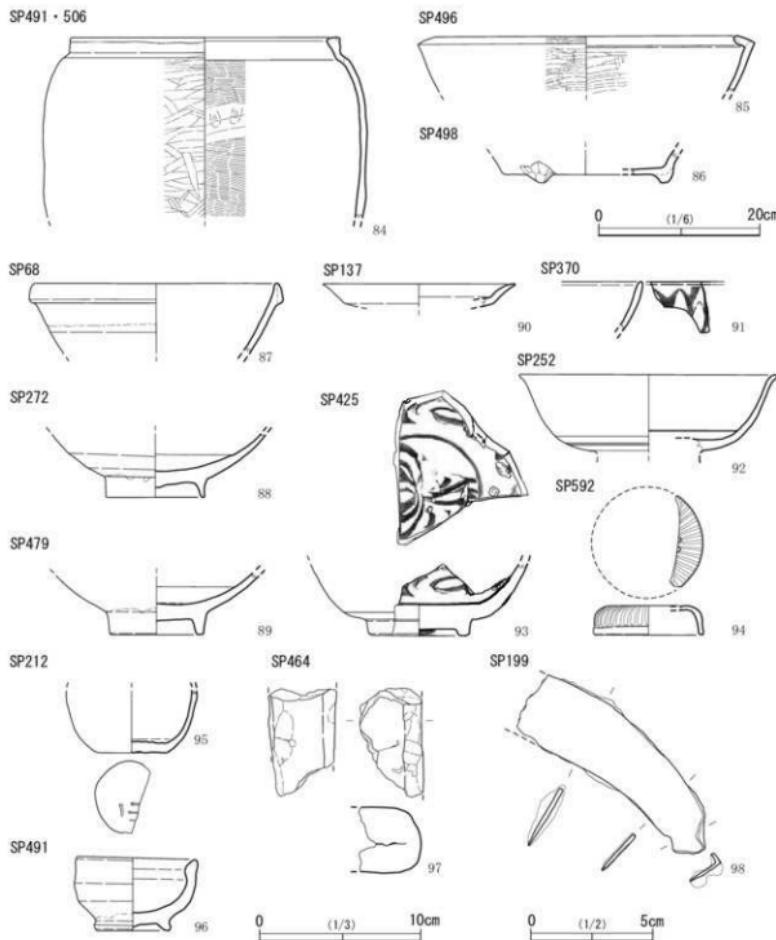
第25図 17地区出土遺物実測図(1)



第 26 図 17 地区出土遺物実測図 (2)



第27図 17地区出土遺物実測図(3)



第28図 17地区出土遺物実測図(4)

90~93は青磁の皿と椀で、90は体部中位で屈折し、口縁端部が薄く尖る皿。91は鍋蓮弁をもつ椀である。92は龍泉窯系の椀で、底部から口縁直下にかけてヘラケズリを施す。93は内面体部と見込みに片彫蓮華文を施す椀である。高台は断面台形で、刃りが浅い。94は景德鎮窯系の白磁合子の蓋で、青味かかった透明な釉を施す。95は備前系の壺で、裏面に「|三」の窯印をもつ。96は肥前系の椀で、灰色の釉が高台付近まで厚く掛り、高台内側には縮緬状の皺が見られる。97は支脚状土製品で、厚さ約2cmの粘土板を折り曲げて棒状に成形成する。98は鉄鎌で、柄の装着部先端はL字状に屈曲する。241~247は

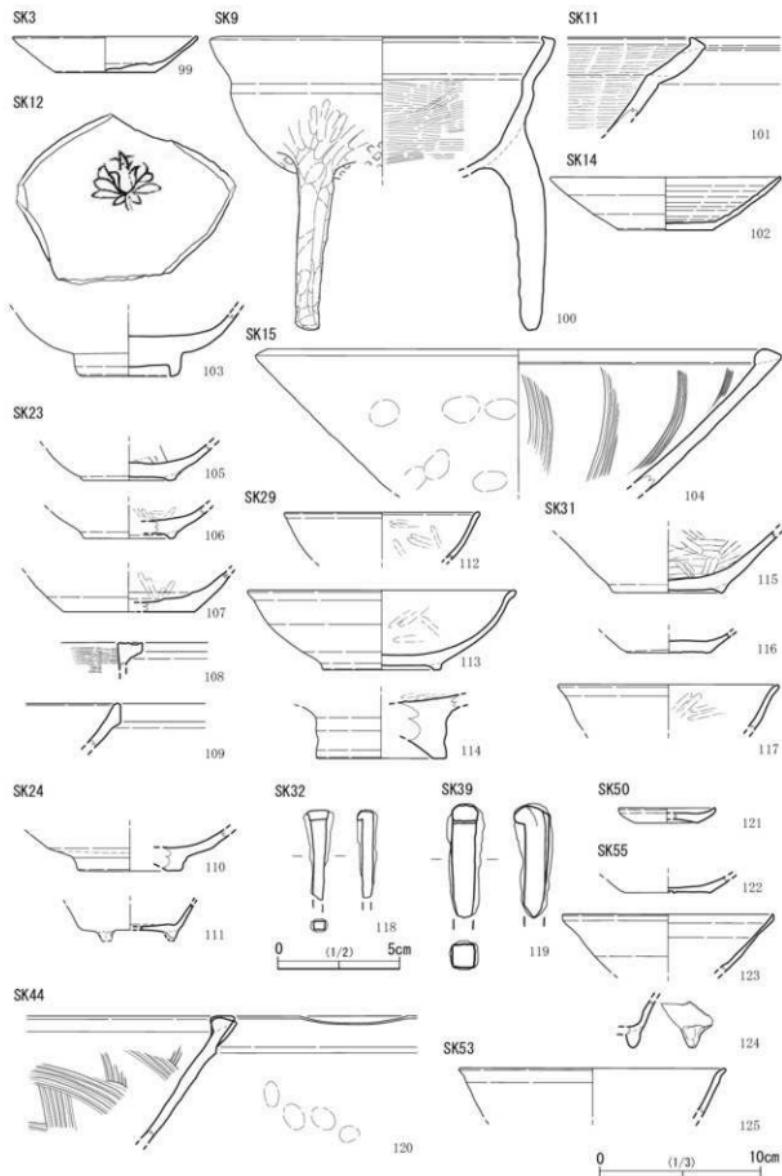
S P355出土の銅錢である。241は皇宋通寶、242は元祐通寶、243～245は判読不明、246は元祐通寶、247は聖宋元寶である。この順で、柱穴の上位から中位にかけて出土した。判読不明な銭が3点あるが、他はいずれも北宋銭である。腐食が著しいため拓本がとれず図版のみの掲載とした。

③土坑出土遺物(第29図 図版23～26)

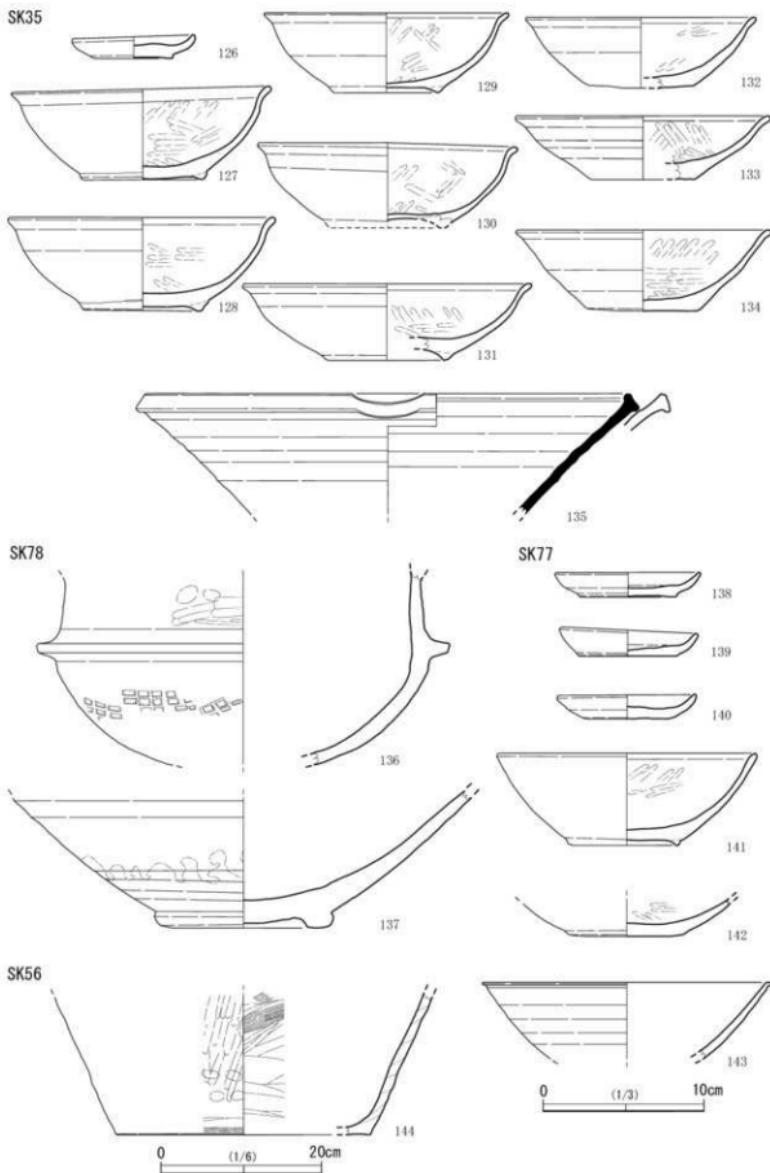
99はS K 3出土の土師器皿で、内面全体と外面口縁端部に油煙煤が付着する。100はS K 9出土の瓦質土器足鍋で、口縁部先端が内側に屈曲する。101はS K 11出土の瓦質土器鍋の口縁部。102はS K 14出土の土師器杯で、内面にロクロ目が明瞭に残る。103はSK12出土の龍泉窯系の青磁碗で、見込みにヘラ描きの蓮華文を施す。104はS K 15出土の瓦質土器擂鉢で、5条1単位の摺目をもつ。体部中位から下部にかけて使い込まれて摩滅している。105～109はS K 23出土の遺物である。105・106は土師器椀で、106の外面には赤色顔料が塗付されている。107は土師器杯で、底部は復元径8.0cmとやや大振りである。108は瓦質土器羽釜。109は幅広な玉縁口縁をもつ白磁碗。110・111はS K 24出土の福建省福州産の白磁鉢と、土師器香炉の底部である。112～114はS K 29出土の遺物である。112は土師器椀あるいは杯の口縁部。113は土師器椀。ともに口縁部が外反する。114は台付皿の底部。115～117はS K 31出土の遺物である。115は土師器椀、116は杯、117は椀あるいは杯で、口縁部は外反する。118はS K 32、119はS K 39出土の鉄釘である。120はSK44出土の瓦質土器擂鉢である。片口と、2方向に交差する6条1単位の摺目をもつ。121はSK50出土の土師器皿である。復元口径は6cm、器高0.9cmと小振りである。122～124はS K 55出土の遺物である。122は土師器杯あるいは皿。123は土師器杯で、器壁が0.15cmと極めて薄く、体部内面にロクロ目を残す。124は土師器香炉で、手づくね成形した脚をもつ。125はS K 53出土の龍泉窯系の青磁碗。126～135はS K 35出土の遺物である。126は土師器皿で、底部から内湾しながら立ち上がり、端部は丸味をもつ。127～131は土師器椀で、いずれも口縁部が外反する。132～134は土師器杯で、いずれも口縁部が外反する。135は東播系須恵器の片口鉢で、口縁端部は内外両方に突出し、体部は直線的に外反する。136・137はS K 78出土の遺物である。136は瓦質土器湯釜である。137は須佐唐津系の鉢で、見込みに胎土目跡が4ヶ所見られ、幅広の高台をもつ。138～143はS K 77出土の遺物である。138～140は土師器皿で、口径は8.5～9.0cmで、器高は1.5～1.6cmを測る。141は土師器椀で、体部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。高台は小さく断面三角形を呈する。142は土師器杯の底部である。143は福建省閩清義窯産の白磁碗で、口縁端部は外方向に屈折し、先端部は丸味をもつ。144はS K 56出土の備前系の甕底部で、内面にハケ目、ヘラナデ、ナデ調整を施し、外面にはハケ目と縱方向のナデ調整を施す。145はSK72出土の瓦質土器大甕で、体部は底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁は内傾し肥厚させる。体部内外面にナデとヘラミガキを施す。

④溝出土遺物(第32図 図版27～29)

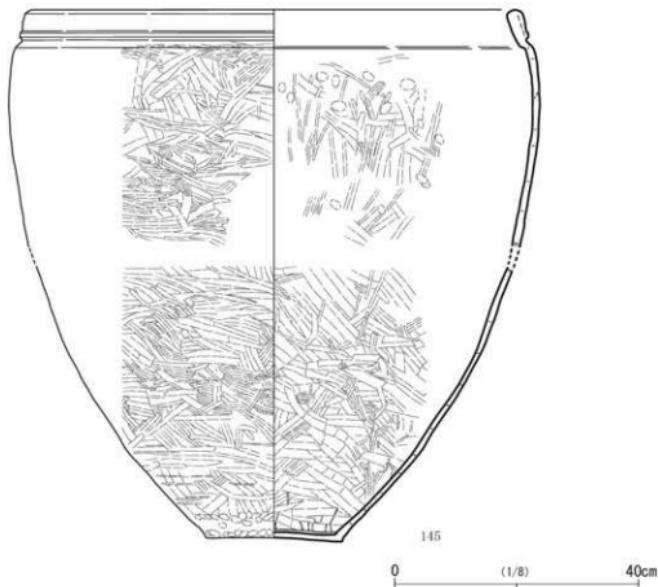
146はS D 2出土の土師器皿で、口縁部は緩やかに内湾し、端部は尖り氣味である。147～153はS D 7出土の遺物である。147は土師器杯。148は土師質土器羽釜で、鍔からの立ち上がりが長く、口縁端部に平坦面をもつ。149は土師質土器鍋で、口縁端部は外面に段をもつ。150は土師質土器甕で、厚さ1.9cmの口縁部をもつ。151は瓦質土器火鉢。152は肥前系の陶器椀で、内外面に灰オリーブ色の釉垂れが見られる。153は瓦質土器足鍋の脚部で、鍋接合部から先端に向かって直線的に延びる。154～



第29図 17地区出土遺物実測図(5)



第30図 17地区出土遺物実測図(6)



第31図 17地区出土遺物実測図(7)

160はS D11出土の遺物である。154は土師器皿で、口径5.2cm、器高0.8cmと小振りである。口縁は短く先端は尖る。155は土師器杯で、体部は薄い。156は土師器椀で、体部はわずかに内湾し、口縁端部は尖り気味である。157は瓦質土器鍋で、口縁部は短く端部に平坦面をもつ。158は土師質土器鍋で、口縁端部は外面にくびれをもつ。159は瓦質土器擂鉢である。160は土師質土器足鍋の脚部で、長く直線的に伸び、先端は外方へ屈曲する。161、162はS D12出土の遺物である。161は瓦質土器鍋で、口縁端部は上方に拡張する。162は五輪塔の空輪である。空輪と風輪の境界部分にはぞ穴を3ヶ所穿ち、割り離している。石材は角閃石安山岩である。163～183はS D13出土の遺物である。163～166は土師器皿で、163、164は底部から外反して立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。165は体部が底部から口縁に向かって直線的に開く。167是有孔台付皿で、高台は底部に向かって広がり、皿部との境でくびれる。垂直に穿孔されている。168は福建省産の白磁碗で、見込みに沈線が巡り、高台は浅く削り込む。169～174は土師器杯で、169～173は体部が底部から口縁に向かって直線的に開き、体部外面はわずかにクロ目が残る。166の皿と共に出土している。174は体部がわずかに内湾しながら立ち上がる。175は土師器香炉の底部で、手づくね成形した脚をもつ。176は土師質土器鍋で、口縁端部は外面にくびれをもつ。177は瓦質土器鍋で、口縁部は短く、端部は平坦面をもつ。178は土師質土器足鍋の脚部である。179は瓦質土器擂鉢で、8条1単位の擂目を体部と底部内面に施す。使い込まれて擂目が摩滅している。180は土師質土器擂鉢で、ハケ目調整を施した後、擂目を施す。181は瓦質土器鍋で、口縁

SD2

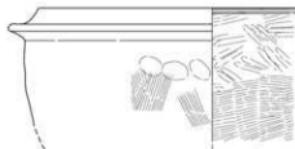


146

SD7



147



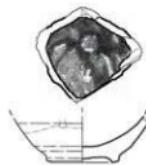
148



151



149



152

SD11



154



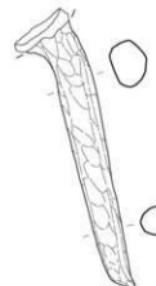
155



156



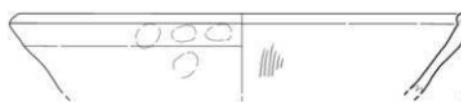
157



158



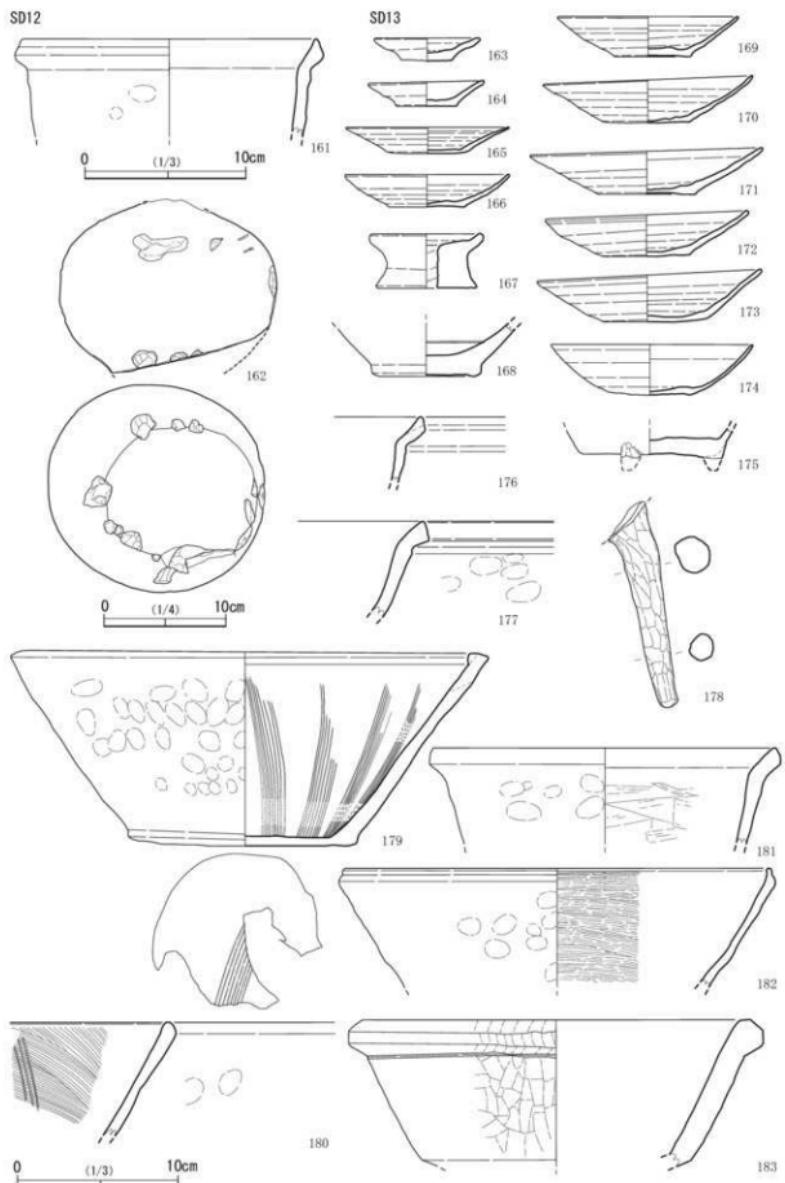
159



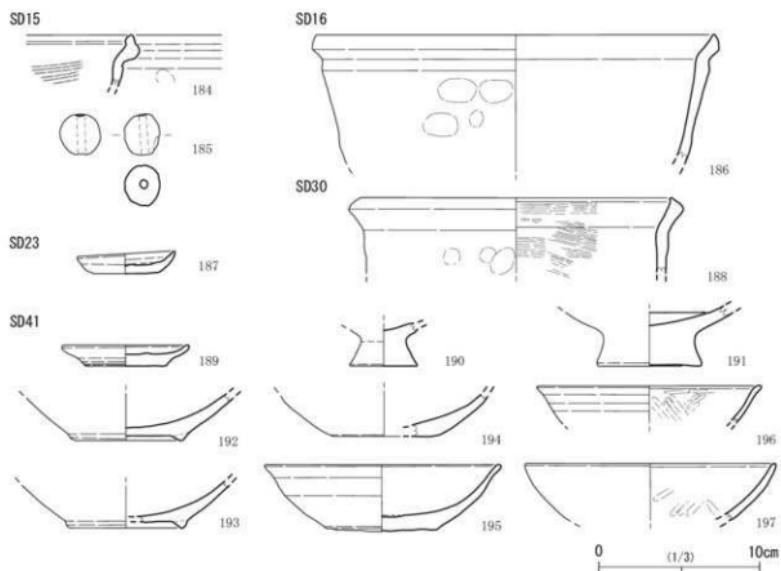
160

0 (1/3) 10cm

第32図 17地区出土遺物実測図 (8)



第33図 17地区出土遺物実測図(9)



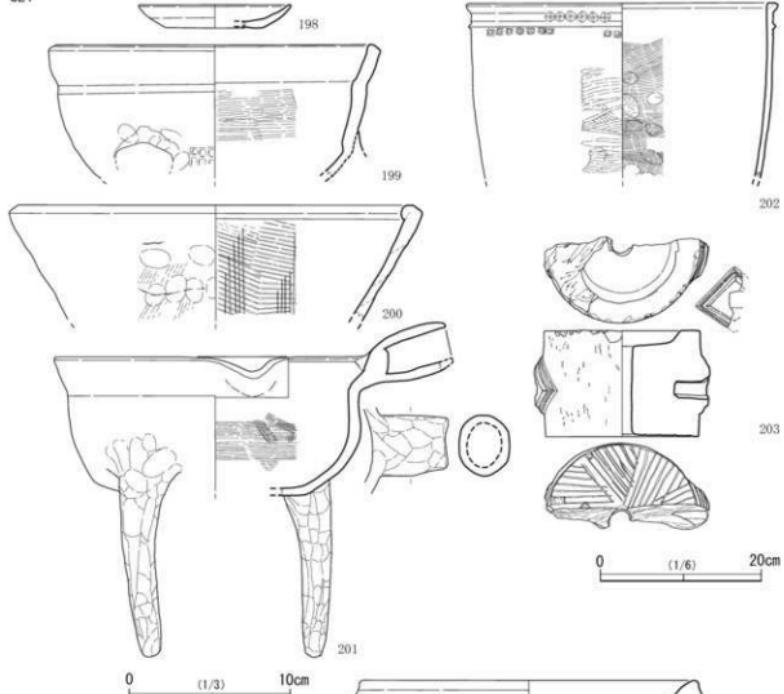
第34図 17地区出土遺物実測図(10)

部は短く、端部に平坦面をもつ。182は瓦質土器捏鉢で、口縁端部は外面に段をもつ。東播系片口鉢の影響を受けていると思われる。183は滑石製石鍋である。鍔は断面台形を呈し、口縁端部に平坦面をもつ。外面にノミ痕が残るが、内面は丁寧に研磨している。184はS D15出土の瓦質土器鉢の口縁部である。端部外面に段をもつ。185は土錘で、やや扁平な球状を呈する。186はS D16出土の土師質土器鉢である。187はS D23出土の土師器皿である。底部から緩やかに内湾して立ち上がり、内面はロクロ目が残る。188はS D30出土の瓦質土器鉢である。断面方形の短い口縁部をもち、上端部を内側につまみ出す。189～197はS D41出土の遺物である。189は土師器皿で、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部に至る。190、191は台付皿。192、193は土師器椀で、とともに高台断面は丸味をおびた三角形を呈する。194、195は土師器杯である。195は底部径が6.8cmと大振りで、厚さは約1cmである。体部は、底部から緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。196、197は椀あるいは杯の口縁部である。196は外面にロクロ目をもち、口縁部は外反する。197は緩やかに内湾して口縁部に至る体部をもち、内面にヘラミガキを施す。

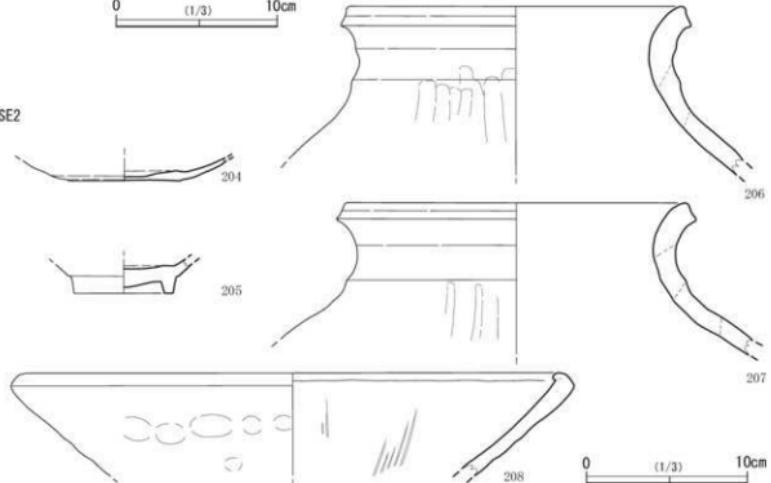
⑤井戸出土遺物(第35・36図 図版29～30)

198～203はS E 1出土の遺物である。198は土師器皿で、底部から緩やかに内湾して立ち上がり、端部は細くなる。199は瓦質土器足鉢で、口縁部は端部に丸味をおびた面をもつ。200は瓦質土器捕鉢で、ハケ目調整を施した後、擂目を施す。201は片口と把手をもつ瓦質土器足鉢。202は瓦質土器火鉢。深鉢形で、口縁部外面に貼付した断面三角形の突帯をもち、その上部に方形十文字、下部に方形のス

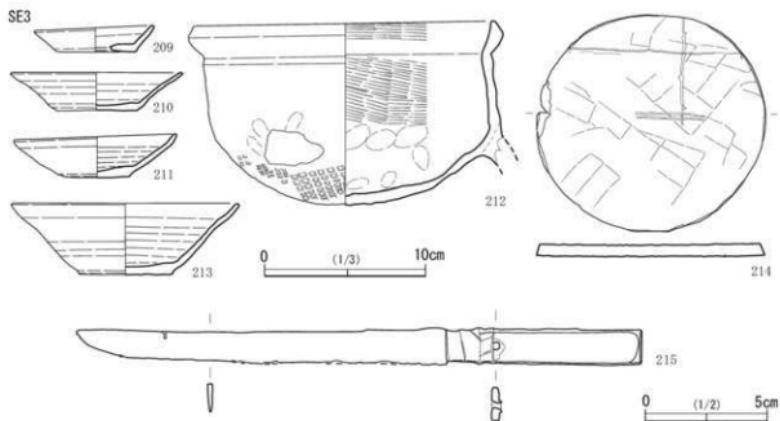
SE1



SE2



第35図 17地区出土遺物実測図(11)

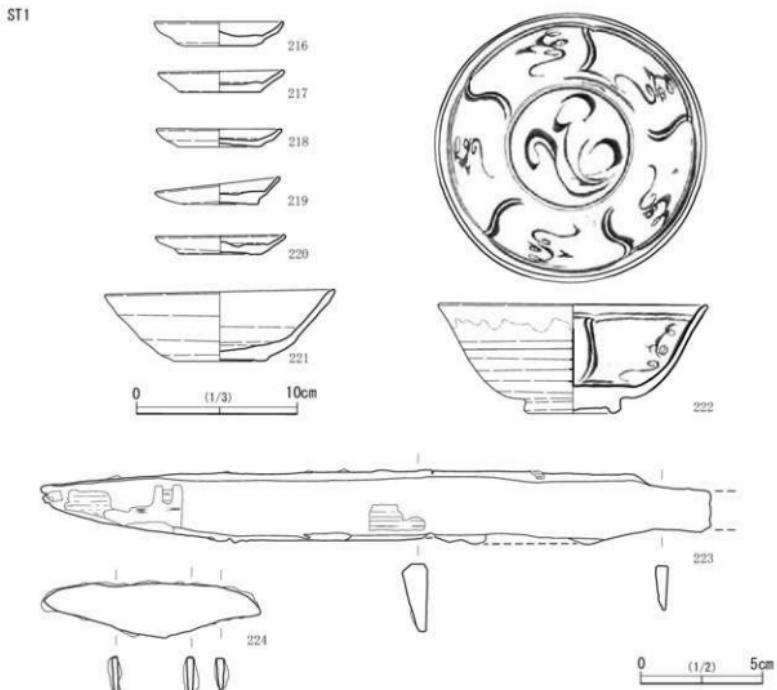


第36図 17地区出土遺物実測図(12)

タンブを押捺する。203は茶臼の上臼である。臼の目は8分割で、1分割に8本のV字状の溝が彫られている。挽き木差込口に3段菱形の飾模様を施す。石材は角閃石安山岩である。204~208はS E 2出土の遺物である。204は土師器皿で、復元底部径は6.8cmあり、大振りである。205は白磁碗で、断面逆台形の大振りな高台をもち、見込みは環状に軸を搔き取る。206, 207は土師質土器壺の口縁で、口縁上端部は丸く、下端部は尖る。頸部と肩部の境に稜線をもち、稜線から下部に縱方向のヘラナデを施す。207は焼成が良好で硬質である。208は瓦質土器擂鉢で、5条1単位の擂目をもつ。209~215はS E 3出土の遺物である。209~211は土師器皿である。209は底部中央に焼成後の穿孔をもち、210は内外面に油煙煤が付着する。212は瓦質土器足鍋。213は土師器杯で、体部内外面にロクロ目を残し、口縁端部に面取りを施す。214は曲物の底板で、上下面にカンナ削り痕が見られ、側面の2ヶ所に方形の釘穴が見られる。断面は台形を呈し、下面に比べ上面の径が0.4cm小さい。215は小柄である。柄部は銅製で、刃部および茎部は鉄製である。X線回析によると茎は柄部の先端まで延びている。柄部に樹皮が巻かれており、目釘穴の上部で巻きを止めている。

⑥墓出土遺物(第37図 図版30・31)

216~224はS T 1出土の遺物である。216~220は土師器皿である。217, 218は見込みに強いナデを施し、中央部を平坦に整えている。他は見込み中央部が盛り上がる。221は土師器杯で、外面は底部から内湾気味に立ち上がり、下位で屈曲し、口縁に向かって直線的に延びる。222は龍泉窯系の青磁碗で、体部内面を二又片刃で5分割し、区画内に片彫りの飛雲文を施し、見込みに3個の葺状の文様を施す。223は鉄製の小刀で、棟は切先まで直線的に延び、刃部は切先の手前で徐々に細くなっている。刃身の数ヶ所に鞘と思われる木質が残る。224は用途不明鉄製品で、小刀茎部の直下に重なった状態で出土した。翼形状を呈し、棟と刃部をもつ。刀子の一種と思われるが、詳細は不明である。



第37図 17地区出土遺物実測図 (13)

(2) 18地区出土遺物 (第38図 図版31・32)

①土坑出土遺物

225はS K 1出土の土師質土器鍋の口縁部で、上面に平坦面をもち、端部は内面に丸く折り込む。

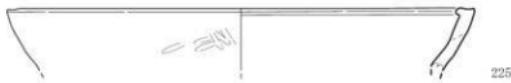
②溝出土遺物

226～234、248はSD4出土の遺物である。226～229は瓦質土器鍋である。226は長い口縁部を持つ鍋である。端部は面をもち、下端部は小さく突出する。227～229は口縁端部が内傾する。229は片口と把手をもつ。230は瓦質土器焙烙。231は景德鎮窯系の白磁碗で、貼付高台の内側に砂粒が付着する。232は瓦質土器足鍋の脚部で、直線的に延び、内側は二次焼成のため橙色を呈する。233は不明鉄製品で、形態から吊り金具と考えられる。234は鉄釘。一辺0.2cmの角釘で、上部先端を屈曲させている。248は銅錢である。景德元寶と思われる。腐食が著しいため拓本がとれず図版のみの掲載とした。

③墓出土遺物

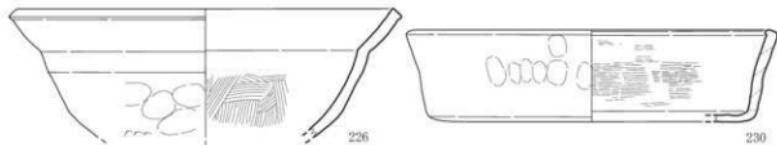
235～240はS T 1出土の遺物である。235～239は土師器皿で、体部は底部から緩やかに内湾して立ち上がる。240は土師器杯である。体部は底部からやや直線的に開き、口縁部はやや内湾する。

SK1



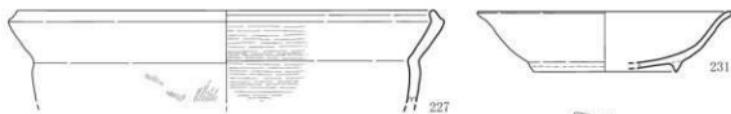
225

SD4



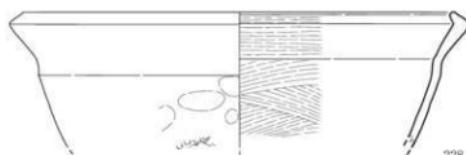
226

230



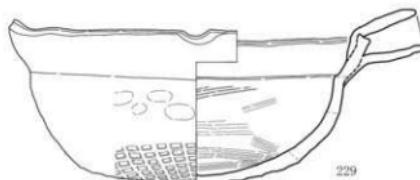
227

231



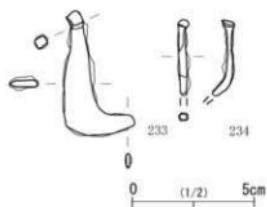
228

232



229

0 (1/3) 10cm



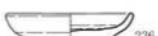
233

234

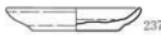
ST1



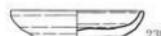
235



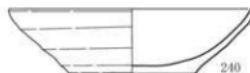
236



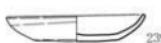
237



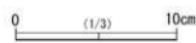
238



240



239



第38図 18地区出土遺物実測図

第2表 出土遺物觀察表

被 國	國 版	№	出土 場所	種別	器種	法 律 (cm) (直徑 (底面) (現底面 底元面)	始土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考		
									内	外			
25	17	1	SH2 (SP521)	瓦質土器	足頭	15.0 (10.4)	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	ハケ日の後、横ナデ 横ナデ、格子目タキ	外面全体に付着		
25	17	2	SB3 (SP523)	土師器	楕ある いは杯	14.4 (4.2)	密	不良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ	摩減害しい		
25	17	3	SB5 (SP525)	青磁	楕	16.2 (4.0)	密	良	オリーブ青 オリーブ青	回転ナデ、施釉 回転ナデ、蓮瓣文、施釉	蓮瓣は輪が無く平面的		
25	17	4	SB10 (SP528)	土師器	楕ある いは杯	13.8 (3.9)	やや粗	良	にぶい粉青 灰白色	回転ナデの後、圓文を施す。施釉 回転ナデの後、圓文を施す。施釉、底部 は回転ナダの後、ヘラケズリ	同安窯系		
25	17	5	SB10 (SP529)	青磁	楕	11.4 (2.1)	21	4.5	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、円筒形參文、施釉 回転ナデの後、施釉	龍泉窯系
25	17	6	SB11 (SP525)	青磁	楕	12.4 (2.4)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、圓文を施す。施釉 回転ナデの後、圓文を施す。施釉	同安窯系		
25	17	7	SB12 (SP526)	土師器	楕ある いは杯	11.8 (1.9)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ			
25	17	8	SB13 (SP525)	瓦質土器	足頭	14.2 (9.3)	やや粗	良	灰白色 灰褐色	ハケ日の後、横ナデ 指ササエ、ナダ、底部はハケ日の後、ヘ ラケズリ	外面側部に付着		
25	17	9	SB16 (SP520)	土師器	台脚	2.5 (1.0)	4.8	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
25	17	10	SB17 (SP529)	瓦質土器	足頭	4.6 (1.6)	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、指ササエ 指ナダ、指ササエ 指ナダ、指ササエ			
25	17	11	SB17 (SP526)	瓦質土器	脚跡	4.7 (1.7)	やや粗	良	灰白色 灰白色	横ナダの後、捺目施文 指ササエ、横ナデ			
25	17	12	SB18 (SP529)	土師器	楕ある いは杯	1.1 (1.1)	4.5	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目圧痕	
25	18	13	SB18 (SP527)	土師器	楕	12.2 (5.0)	2.1	5.0	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、丁寧なナダ 回転ナデの後、丁寧なナダ	板目圧痕
25	18	14	SB19 (SP524)	土師器	杯	4.2 (7.1)	密	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、丁寧 なナダ	板目圧痕		
25	18	15	SB19 (SP524)	土師器	杯	15.6 (5.0)	4.9	7.0	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切り	
25	18	16	SB20 (SP528)	土師器	杯	5.0 (0.0)	0.6	(3.4)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目圧痕
26	18	17	SP788	土師器	楕	8.1 (2.2)	1.3	4.8	やや粗	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目圧痕
26	18	18	SP141	土師器	楕	7.2 (0.9)	0.9	6.0	やや良	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	
26	19	19	SP183	土師器	楕	11.0 (1.0)	2.4	23.1	やや粗	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	
26	20	SP199	土師器	楕	6.0 (6.8)	0.7	5.0	やや粗	良	やや良 にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目圧痕	
26	21	SP212	土師器	楕	6.8 (7.6)	1.6	4.8	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	外面口縁と底部の一部に擦 付痕。板目圧痕	
26	18	22	SP237	土師器	楕	7.6 (8.0)	1.1	4.1	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	23	SP229	土師器	楕	8.0 (6.9)	1.5	3.8	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕	
26	24	SP266	土師器	楕	8.2 (8.2)	0.9	7.2	やや粗	やや良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデの後、底部は回転赤切り		
26	25	SP269	土師器	楕	5.8 (5.8)	0.9	5.1	やや粗	不具 粉青	にぶい粉青 粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕	
26	26	SP441	土師器	楕	7.8 (7.8)	1.3	5.6	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕	
26	27	SP456	土師器	楕	6.9 (6.9)	0.9	5.9	やや粗	良	粉青 粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り		
26	28	SP483	土師器	楕	8.6 (8.6)	1.5	6.5	密	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデ 回転ナデの後、底部は回転赤切り		
26	18	29	SP499	土師器	楕	8.8 (8.8)	1.7	4.8	密	良	灰白色 楕灰白色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	18	30	SP499	土師器	楕	11.0 (11.0)	1.9	6.9	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	外縁のほば全体に付着 痕。板目圧痕
26	18	31	SP492	土師器	楕	7.9 (7.8)	1.8	5.5	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	18	32	SP492	土師器	楕	8.2 (8.2)	1.5	5.5	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	33	SP507	土師器	楕	8.6 (8.6)	1.7	4.6	やや粗	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕	
26	18	34	SP506	土師器	楕	8.3 (8.3)	1.4	6.0	密	良	白灰色 白灰色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	高台に指測痕(入指痕、中 指、拳指)
26	18	35	SP780	土師器	台付楕	8.5 (8.5)	3.1	4.6	やや粗	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ	
26	18	36	SP134	土師器	有孔台 付楕	4.1 (4.1)	9.8	密	良	にぶい粉青 にぶい粉青	ナダ。高台内部は門洞に覗いたラケズ リ。回転ナデ。底部はナダ		
26	19	37	SP345	土師器	台付楕	8.8 (8.8)	2.9	4.6	密	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナダ など	
26	19	38	SP464	土師器	台付楕	3.0 (3.0)	5.8	密	良	粉青 粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り		
26	19	39	SP483	土師器	台付楕	8.3 (8.3)	3.5	4.6	密	良	淡黃褐色 淡黃褐色	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	19	40	SP483	土師器	台付楕	9.6 (9.6)	3.9	4.8	粗	やや良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	指測圧痕
26	19	41	SP487	土師器	台付楕	8.3 (8.3)	3.2	4.5	やや粗	良	にぶい粉青 にぶい粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデ、底部は回転赤切り	板目圧痕
26	19	42	SP541	土師器	台付楕	8.6 (8.6)	3.1	4.8	密	良	粉青 粉青	回転ナデの後、静ナダ 回転ナデの後、ナダ。底部は回転赤切り の後、ナダ	板目圧痕

部 分	固 定 版	名 称	植 物	器 械	法 量 (cm)		耐 土	機 械	色 調 (内 外)	主な調 整 (内 外)	備 考	
					口徑 (mm)	底 高 (mm)						
26	19	43	SP113	土耕器	桿	15.4	4.8	61	黒 灰白色 灰褐色	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ	外的1/2に保付着	
26	19	44	SP338	土耕器	桿	(3.0)	7.6	密 やや粗	灰白色 灰褐色	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ		
26	19	45	SP352	土耕器	桿	(2.4)	6.8	やや粗 やや良	灰白色 灰褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	19	46	SP365	土耕器	桿	(1.8)	6.8	やや粗 やや良	灰白色 灰褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	19	47	SP366	土耕器	桿	(16.1)	5.3	6.5	密 良	に高い-黄褐色 に低い-黄褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ	
26	19	48	SP401	土耕器	桿	(3.8)	6.9	やや粗 やや良	に高い-黄褐色 に低い-黄褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	20	49	SP401	土耕器	桿	(15.8)	4.8	(8.3)	やや粗 良	灰白色 灰褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ	
26	20	50	SP426	土耕器	桿	(2.5)	7.4	密 やや良	灰白色 灰褐色	回転ナシ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	20	51	SP462	土耕器	桿	13.4	5.4	6.0	密 やや粗	灰褐色 灰褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ	底面外縁にヘアによる「+」記号
26	20	52	SP464	土耕器	桿	(2.0)	7.2	密 良	灰白色-黒褐色 灰褐色-灰白色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、高台内は回転糸切りの後、ナ シナ	成不良部は黒褐色を呈 する	
26	20	53	SP245	土耕器	桿	(2.2)	5.7	密 良	灰白色 灰白色	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	54	SP328	土耕器	桿	(13.4)	4.2	(6.6)	やや密 良	浅褐色 浅褐色	回転ナシの後、ヘラナギ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	20	55	SP338	土耕器	桿	(1.4)	7.0	密 良	に高い-褐色 に低い-褐色	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ		
26	20	56	SP323	土耕器	桿	(3.2)	(6.2)	密 良	に高い-褐色 褐色	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り	底部に赤色顔料がわずかに 残る	
26	20	57	SP383	土耕器	桿 あるい は無い	(2.1)	4.6	密 良	灰白色 灰白色	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ	報目庄重	
26	20	58	SP385	土耕器	桿 あるい は無い	(12.9)	(3.5)	密 良	浅褐色 浅褐色	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り		
26	59	SP425	土耕器	桿	(1.2)	(5.6)	やや粗 やや良	初期 初期	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り			
26	20	60	SP459	土耕器	桿 あるい は無い	(2.0)	密 良	灰白色 灰白色	回転ナシ 回転ナシ			
26	20	61	SP461	土耕器	桿	13.9	4.2	7.6	密 やや粗	初期 初期	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り	報目庄重
26	20	62	SP461	土耕器	桿	(13.9)	3.7	7.1	密 やや粗	初期 初期	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ	
26	20	63	SP461	土耕器	桿	(13.6)	4.2	5.9	密 やや粗	初期 初期	回転ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り	外側底部に保付着
26	20	64	SP461	土耕器	桿	13.7	4.1	5.3	密 良	浅褐色 浅褐色	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り、ヘラナ ナ	
21	21	65	SP586	土耕器	桿	16.1	5.0	7.0	やや粗 やや良	初期 初期	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切りの後、ナ シナ	
21	21	66	SP588	土耕器	桿	(15.0)	4.6	6.2	やや粗 やや良	浅褐色 浅褐色	回転ナシの後、静止ナシ 回転ナシ、底部は回転糸切り	
21	21	67	SP82	粗整器	桿	(1.3)			不規 灰白色	回転ナシ 回転ナシ		
21	21	68	SP36	瓦質土器	網	(26.4)	(5.2)		開網 閉網	ハケ日後、ナ ジ指サエ、ハケ日後、ナ	内下面に炭化物付着	
21	21	69	SP96	瓦質土器	網	(29.6)	32.8		やや粗 良	開網-灰褐色 閉網-灰褐色	ナジの後、ハケ日 ナジサエの後、ナ ジナ	
21	21	70	SP244	瓦質土器	網	(6.2)	(8.0)		密 良	灰褐色 灰褐色	ナジナ ナジサエ、ハケ日後、ナ ジナ	
21	21	71	SP382	瓦質土器	羽翼	(17.8)	(2.6)		不規 灰白色	ハケ日後 ハケ日後ナジ	外面上に炭化物付着	
21	21	72	SP461	土質土器	羽翼	(8.2)			やや粗 初期	ナジの後、ナ ジサエ		
21	21	73	SP26	瓦質土器	羽翼	(19.8)	5.4	(13.2)	やや粗 良	初期 初期	ナジの後、ナ ジサエ	
21	21	74	SP468	瓦質土器	羽翼	(5.3)			やや粗 初期	ナジナ ナジサエの後、ナ ジナ		
21	21	75	SP605	瓦質土器	羽翼	(19.8)	4.9	14.0	やや粗 良	灰色 灰色	ナジナ ナジサエ、ナ ジナ	ナジサエの後、ナ ジナ
21	21	76	SP247	瓦質土器	足網 (脚)	(14.8)			やや粗 良	灰白色 灰白色	ナジサエの後、丁 寧なナジ	
21	21	77	SP362	瓦質土器	足網 (脚)	(13.9)			やや粗 良	灰白色 灰白色	ナジナ ナジサエの後、ナ ジナ	5巻1単位の報目
21	21	78	SP189	瓦質土器	足網	(26.0)	(9.5)		やや粗 良	灰色 灰色	ナジナ ナジサエの後、ナ ジナ	5巻1単位の報目
22	22	80	SP189	土質土器	四脚	(31.6)	(9.7)		密 良	灰褐色 灰褐色	ナジサエの後、ナ ジナ	
22	22	81	SP578	土質土器	四脚	(29.2)	(6.7)		密 良	に高い-黄褐色 に低い-黄褐色	ハケ日後、ナ ジナ	
22	22	82	SP352	粗整器	片口脚	(29.7)	11.1	9.2	やや粗 良	灰色 灰色	ナジサエの後、上 方へのナジ ナジサエの後、不正方向のナ ジ、底部は 報目	

被 用 國	國 號	品 名	出 土 場 所	種 別	器 種	法 規 (cm)			始 土	燒 成	色 調 (内) (外)	主 な 調 整 (内) (外)	備 考	
						口 徑 (底 径)	高 度 (底 盤)	底 徑 (底 盤)						
27	22	83	SP459	須惠器	片口鉢	(4.1)	(10.2)	やや粗	良	灰白色 灰褐色	回転ナデの後、ヘラナデ 回転ナデ、底部はヘラナデ	東條系、板目直痕		
28	22	84	SP461 -506	瓦質土器	火鉢	(33.2)	(22.1)	密	やや良	暗灰褐色～灰褐色 灰褐色～灰褐色	様ナデ、ハラミガキ 様ナデ、ヘラミガキ			
28	22	85	SP466	瓦質土器	火鉢	(37.1)	(68)	密	良	灰褐色 灰褐色	様ナデ、ヘラミガキ			
28	22	86	SP468	瓦質土器	火鉢	(4.0)	(20.0)	やや粗	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ ナホ、底部はハケ目の後、ナホ、脚部は 壁にササギナシナデ			
28	22	87	SP478	白磁	碗	(15.0)	(4.3)	密	良	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナデ、施輪 回転ナデの後、ヘラケズリ、施輪	表面下半分は露胎、釉調は 瓶に近い		
28	22	88	SP272	白磁	碗	(3.9)	6.0	やや粗	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、施輪 回転ナデの後、ヘラケズリ、施輪			
28	22	89	SP479	白磁	碗	(3.6)	5.8	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、施輪 回転ナデ、施輪、底部は削り出し			
28	22	90	SP137	青磁	瓶	(11.8)	(1.4)	密	良	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナデ、施輪 回転ナデの後、ヘラケズリ、施輪			
28	22	91	SP270	青磁	瓶	(3.0)		密	良	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	回転ナデ、施輪 回転ナデの後、施文、施輪	龍泉窯系		
28	23	92	SP252	青磁	碗	(15.8)	(4.8)	やや粗	良	オーライグロ色 オーライグロ色	回転ナデ、施輪 回転ナデの後、施文	龍泉窯系		
28	23	93	SP425	青磁	碗	(4.4)	(6.2)	やや密	良	灰オリーブ色 灰オリーブ色	回転ナデの後、内側裏面文、施輪 回転ナデの後、ヘラケズリ、施輪	龍泉窯系		
28	23	94	SP592	白磁	合子 (蓋)	1.8	(6.7)	密	良	明緑灰褐色 灰白色	回転ナデ、丸上部に施輪 回転ナデの後、花弁文、花弁文施文	歌德講義室		
28	23	95	SP212	角器	壺	(3.8)	4.6	やや密	良	灰赤色 灰赤色	回転ナデ 回転ナデ、ヘラケズリ、ナホ	底部に案附「丁三」 施文系		
28	23	96	SP491	陶器	碗	7.8	4.5	4.6	密	灰白色 灰白色	回転ナデ、施輪 回転ナデ、ヘラケズリ、施輪	呂宋は褐色 肥前系		
28	23	97	SP464	土製品	土器	(3.8)	(6.7)	(4.0)	やや良	灰褐色 灰褐色	指ササギの後、ナホ	2号等の粘土板を折り込み で焼形		
28	23	98	SP199	鉄製品	鍔 鍔身	(9.5)	2.1	2.8	重	重	回転ナデ 回転ナデ			
32	241	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐2年(1087)年鑄 亮、1.3枚				
32	242	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐元年(1086)年鑄 亮、1.3枚				
32	243	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐元年(1086)年鑄 亮、1.3枚				
32	244	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐元年(1086)年鑄 亮、1.3枚				
32	245	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐元年(1086)年鑄 亮、1.3枚				
32	246	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、元祐元年(1086)年鑄 亮、1.3枚				
32	247	SP555	鋼鏡	鏡	厚 2.5	2.5	2.5	重	良	北京、建中靖国元年(1101) 平清盛、1.5枚				
29	99	SK3	土器	皿	11.4	2.2	6.0	重	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデの後、静止ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、丁寧 なナホ	内部に油煙附着 灯明跡		
29	23	100	SK9	瓦質土器	足鍋	(21.2)	18.0		やや粗	良	灰白色 灰白色	様ナデ、ハラ日 様ナデ、ナホ、筋子目タタキ		
29	23	101	SK11	瓦質土器	鍋	(5.8)		密	良	黑褐色 黑褐色	ハラ日の後、ナホ			
29	102	SK14	土器	杯	(14.2)	3.2	5.8	密	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデの後、静止ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、丁寧 なナホ	板目直痕		
29	24	103	SK12	青磁	碗	(3.9)	6.0	密	良	明オリーブ灰色 明オリーブ灰色	回転ナデの後、見込みに施文、施輪 回転ナデの後、施輪	見込みに施文 龍泉窯系		
29	24	104	SK15	瓦質土器	鉢	(32.4)	(8.7)	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	様ナデ 様ナデ、横ナホ	5金1単位の耀目		
29	23	105	SK23	土器	碗	(2.2)	5.8		やや粗	やや良	深褐色 灰褐色	回転ナデの後、ヘラケズリ、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナホ		
29	23	106	SK23	土器	碗	(2.1)	(5.4)	密	良	灰褐色 灰褐色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ	外面に赤色顔料付帯		
29	107	SK25	土器	杯	(2.5)	(8.0)	重	良	浅褐色 浅褐色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナホ ナホナホ				
29	108	SK23	瓦質土器	前垂	(1.7)		重	やや粗	良	灰褐色 灰褐色	骨ナホの後、ハラ日			
29	24	109	SK23	白磁	碗	(2.7)		重	良	灰白色 灰白色	回転ナデ、施輪 回転ナデ、施輪			
29	24	110	SK24	白磁	钵	(2.5)	(6.4)	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、ヘラケズリ 回転ナデの後、ヘラケズリ	無縫者板目直痕		
29	24	111	SK24	土器	香炉	(2.1)	(6.0)	密	良	深褐色 灰褐色	回転ナデの後、静止ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切り、脚は上方 向のヘラナホ			
29	24	112	SK29	土器	楕ある いは杯	(12.0)	(2.9)	密	良	にふい青褐色 にふい青褐色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切り			
29	24	113	SK29	土器	前垂	(16.6)	4.9	7.3	密	良	にふい青褐色 にふい青褐色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部はナホ		
29	24	114	SK29	土器	台付皿	(3.9)	(8.0)	重	良	にふい青褐色 にふい青褐色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部はナホ、内側はヘラケズ リ			
29	24	115	SK31	土器	碗	(3.8)	(6.6)	やや粗	良	洪褐色 灰白色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナホ			
29	24	116	SK31	土器	杯	(1.2)	5.1	重	やや良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ			
29	24	117	SK31	土器	楕ある いは杯	(13.6)	(2.8)	重	良	灰白色 灰白色	回転ナデの後、ヘラミガキ 回転ナデ			
29	24	118	SK31	鉄製品	打	上部 底盤	幅1.2	下部 幅0.3	重量	1kg		上部先端を削曲		

被 用 機 器	固 定 部	部 品 名	基 本 場 所	機 別	器 種	法 規 (cm)			始 工 期 (在庫 量)	成 就 期 (在庫 量)	色 調 (内) 色 調 (外)	主 な 調 整 (内) (外)	備 考	
						上 部 部 分	基 本 部 分	下 部 部 分						
29 24 119 SK39	鉄製品	軒	上部部 分	屋根	屋根 幅1.1	(35)	下限幅 幅0.5	重要 度	9.3kg	やや粗 い	真 白	灰白色 灰白色	回転ナデの後、2方向に横目 回転ナデ。指オサエ	上部先端を頸曲
29 24 120 SK44	瓦質土器	器				(7.8)				やや粗 い	真 白	灰白色 灰白色	回転ナデ	6条1単位の括目
29 121 SK50	土器器	瓶	6.0)	9.9	(38)	やや粗 い	真 白	灰白色 灰白色	10.1 (52)	にぶい粉 色	回転ナデ	回転ナデ。底部は回転曲切りの後、ナデ		
29 122 SK55	土器器	杯	ある いは粗	ある いは粗	(10)	5.2	やや粗 い	真 白	灰白色 灰白色	回転ナデ	回転ナデ。底部は回転曲切りの後、ナデ	板目直直		
29 123 SK55	土器器	杯	(13.0)	(45)		審	真 白	灰白色 灰白色		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ		
29 24 124 SK55	土器器	香炉			(29)	審	やや良 い	灰白色 灰白色		回転ナデ	回転ナデ。脚は上方向のナデ			
29 25 125 SK53	青磁	碗	(16.4)	(30)		やや粗 い	明オリーブ灰 明オリーブ灰			回転ナデの後、油燃	回転ナデの後、油燃	龍泉窯系		
30 24 126 SK35	土器器	瓶	7.6	1.3	4.8	審	真 白	灰白色 浅墨色		回転ナデの後、静ミナデ	回転ナデの後、静ミナデ			
30 25 127 SK35	土器器	碗	16.0	5.6	7.6	粗	不真	灰白色 灰白色		回転ナデの後、静ミナデ	回転ナデの後、静ミナデ			
30 25 128 SK35	土器器	碗	(16.4)	5.7	7.3	やや粗 い	やや良 い	灰白色 灰白色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 129 SK35	土器器	碗	(15.0)	4.9	(6.4)	やや粗 い	やや良 い	にぶい粉 色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 130 SK35	土器器	碗	16.0	(4.7)		審	不真	灰白色 灰白色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 131 SK35	土器器	碗	(17.0)	5.0	7.0	審	やや良 い	灰白色 灰白色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 132 SK35	土器器	碗	(14.2)	4.4	(6.4)	やや粗 い	やや良 い	淡粉 色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 133 SK35	土器器	杯	(15.7)	3.9	(6.4)	やや粗 い	真 白	明赤色 明赤色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 134 SK35	土器器	杯	(15.7)	5.0	6.8	やや粗 い	やや良 い	にぶい粉 色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 135 SK35	須志器	片口鉢	(29.6)	(7.4)		やや粗 い	良 好	灰 色		回転ナデ	回転ナデ	束縛系		
30 25 136 SK78	瓦質土器	漆面			(12.0)	粗	やや良 い	明麗灰色 明麗灰色		ナデ	ナデ	ナデ	外面に煤付着	
30 26 137 SK78	陶器	鉢			(8.4)	11.0	やや粗 い	且 明麗灰色 にぶい粉 色		回転ナデ	回転ナデ	見込みに動く目跡4ヶ所、 筋筋骨付跡		
30 138 SK77	土器器	瓶	9.0	1.5	5.8	審	やや良 い	淡黄褐色 淡黄褐色		回転ナデ	回転ナデ			
30 25 139 SK77	土器器	瓶	8.5	1.6	6.0	審	真 白	にぶい粉 色		回転ナデ	回転ナデ			
30 140 SK77	土器器	瓶	8.6	1.5	5.1	審	真 白	にぶい粉 色		回転ナデ	回転ナデ			
30 25 141 SK77	土器器	碗	(15.9)	5.6	6.8	審	不真	にぶい粉 色		回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ			
30 25 142 SK77	土器器	碗			(2.3)	7.0	審	やや良 い	淡黄褐色 淡黄褐色	回転ナデ	回転ナデ			
30 25 143 SK77	白磁	碗	(17.6)	(4.7)		やや粗 い	やや良 い	淡黄褐色 淡黄褐色		回転ナデ	回転ナデ		福井県周法義窯系 被焼	
30 26 144 SK56	陶器	甕			(17.4)	(3L4)	やや粗 い	良 好	にぶい小粉 色	回転ナデの後、ヘラミガキ	回転ナデの後、ヘラミガキ	福井県周法義窯系 被焼		
31 145 SK72	瓦質土器	大型	(81.6)	(86.8)	422	粗	良 好	黒褐色 暗灰色		指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ	指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ	指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ	指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ	
32 146 SD2	土器器	瓶	(8.6)	1.7	(5.0)	審	良 好	灰白色 灰白色		回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ		
32 27 147 SD7	土器器	杯	(15.4)	(27)		審	良 好	灰白色 灰白色		回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、横ナデの後、ヘラミガキ ナデ		
32 25 148 SD7	土細質土器	羽葉	(11.4)	(8.2)		やや粗 い	やや良 い	明麗灰色 にぶい粉 色		ナケ日	ナケ日	ナケ日	ナケ日	
32 25 149 SD7	土細質土器	瓶	(31.6)	(8.4)		審	良 好	灰白色 灰白色		ナケ日	ナケ日	ナケ日	ナケ日	
32 26 150 SD7	土細質土器	甕	(35.0)	(11.5)		粗	やや良 い	明麗灰色 暗灰色		ナケ日	ナケ日	ナケ日	ナケ日	
32 26 151 SD7	瓦質土器	火鉢			(6.4)	審	良 好	暗灰色 暗灰色		ナケ日	ナケ日	ナケ日	ナケ日	
32 26 152 SD7	陶器	碗			(2.8)	4.4	やや粗 い	良 好	オリーブ色 オリーブ色	回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、ナデ	肥前系	
32 26 153 SD7	瓦質土器	足頭(脚)			(15.8)	審	不真	灰白色 灰白色		指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ	指オサエ、ナデ		
32 154 SD11	土器器	瓶	5.2	0.8	4.2	やや粗 い	やや良 い	粉 色		回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、ナデ		
32 26 155 SD11	土器器	杯	(12.2)	2.6	4.6	審	やや良 い	暗灰色 暗灰色		回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、ナデ		
32 26 156 SD11	土器器	碗	15.7	4.9	6.4	審	不真	灰白色 灰白色		回転ナデ	回転ナデ	指オサエ、ナデ		
32 26 157 SD11	瓦質土器	甕	(23.6)	(6.8)		審	良 好	暗灰色 暗灰色		ナケ日	ナケ日	ナケ日		
32 26 158 SD11	土質質土器	甕	(30.0)	(8.2)		審	良 好	にぶい粉 色		ナケ日	ナケ日	ナケ日		
32 159 SD11	瓦質土器	瓶	(28.6)	(4.9)		審	良 好	灰白色 灰白色		ナケ日	ナケ日	指オサエ、ナデ		

被 用 國 別	國 別	場 所	種 別	器 種	法 規 (cm)			始 土	機 械	色 調 (内) (外)	主 な 調 整 (内) (外)	備 考		
					日 本 規 定 (公定 量)	露 高 (現 量)	底 部 (底 部 規 定)							
32	26	160	SD11	上脚質土器	足跡 (脚)	(17.1)		やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	指サエ、ナデ			
33	26	161	SD12	瓦質土器	頭	(18.0)	(6.0)	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	指サエ 指サエの後、横ナデ			
33	27	162	SD12	石製品 (空瓶類)		(32.1)						作業台に転用か 角閃岩山岩		
33	26	163	SD13	土師器	頭	6.5	14	32	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
33	26	164	SD13	土師器	頭	7.1	15	38	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
33	26	165	SD13	土師器	頭	(10.1)	1.6	50	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデの後、底部は回転赤切りの後、ナデ		
33	27	166	SD13	土師器	頭	(10.1)	2.0	46	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
33	27	167	SD13	土師器	有孔台 盤	(7.0)	3.3	62	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
33	28	168	SD13	白磁	楕	(3.3)	(6.7)	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ、施釉 回転ナデの後、ヘラケズリ	旭川市産 被熱		
35	27	169	SD13	土師器	杯	(11.0)	2.4	4.6	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	板目庄直	
33	27	170	SD13	土師器	杯	12.8	2.7	5.3	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	板目庄直	
33	27	171	SD13	土師器	杯	14.3	2.6	6.0	密	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	板目庄直
33	27	172	SD13	土師器	杯	12.5	2.6	5.4	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	板目庄直	
33	28	173	SD13	土師器	杯	13.7	2.9	6.5	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	板目庄直	
33	174	SD13	土師器	杯	(12.5)	3.1	5.0	密	やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は「寧なナデ」	板目庄直	
33	28	175	SD13	土師器	杏呑	(1.9)	(8.6)	密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ヘラ			
33	28	176	SD13	土師質土器	頭	(4.0)			やや粗	やや良	明麗灰色 に云い物色	横ナデ 横ナデ		
33	28	177	SD13	瓦質土器	頭	(5.9)			密	良	底ホタル色 底ホタル色	横ナデ 指サエの後、横ナデ		
33	28	178	SD13	土師質土器	足跡 (脚)	(12.6)			やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	指サエの後、縱方向のナデ		
33	28	179	SD13	瓦質土器	盤詰	(29.4)	11.0	14.0	やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、指サエ 指サエの後、青灰色	8条1単位の様目。板目庄直	
33	28	180	SD13	土師質土器	盤詰	6.9			密	良	底ホタル色 底ホタル色	ナデ、ハイ貝の後、指サエ 指サエの後、ナデ		
33	28	181	SD13	瓦質土器	頭	(21.0)	(5.9)		やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、横方向のヘラナデ 指サエの後、横ナデ		
33	28	182	SD13	瓦質土器	盤詰	(26.4)	(7.3)		密	良	青灰色 青灰色	ハラケズリ 指サエの後、横ナデ		
33	28	183	SD13	石製品	石頭	(23.8)	(9.0)				青灰色 青黑色	ノミケズリ ノミケズリの後、丁寧な健筋	滑石類 宇都山下湖田南庄会	
34	28	184	SD15	瓦質土器	頭	(3.1)			密	良	底ホタル色 底ホタル色	横ナデ、指サエ 指サエの後、ナデ		
34	29	185	SD15	土師器	上溝	穿孔径 0.5	2.5	底大径 2.5	密	良	に云い黄色	ナデ、指サエ		
34	28	186	SD16	土師質土器	頭	(24.6)	(7.9)		やや粗	良	明麗灰色 明麗灰色	横ナデ 指サエの後、横ナデ		
34	28	187	SD23	土師器	頭	6.1	1.3	4.0	やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
34	188	SD30	瓦質土器	頭	(19.2)	(4.6)		やや粗	良	青灰色 青灰色	ハラケズリ 指サエ			
34	189	SD41	土師器	頭	(7.7)	1.3	(5.0)	やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、底ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ			
34	28	190	SD41	土師器	台付楕	(26)	4.2	やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、丁寧なナデ			
34	29	191	SD41	土師器	台付楕	(3.7)	(6.4)		密	良	に云い粉色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
34	28	192	SD41	土師器	楕	(2.9)	6.9		密	不良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	岸誠差しい	
34	193	SD41	土師器	楕	(2.9)	(6.8)		密	不良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	岸誠差しい		
34	194	SD41	土師器	杯	(2.6)	(6.0)		密	不良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ	岸誠差しい		
34	29	195	SD41	土師器	杯	(14.5)	4.1	6.8	密	やや粗	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、静ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ		
34	29	196	SD41	土師器	楕	(13.8)	(2.3)		やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、ハイミガキ 回転ナデの後、ハイミガキ		
34	29	197	SD41	土師器	楕	(13.4)	(3.5)		密	良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデの後、ハイミガキ 回転ナデの後、ハイミガキ		
35	198	SE1	土師器	頭	(9.4)	1.4	(5.8)	やや粗	やや良	底ホタル色 底ホタル色	回転ナデ 回転ナデ、底部は回転赤切りの後、ナデ			
35	29	199	SE1	瓦質土器	足跡	(20.4)	(8.2)		やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	ナデ、ハイ貝の後、指サエ 指サエ、格子目タキ		
35	29	200	SE1	瓦質土器	盤詰	(25.4)	(7.1)		やや粗	良	底ホタル色 底ホタル色	ハイ貝の後、指サエ 指サエの後ハイ貝の後、横ナデ	5条1単位の様目	
35	29	201	SE1	瓦質土器	頭	(19.8)	20.5		やや粗	良	黑色 黑色	横ナデ ナデ	片口把手	
35	29	202	SE1	瓦質土器	火鉢	(38.4)	(21.5)		密	良	黑色 黑色	横ナデの後、指サエ 指サエの後、火鉢ナデ 火鉢ナデの後、底部は横ナデ 横ナデの後、ヘラガキ		
35	29	203	SE1	石製品	糞便	上糞便 (19.2)	13.0	下糞便 (18.8)			褐色	横ナデの後、糞石上上げか	上白、8分割、挽木本丸品 (1)に3段變形の掛楕様、舟 閃石安山岩	

規格	回数	品名	底土 場所	機器	器械	法華(㎝)			始土	機械	色調(内) (外)	主な調整(内) (外)	備考	
						日付 (仮定期)	露高 (現定期)	底土 (底定期)						
35	29	204	SE2	土耕器	耕	(1.4)	(6.8)	密	やや良	浅黄色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切り	板目庄重		
35	29	205	SE2	白磁	輪	(2.1)	6.1	やや粗	良	底白色 底白色	回転ナダ 回転ナダ、底部は割り出し高台	掘建者産		
35	29	206	SE2	土耕質土器	要	(20.5)	(9.3)	粗	良	底灰色 底灰色	横ナダ、ナダ 横ナダ、ナダナダ、ナダ			
35	29	207	SE2	土耕質土器	要	(20.8)	(9.3)	やや粗	良	底灰色 底灰色	回転ナダの後、ハナダ 回転ナダの後、ハナダ	内面の一部に保付着		
35	208	SE2	瓦質土器	耕耘	(34.6)	(6.3)	粗	良	にふい 青褐色、暗褐色 底白色、暗灰色	横ナダ、ナダの後、揉目施文 横ナダ、ナダセミナダ				
36	30	209	SE3	土耕器	耕	7.4	1.5	5.0	密	良	底白色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目庄重、底部中央に焼成後、外側からの空気	
36	30	210	SE3	土耕器	耕	(10.6)	2.3	(5.0)	密	良	底白色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ	内外面に油膜保付着 内外面に保付着、板目庄重	
36	30	211	SE3	土耕器	耕	(10.0)	2.5	4.1	密	良	にふい 青褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切り	板目庄重	
36	30	212	SE3	瓦質土器	足綱	18.3	(11.3)	密	良	にふい 青褐色 底白色	ハケ日の後、ナダ ハケ日の後、ナダ、底部は桔子目タタキ	内面底に炭化物 内面底に保付着		
36	30	213	SE3	土耕器	杯	(14.0)	4.4	(5.0)	密	良	底白色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切り	板目庄重	
36	30	214	SE3	木製品	鉢	厚5 13.6	厚5 0.8	重量	良	底白色 底白色			左右に穴吹1ヶ所	
36	30	215	SE3	金属製品	小網	厚5 1.5	厚5 23.2	重量 0.3	重量	良	底白色 底白色		柄部にねじ巻きつけ	
37	30	216	ST1	土耕器	耕	(8.0)	1.5	4.4	密	やや良	褐色 褐色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	30	217	ST1	土耕器	耕	7.8	1.3	4.8	密	やや良	にふい 褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	30	218	ST1	土耕器	耕	(7.7)	1.1	(5.2)	やや粗	やや良	褐色 にふい 褐色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	31	219	ST1	土耕器	耕	7.7	1.2	4.7	密	やや良	にふい 褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	31	220	ST1	土耕器	耕	8.0	1.2	5.2	密	やや良	にふい 褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	31	221	ST1	土耕器	杯	14.2	4.3	5.8	やや粗	やや良	浅黄色 褐色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
37	31	222	ST1	青磁	輪	16.6	6.7	5.9	やや粗	良	オーリーブ灰 オーリーブ灰	回転ナダ後施文、地盤 回転ナダの後、地盤	体内部3分野、飛虫を 避え、見込みに着目する文様、 壁面系	
37	31	223	ST1	鉄製品	小刀	厚5 3.0	厚5 2.7	1.0	重量	良	1600kg		数ヶ所に本質が残存	
37	31	224	ST1	鉄製品	用道	足綱 小網	厚5 23.0	厚5 9.0	0.3	重量	26.1g			
38	31	225	SK1	土耕質土器	耕	(28.8)	(3.8)	密	やや良	底白色 底白色	横ナダ 横ナダの後、ヘリミガキ			
38	31	226	SD4	瓦質土器	耕	(23.2)	(7.9)	密	やや良	底白色 底白色	横ナダ、ハケ日 横ナダ、密オサエの後、桔子目タタキ			
38	31	227	SD4	瓦質土器	耕	(25.6)	(5.7)	密	良	底白色 底白色	横ナダの後、ハケ日 横ナダの後、ハケ日			
38	32	228	SD4	瓦質土器	耕	(26.6)	(8.3)	密	良	底白色 底白色	横ナダの後、ハケ日 横ナダ、密オサエの後、桔子目タタキ			
38	32	229	SD4	瓦質土器	耕	21.3	9.4	粗	良	底白色 にふい 青褐色～底褐色	横ナダ、ハケ日の後、ナダ 横ナダ、桔子目タタキの後、ナダ	片口、把手付		
38	32	230	SD4	瓦質土器	耕	(22.8)	5.7	(20.0)	やや粗	良	底白色 底白色	ハケ日の後、ナダ 密オサエの後、地盤 回転ナダの後、地盤 回転ナダの後、地盤、高台円門に貼剥ぎ、 貼り付け高台		
38	31	231	SD4	白磁	輪	16.0	3.6	10.0	密	良	底白色 底白色	横ナダ 横ナダの後、地盤	豊也鉄窯室系	
38	32	232	SD4	瓦質土器	足綱(脚)	(13.1)			やや粗	やや良	褐色 底白色	密オサエの後、ナダ		
38	32	233	SD4	鉄製品	用道	幅4.0 小網品	長さ 2.7	5.0 -0.4	重量	0.9kg				
38	32	234	SD4	鉄製品	釘	上耕器 足綱	長5 2.0	下耕器 底耕器 足綱 底耕器	重量	0.9kg			上部先端を彫曲	
38	32	248	SD4	鋼鉄	耕	重耕 小網	厚5 2.5	厚5 0.8	重量	1.4 -1.0	0.6kg		北光、景徳元(1004)年鑄 落成、2次火	
38	31	235	ST1	土耕器	耕	7.8	1.6	4.9	やや粗	やや良	底白色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
38	31	236	ST1	土耕器	耕	7.9	1.7	5.0	密	良	にふい 褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
38	237	ST1	土耕器	耕	8.3	1.4	5.4	やや粗	やや良	底白色 にふい 褐色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ			
38	32	238	ST1	土耕器	耕	8.2	1.7	5.4	やや粗	やや良	底白色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		
38	32	239	ST1	土耕器	耕	8.5	1.6	5.1	密	やや良	にふい 褐色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ	板目庄重	
38	32	240	ST1	土耕器	杯	15.1	4.0	7.7	密	やや良	浅黄色 底白色	回転ナダの後、静止ナダ 回転ナダ、底部は回転赤切りの後、ナダ		

IV まとめ

今回実施した東禅寺・黒山遺跡の発掘調査では、主に古代（平安時代後期）・中世（鎌倉・室町時代）の遺構・遺物が確認された。以下、1983年度（昭和58年度）に当センターが調査を行った上辻遺跡ならびに銭司大歳遺跡の成果を踏まえつつ、本遺跡における特徴的な事項を取り上げて、調査成果のまとめとしたい。

集落の変遷

最初に、当該地区の集落の変遷について検討したい。本遺跡の集落と隣接する上辻遺跡の集落は、地形的に見て一単位の集落として捉えるのが自然である。本遺跡では17地区において掘立柱建物跡20棟、過去の上辻遺跡の調査では17棟、計37棟が復元された（第39図）。復元した37棟中時代が比定できた27棟を時代別に分けると、平安時代に属する建物跡は7棟、鎌倉時代に属する建物跡は8棟、室町時代に属する建物跡は10棟、時期の細分ができる中世の建物跡2棟となり、当該地域において古代から中世にかけて断続的に集落が営まれていたことが看取できる。平安時代の建物跡は大部分が上辻遺跡で確認されており、17地区で検出されたのはS B16のみである。また、平安時代に属する土坑等もS B16以降には確認されていない。このことは、当時の汀線が少なくとも標高約7.45～7.50m上に立地していたS B16より南側に存在したことを示唆している。鎌倉時代に入ると集落の広がりが見られるが、17地区で検出されたS B10は当該地区の中でも最大規模を誇る。隣接するS B9と共に、集落の中心的な役割を担う建物であった可能性が高い。地域の有力者が居住していた可能性もあり、青磁・鉄製小刀等の副葬品を伴い同じ時代に比定される土坑墓S T1との関連性も考えられる。

室町時代に入ると、集落の中心は17地区に移り、近世初頭には何らかの理由で集落規模が縮小し、やがて集落は姿を消して耕作地に転化したと考えられる。

S T 1出土烏帽子について

17地区で検出されたS T 1は、副葬品と考えられる青磁・土師器杯1点・土師器皿5点・鉄製小刀ならびに用途不明鉄製品と床面直上から黒色の漆膜が検出された。漆は烏帽子に塗布されたものと考えられるが、本体が残っておらず、布目痕も確認できなかったため、紙製だった可能性もある。当時の成人男性は烏帽子を當時被っていたと考えられており、絵巻物には烏帽子を被った状態で就寝している様子なども見られることから、埋葬時にも日常と同じように被葬者に被せた状態で埋葬されることも想定できる（藤原2012）が、今回の出土例は漆膜の上に青磁・土師器皿杯が位置しており、被葬者は烏帽子を着用した状態ではなかったことが窺える。

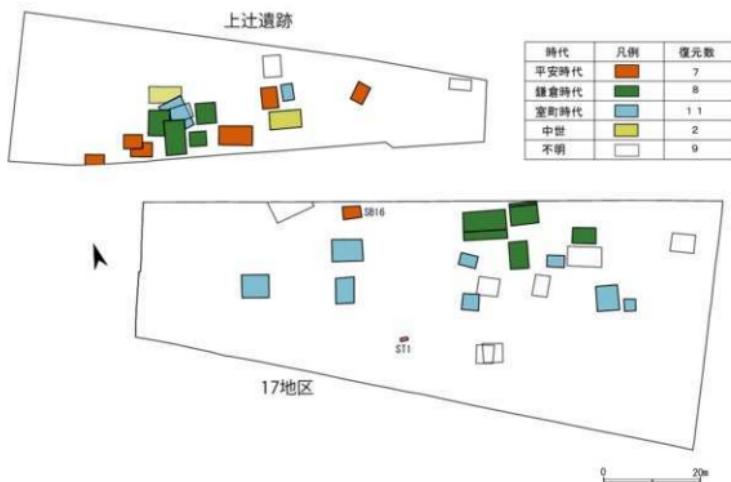
本遺跡の約200m東に位置する銭司大歳遺跡の調査では、平安時代に属する墓2基、鎌倉時代に属する墓が3基、計5基の墓が検出された。このうち、17地区S T 1と同時代の木棺墓B P - 3から形状不明の漆塗製品が出土している。報告書によると、30cm四方の茶褐色の漆塗製品は枕としての用も考えられていたが、後に財團法人大阪府文化財調査研究センター発行の「総持寺遺跡」の中で、実見により折り烏帽子の類であると指摘されている。

ところで、全国の烏帽子の出土例はこれまで62遺跡76例があげられ、都道府県別にみると山口県が7遺跡12事例で最も多い（藤原2012）。当遺跡は県内8遺跡13事例目となる。

また、鎌倉司大歳遺跡 B P - 4・B P - 5 の副葬品（輸入磁器・和鏡・鉄刀など）は質量ともに優品である。17地区 S T 1 についてはやや質量が劣るもの、その副葬品は前述2基との類似性がみられ、この3基の被葬者は、相似た社会的身分を有していたと考えられる。

おわりに

今回の調査の結果、本遺跡一帯における古代から中世にかけての歴史の変遷を明らかにするうえで、廟を有する大型建物、平安時代末期に比定される S K35 から出土した一括資料、多数の輸入磁器、中世井戸から出土した完形の小柄など多くの貴重な資料を得ることができた。これら復元された建物の数や規模、出土遺物の質と量は、当集落が単なる農村集落ではなく経済的にも優位な階層の人々が住んでいたことを示唆しており、このことは、「鎌倉司大歳遺跡は、農村集落とはかけ離れた性格を有する」とする当時の調査成果ともよく符合する。反面、周防鎌倉司が停廃した後、当該集落の住人は何を経済基盤としていたのか、歴史的背景の究明が課題となるだろう。今後、新たな発掘調査によって、当該地域の歴史がさらに解明されることを期待したい。



第39図 東禪寺・黒山遺跡17地区・上辻遺跡遺構配置略図

参考文献

- 藤原彰久「秋根遺跡出土の漆片について」『下関市立考古博物館 研究紀要』第16号 2012
財團法人大阪府文化財調査研究センター「總持寺遺跡」1998
山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター編『上辻・鎌倉司大歳・今宿西』1984

付編 1

東禪寺・黒山遺跡出土金属製品有機物の材質調査結果

(株)吉田生物研究所

1. 試料

試料は、山口県に所在する東禪寺・黒山遺跡から出土した金属製品1点の柄に巻かれている黒い光沢のある有機質である(図版1)。



図版1

2. 観察方法

数mm四方の試料をエポキシ樹脂に包埋して研磨して、横断面、放射断面の薄片プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

顕微鏡観察から、横断面と放射断面ではコルク組織とコルク皮層が交互に並んで密に詰まって配列しているが見られる(図版2~5)。以上から金属製品に巻かれている有機質は桜ないしは桺の樹皮と考えられる。桜と桺の皮は顕微鏡観察での識別は難しい。

◆参考文献◆

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所(1991)

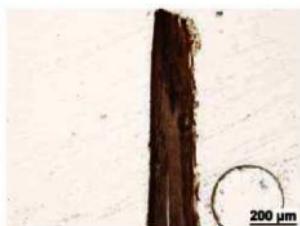
島地 謙・須藤彰司・原田 浩「木材の組織」森北出版(1976)

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編I・II」保育社(1979)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1



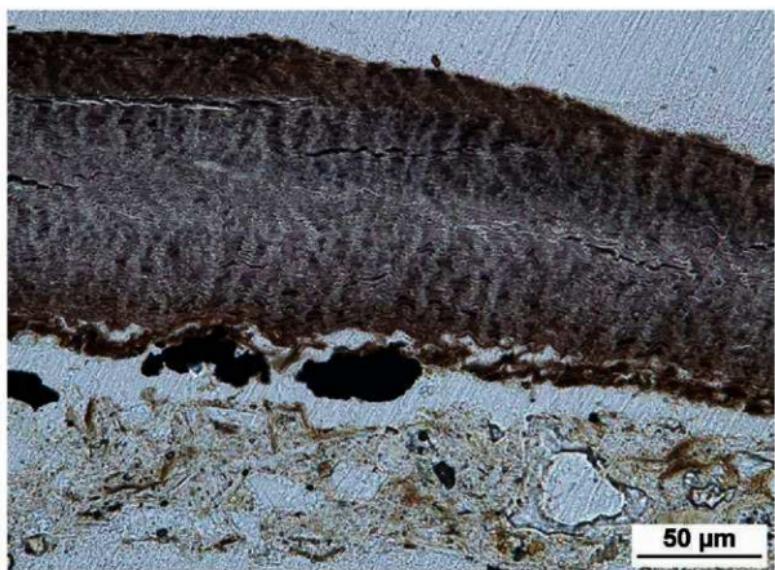
図版2 放射断面-1



図版3 放射断面-2



図版 4 横断面-1



図版 5 横断面-2

付編 2

東禅寺・黒山遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、東禅寺・黒山遺跡で検出された遺構の構築・機能年代を知ることを目的としてAMS法による放射性炭素年代測定を実施する。また、中世の土坑墓の遺体埋納の検証を行う目的でリン・カルシウム分析を実施する。

I. 放射性炭素年代測定

1-1. 試料

放射性年代測定は、17地区のSK35、SK72、SP355の各遺構埋土から出土した炭化材片3点について実施する。発掘調査の結果、SK35から12世紀前半の土師器壺・壺・皿、須恵器口鉢、SK72から16世紀後半の瓦質土器大甕、SP355から銅錢が出土している。また、分析試料とした炭化材は、電子顕微鏡による樹種同定の結果、SK35がマツ属単維管束亜属、SK72がクリ、SP355がコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。木材の解剖学的特徴は結果と併せて表1に記載する。

1-2. 分析方法

分析は、AMS法で実施する。試料表面の汚れをビンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(AAA処理)。水酸化ナトリウム処理については、試料の損耗がおこるため、注意深く行う。

試料を燃焼させたあと、不純物(水など)を取り除き、精製されたCO₂を得る。これを還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、小型タンデム加速器にて測定する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0を用いる。なお暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σと2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とはσや2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

1-3. 結果

結果を表1に示す。同定体補正を行った年代値は、17区SK35で990±20BP、17区SK72で360±20BP、17区SP355で680±20BPである。暦年較正値(2σの確率1位)は、SK35がcalAD991~

1048、S K72がcalAD 1554～1633、S P355がcalAD 1272～1308である。これら年代値に基づくと、各遺構の利用年代は、S K35が10世紀末～11世紀前半頃、S K72が16世紀後半～17世紀後半頃、S P355が13世紀後半～14世紀初頭頃と推定される。

いずれの試料も炭化材片であったことから、残存部位が利用された木材との部分に相当するかは判断がつかず、大木の心材を利用しているとすると、年代値は実際に利用された年代より古い年代を示していることになる。今回の炭化材の樹種は、いずれも二次林の構成要素となる、成長が早い樹種であることから、残存部位が大木の心材部でない限り、その影響は小さいと思われる。また、伐採年と燃料として利用された年代が異なり、年代測定に誤差が生じている可能性もある（古木効果）。これらの誤差の影響を考慮すると、今回の年代測定値は、出土遺物から推定される年代観とも概ね同調的な結果といえる。

表1 放射性炭素年代測定結果

調査区 道構名 試料状態	前処理	測定年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (曆年較正用) BP	曆年較正年代 (cal)				Code No.
					散布度	cal AD	cal BP	相対比	
17地区 SK35 炭化材	AAA	990±20 ± 0.54	-25.12 990 ± 20 (992±23)	σ	cal AD 1014 - cal AD 1042	cal BP 936 - 908	0.857	IAAA- 132387	
					cal AD 1106 - cal AD 1117	cal BP 844 - 833	0.143		
				2σ	cal AD 991 - cal AD 1048	cal BP 959 - 902	0.746		
					cal AD 1087 - cal AD 1123	cal BP 863 - 827	0.208		
17地区 SK72埋土 炭化材	AAA	330±20 ± 0.52	-23.62 360 ± 20 (355±21)	σ	cal AD 1474 - cal AD 1521	cal BP 476 - 429	0.573	IAAA- 132388	
					cal AD 1577 - cal AD 1583	cal BP 373 - 367	0.045		
				2σ	cal AD 1591 - cal AD 1621	cal BP 359 - 329	0.382		
					cal AD 1457 - cal AD 1527	cal BP 493 - 423	0.492		
17区地区 SP355 炭化材	AAA	690±20 ± 0.45	-25.60 680 ± 20 (684±24)	σ	cal AD 1278 - cal AD 1298	cal BP 672 - 652	0.852	IAAA- 132389	
					cal AD 1372 - cal AD 1378	cal BP 578 - 572	0.148		
				2σ	cal AD 1272 - cal AD 1308	cal BP 678 - 642	0.726		
					cal AD 1361 - cal AD 1386	cal BP 589 - 564	0.274		

- 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した測定誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%に入る範囲) を年代値に換算した値。
- 曆年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0を使用。曆年計算には表に示した曆年較正用の丸める前の補正年代値を使用している。
- 曆年較正結果は曆年較正曲線や曆年較正プログラムが校正された場合の再計算や比較がいいやさしい。統計的に真の値が入る確率は σ 16.6%, 2σ は95%である。相対比は、 σ , 2σ のそれぞれをとした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
- 炭化材の樹種および解説的特徴を以下に示す。木材組織の名称は、鳥居・伊東（1982）、Wheeler等（1991）等に詳しく述べる。
- SK35: マツ属炭化管束垂直道 (Pinus subgen. Diploxylon) : 軸方向組織は仮道管と垂直筋道脈で構成される。仮道管の早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は大きい。垂直筋道脈は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔組織、水道筋道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には断面形状の突起が認められる。放射組織は單列、1-15細胞高。
- SK72: ブナ科クリ属クリ (Castanea crenata Sieb et Zucc.) : 球孔材で、孔團部は3-4列、孔團部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。放射組織は単孔孔を有し、母孔は交叉状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15細胞高。
- SP355: コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Quercus subgen. Quercus sect. Primis) : 球孔材で、孔團部は1-3列、孔團部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。母孔は単孔孔を有し、母孔は交叉状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20細胞高のものと複合放射組織がある。

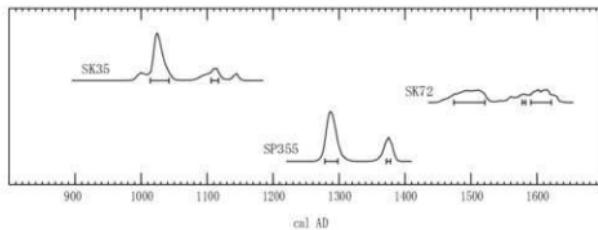


図1 曆年較正結果

II. リン・カルシウム分析

2-1. 試料

リン・カルシウム分析は、17地区 S T 1 遺構の遺構内埋土上層、遺構内埋土中層、遺構内埋土下層、遺構周辺土、18地区 S T 1 遺構遺構内埋土下層、遺物（土師器皿）の直下土、遺構周辺土の7点である。各遺構の年代は出土遺物等から13~14世紀と推定される。試料の土質については結果と併せて表2に示す。

2-2. 分析方法

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解-原子吸光法（土壤標準分析・測定法委員会、1986）に従った。以下に各項目の操作工程を示す。

・分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの節で篩い分ける。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

・リン酸、カルシウム含量

粉碎土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約10mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P₂O₅）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P₂O₅ 5 mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

2-3. 結果

結果を表2に示す。17地区 S T 1 のリン酸含量は対照試料である遺構周辺土が0.79mg/gを示す。遺構埋土は上層で周辺土より低い値を示すが、中層・下層では約2mg/g・約2.5mg/gと周辺土に比較して明らかに高い値を示す。カルシウム含量は対照試料に比較して、埋土試料でやや高い傾向にあるが、

表2 土壤理化学分析結果

地区	遺構	採取場所	土性	土色	全リン酸 P ₂ O ₅ (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)
17	ST1	遺構内埋土上層	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	0.43	3.12
		遺構内埋土中層	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	1.99	3.57
		遺構内埋土下層	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	2.46	3.44
		遺構周辺土	LiC	2.5Y5/4 黄褐色	0.79	2.75
18	ST1	遺構内埋土下層	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	0.77	2.62
		遺物（土師器皿）の直下土	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	0.80	2.52
		遺構周辺土	LiC	2.5Y5/3 黄褐色	0.97	3.13

備考

(1) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

LiC…軽粘土（粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）

(2) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

いずれも 3 mg/g 前後の値であり、有意差とみなすには十分でない。

18地区 S T 1 では、リン酸含量・カルシウム含量ともに遺構内埋土と対象資料である遺構周辺土で有意差はみとめられない。

2-4. 考察

リン酸やカルシウムは土壤中に普遍的に存在する。しかし、動物遺体には土壤中よりも遙かに多いリン酸やカルシウムが含まれるため、遺体が埋められ、腐朽したあとも成分として土壤中に高濃度で残る場合がある。特にリン酸は水に溶けにくいため土壤中での移動が少なく、遺体が腐朽した後もその場にとどまっている可能性が高い。一方カルシウムは水に溶けやすく流失してしまうことがある。土壤中に含まれる一般的なリン酸量やカルシウム量は、地質学的な背景によって大きく異なるため一概には言えない。ただ、これまでの分析実績と経験値からして、リン酸値では沖積層で 1 mg/g 程度、リン酸を保持しやすい火山灰土では最大 3 mg/g 程度である。また施肥や腐植含量の影響で表層部分ほどリン酸量が高くなる傾向がある（田中・坂井、2007など）。

今回の結果をみると、17地区の土坑墓 S T 1 遺構内埋土では、上層よりも中層・下層でリン酸値が高く、対象とした遺構周辺土を上回っていることから、遺構内に遺体などリン酸を多く含む物質が埋納されていた可能性が高い。一方、18地区の S T 1 遺構埋土については周辺土との間で有意な差が確認されておらず、リン酸が富化するような状況になかった可能性がある。なお、カルシウムについてはいずれの地区もはっきりせず、経年変化により地下水等によって成分が拡散している可能性がある。

引用・参考文献

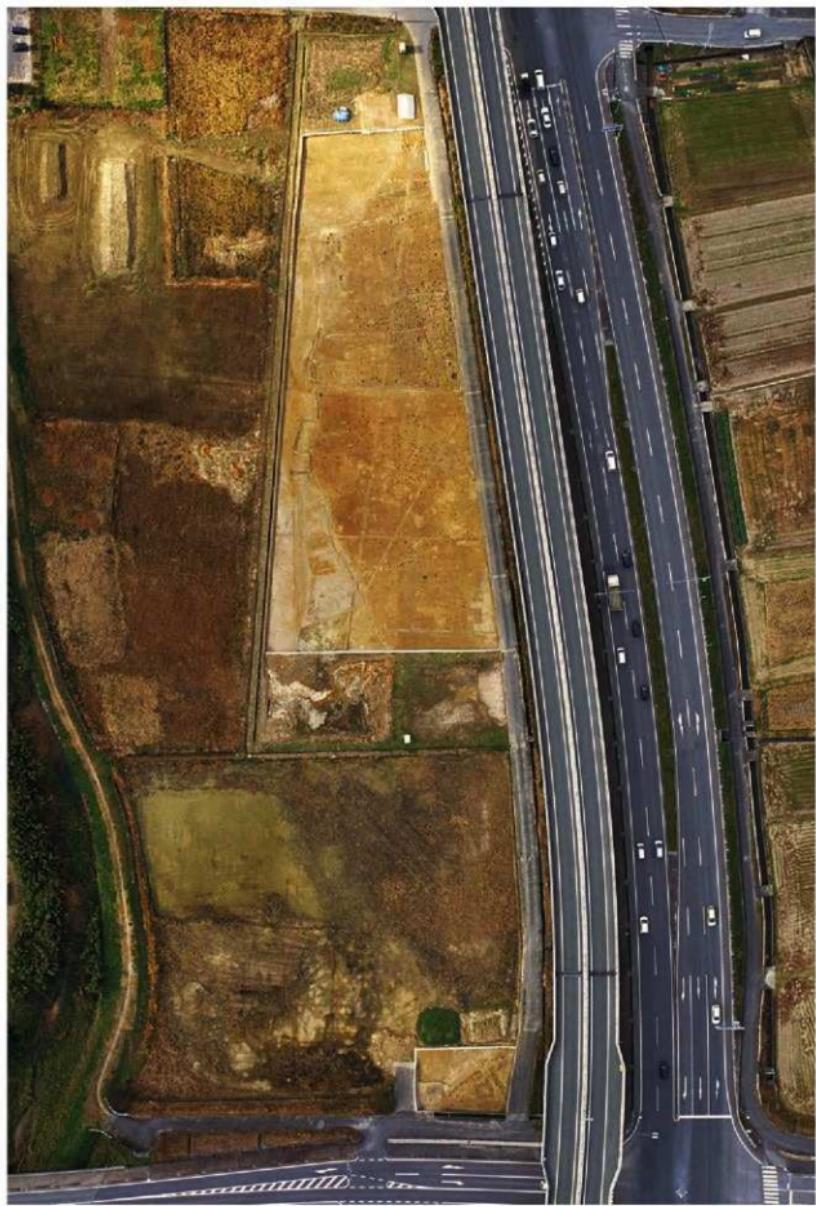
- 土壤標準分析・測定法委員会編. 1986. 土壤標準分析・測定法. 博友社. 354p.
- 林 昭三. 1991. 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修. 1967. 新版標準土色帖.
- ペドロジスト懇談会. 1984. 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編 土壤調査ハンドブック. 博友社. 39-40.
- 島地 謙・伊東隆夫. 1982. 図説木材組織. 地球社. 176p.
- 田中義文・坂井良輔. 2007. 土壤理化学分析を用いた遺体埋納推定の手法と課題. 德永重元博士献呈論集. パリノ・サーヴェイ株式会社. 417-428.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編). 1998. 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修). 海青社. 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

図 版



調査区遠景

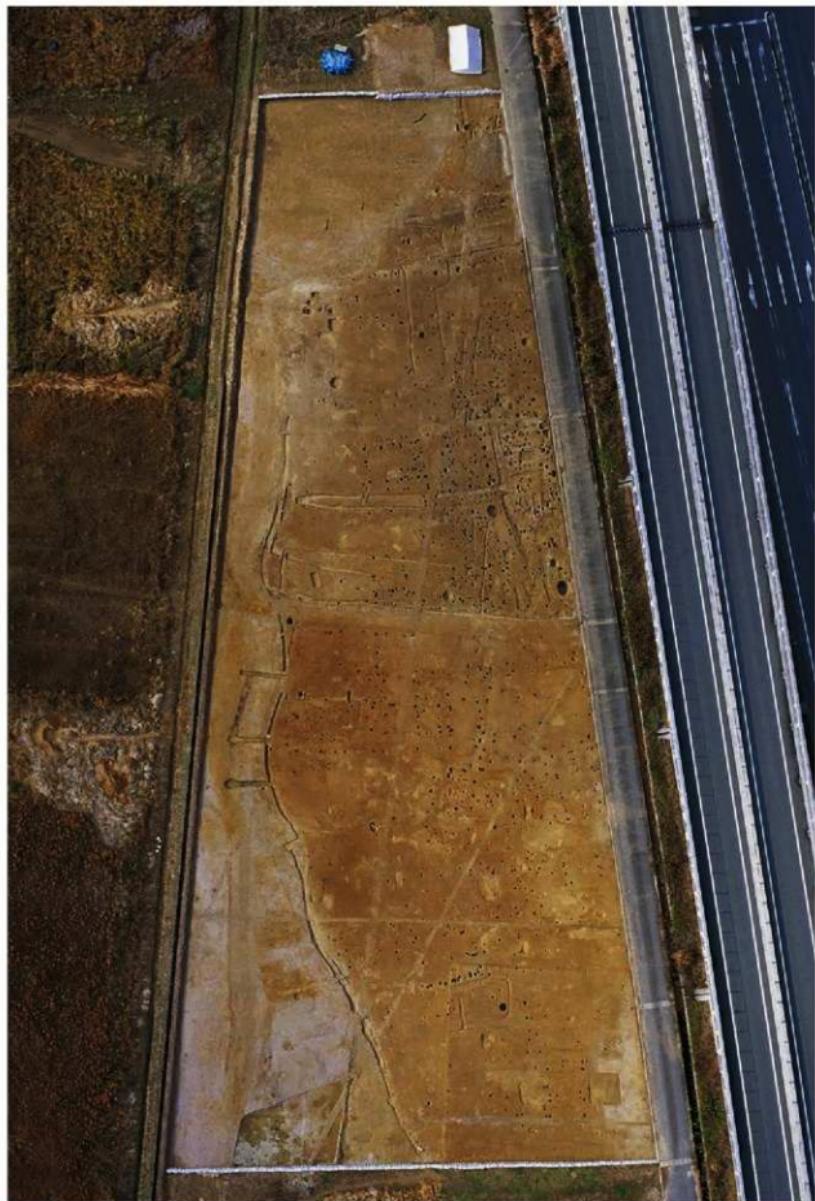
図版 2



調査区全景

17 地区

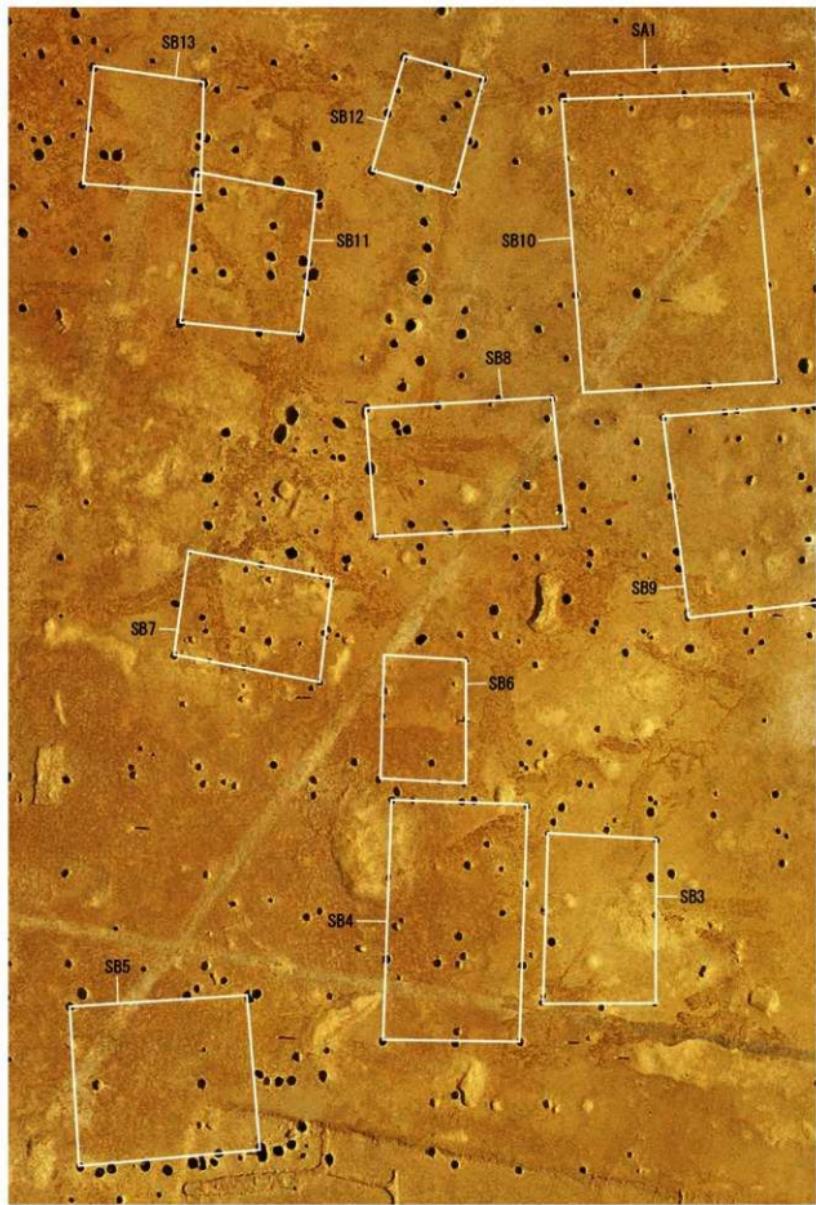
図版 3



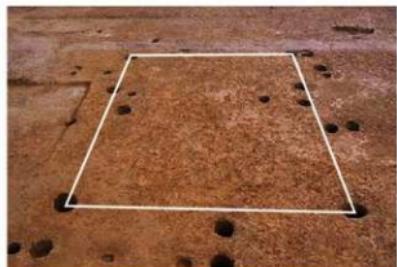
17 地区全景



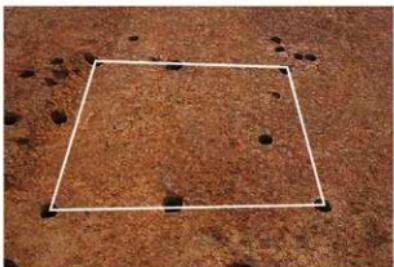
17 地区中央部遺構密集部分



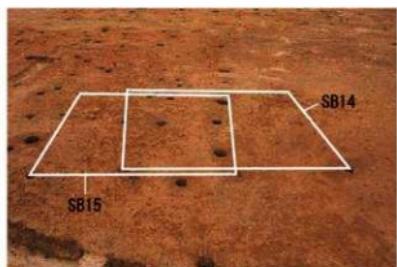
17 地区東部掘立柱建物群



SB1 完掘状況（西から）



SB2 完掘状況（西から）



SB14・SB15 完掘状況（南から）



SB20 完掘状況（西から）



SB10 SP538 遺物出土状況（西から）



SB19 SP474 遺物出土状況（西から）



SP80 遺物出土状況（東から）



SP88 遺物出土状況（西から）



SP113 遺物出土状況（西から）



SP134 遺物出土状況（北から）



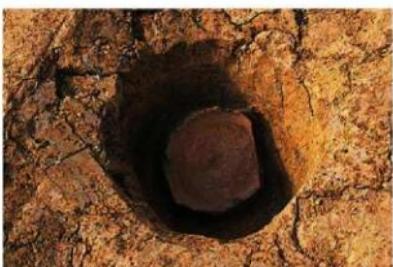
SP257 遺物出土状況（南から）



SP272 遺物出土状況（南から）



SP338 遺物出土状況（東から）



SP352 遺物出土状況（東から）



SP355 遺物出土状況（北から）



SP376 遺物出土状況（北から）



SP385 遺物出土状況（南から）



SP401 遺物出土状況（西から）



SP425 遺物出土状況（北から）



SP426 遺物出土状況（東から）



SP462 遺物出土状況（西から）



SP464 遺物出土状況（西から）



SP479 遺物出土状況（西から）



SP487 遺物出土状況（北から）

17 地区

図版 9



SP491 遺物出土状況（東から）



SP492 遺物出土状況（北から）



SP586 遺物出土状況（西から）



SP588 遺物出土状況（西から）



SK9 遺物出土状況（南から）



SK11 土層断面（北から）



SK12 土層断面（南から）



SK12 遺物出土状況（南から）

図版 10

17 地区



SK15 土層断面（南から）



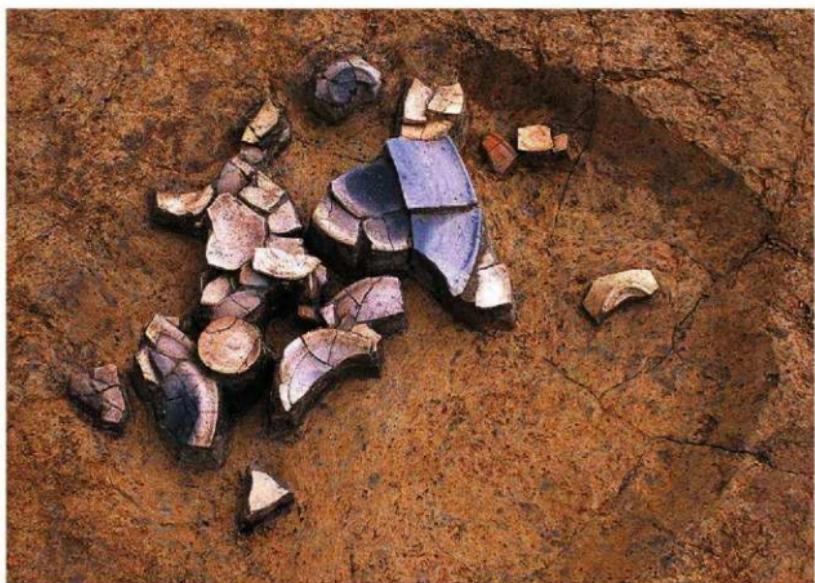
SK32 炭検出状況（北から）



SK32 焼土検出状況（東から）



SK33 土層断面（南から）



SK35 遺物出土状況（西から）

17 地区

図版 11



SK35 土層断面（南から）



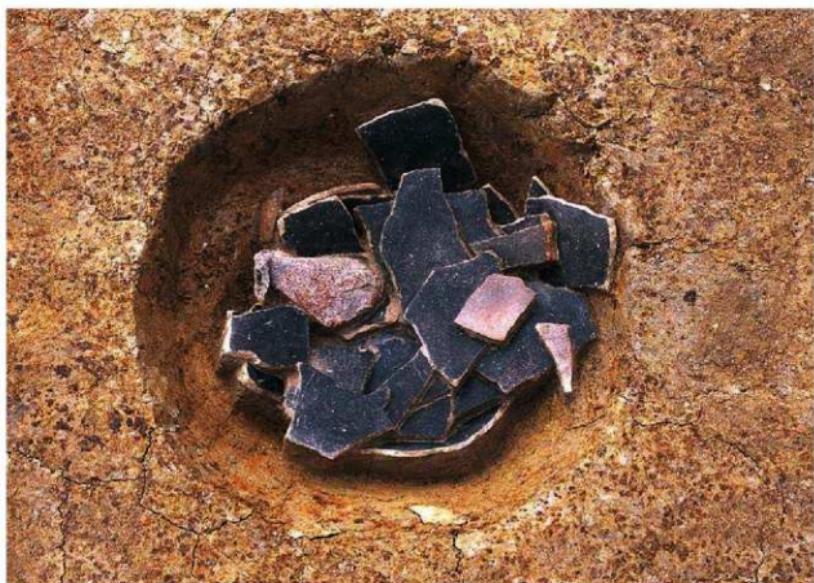
SK35 完掘状況（西から）



SK72 土層断面（南から）



SK72 完掘状況（西から）



SK72 遺物出土状況（北から）

図版 12

17 地区



SK77 遺物出土状況①（東から）



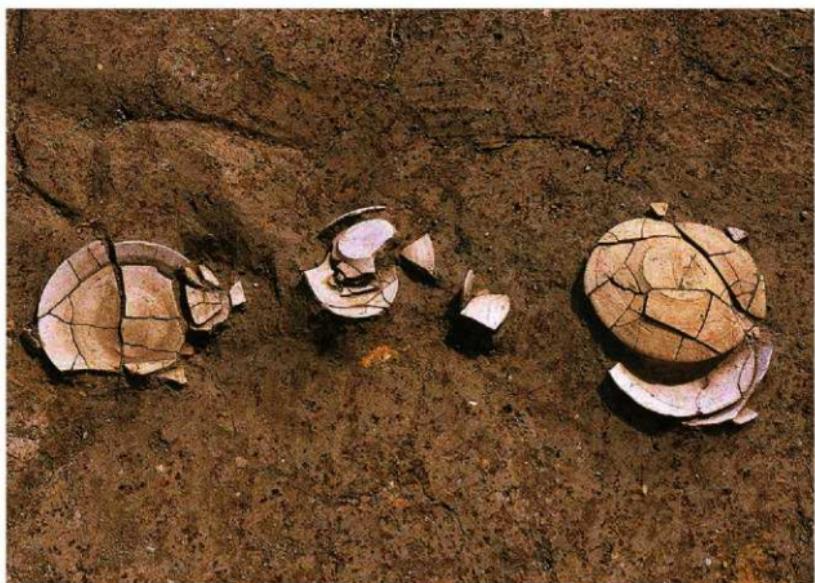
SK77 遺物出土状況②（北から）



SK78 遺物出土状況（北から）



SK78 完掘状況（西から）



SD13 遺物出土状況（北から）

17 地区

図版 13



SD7・SD11 トレンチ 2 土層断面（北から）



SD11 遺物出土状況（北から）



SD12 遺物出土状況（北から）



SD41 遺物出土状況（南から）



SE1 遺物・碟出土状況（南から）



SE2 碟出土状況（南から）



SE3 土層断面（東から）



SE3 完掘状況（北から）



ST1 遺物出土状況①（南から）



ST1 遺物出土状況②（西から）



ST1 遺物出土状況③（南から）



ST1 遺物出土状況④（南から）



ST1 完掘状況（南から）

18 地区

図版 15



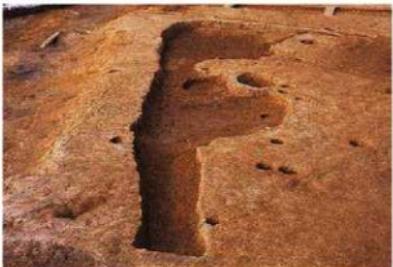
18 地区全景

図版 16

18 地区



SK1 土層断面（西から）



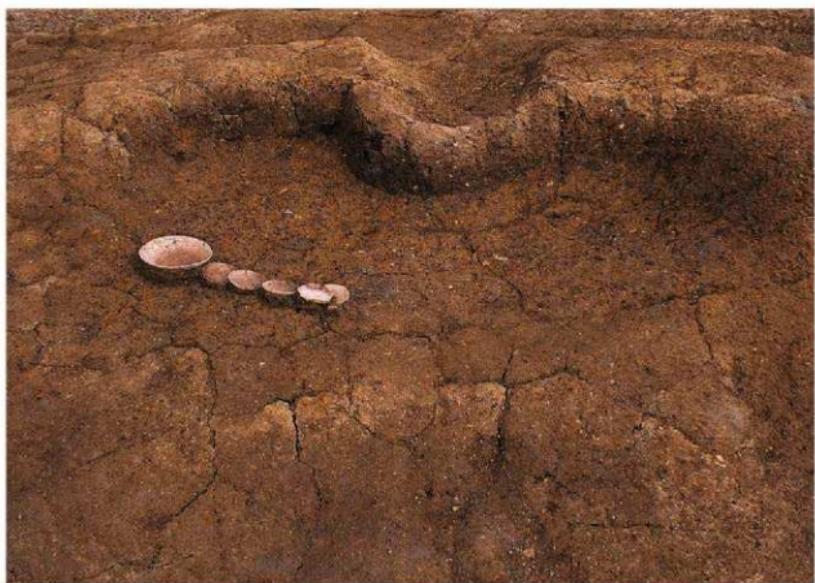
SD4 完掘状況（南から）



SD4 トレンチ 1 土層断面（南から）



SD4 トレンチ 2 土層断面（南から）



ST1 完掘状況（西から）

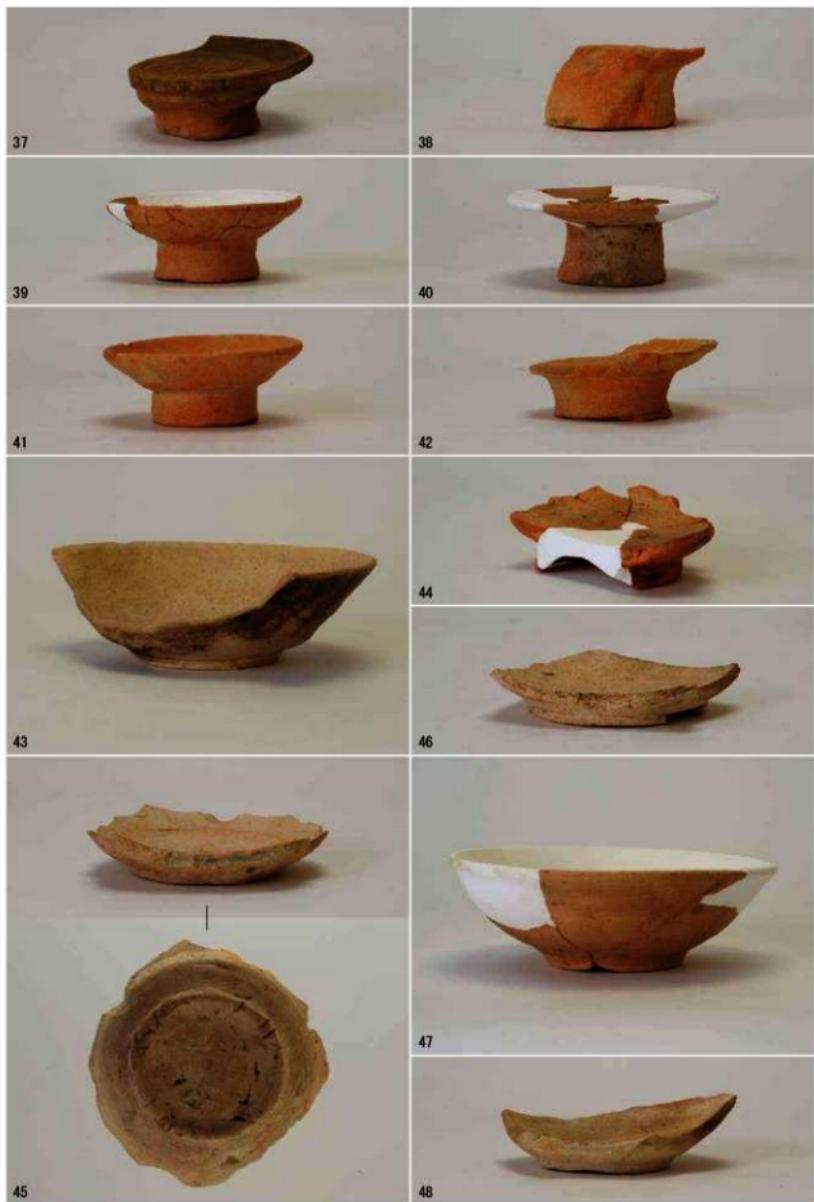


出土遺物（1）

図版 18



出土遺物 (2)



出土遺物 (3)

図版 20

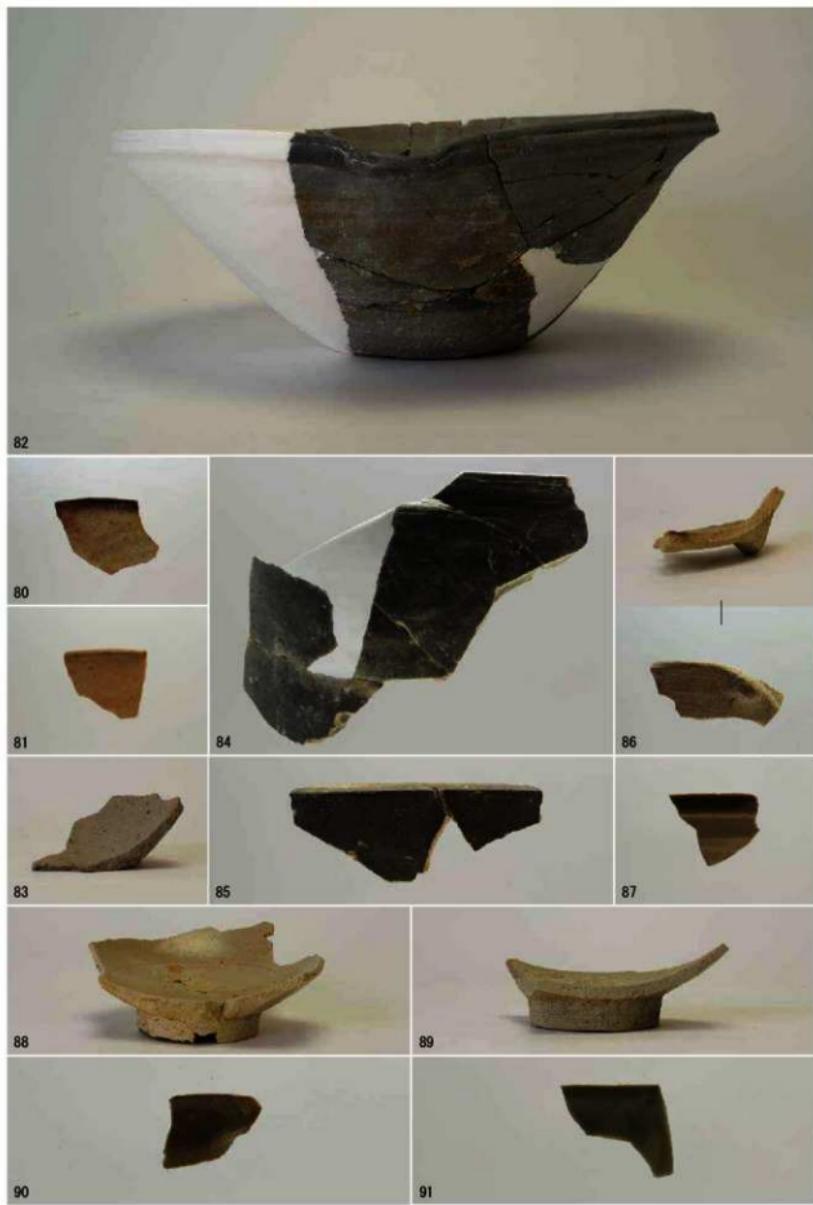


出土遺物 (4)



出土遺物 (5)

図版 22

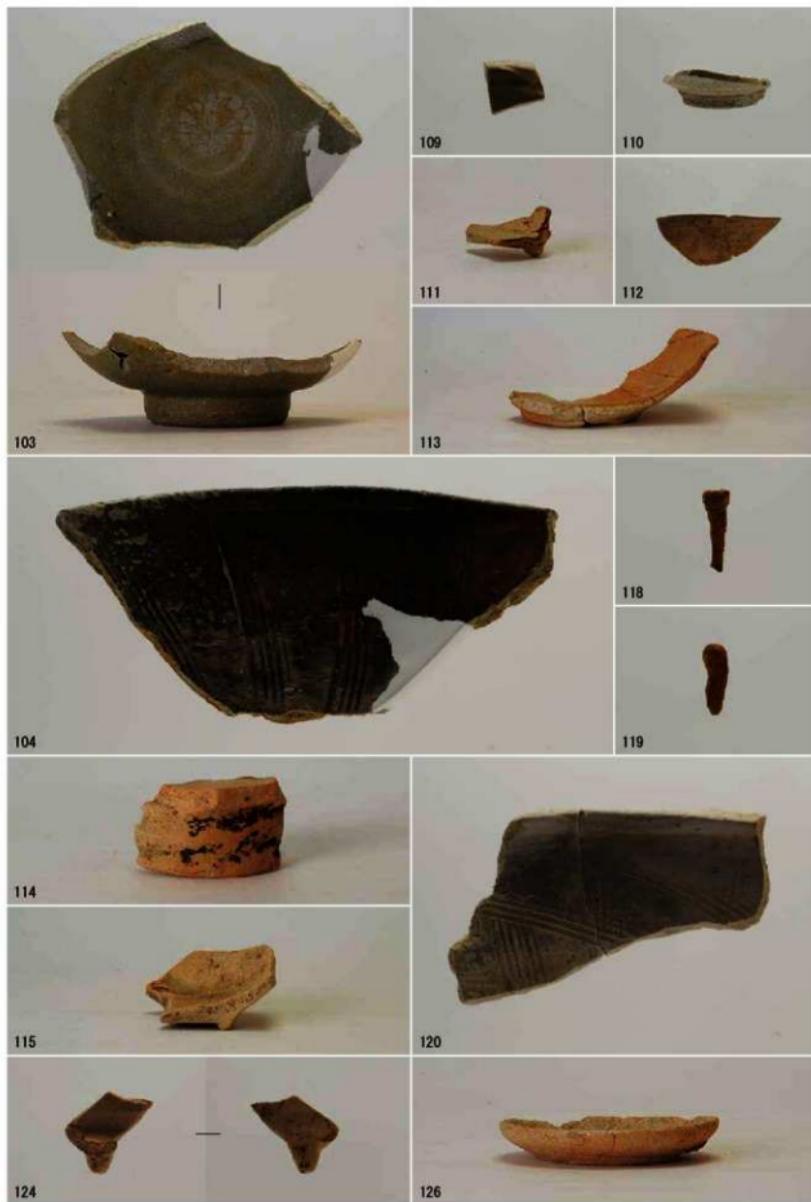


出土遺物 (6)



出土遺物 (7)

図版 24



出土遺物 (8)



出土遺物 (9)

図版 26



出土遺物 (10)



出土遺物 (11)

図版 28



出土遺物 (12)

図版 29



出土遺物 (13)

図版 30

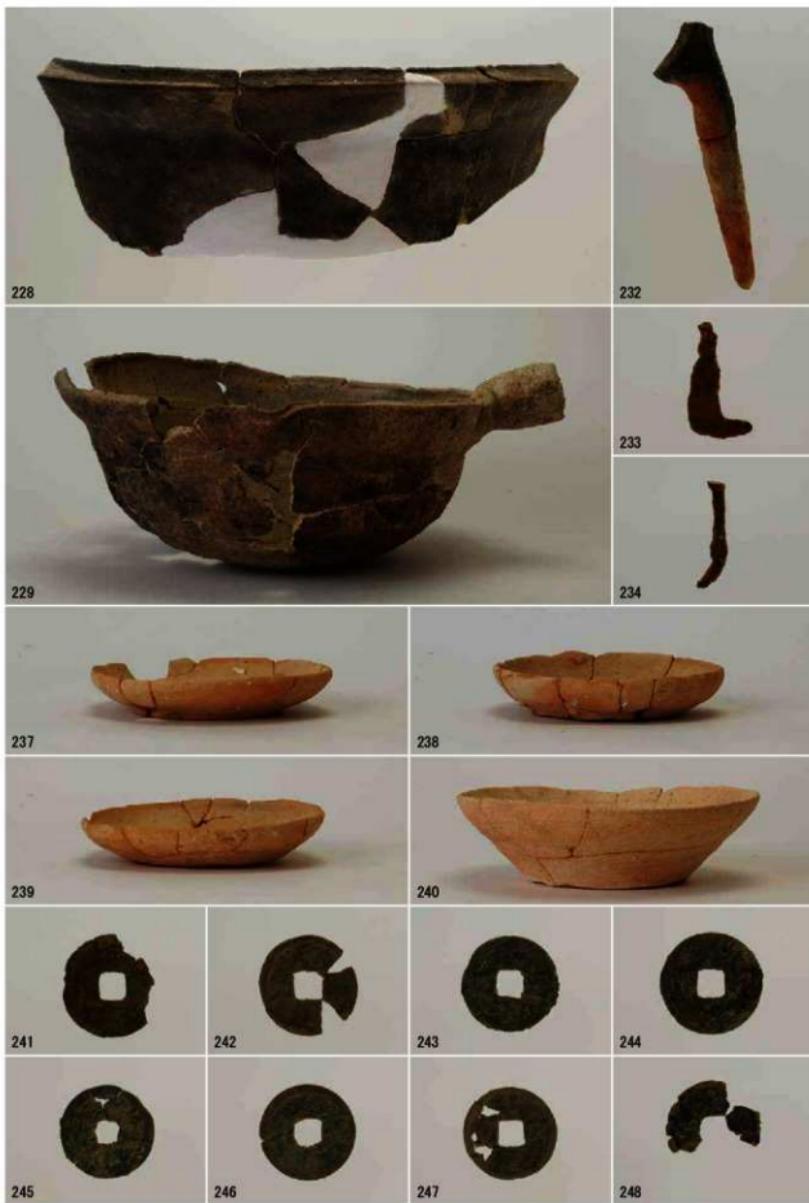


出土遺物 (14)



出土遺物 (15)

図版 32



出土遺物 (16)

報告書抄録

ふりがな	とうぜんじ・くろやまいせき 8
書名	東禅寺・黒山遺跡調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第88集
編集著者名	高木英明 四元 努 小河泰史 山田圭子
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
〒	753-0073
所在地	山口県山口市春日町3番22号 TEL 083-923-1060
発行年月日	西暦 2014年3月24日（平成26年3月24日）

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうぜんじ 東禅寺・ くろやまいせき 黒山遺跡	やまとちほん 山口縣 山口市 すざんじ 銭司	352039		34° 4' 53"	131° 26' 55"	2013.05.15 ~ 2013.12.10	4,740	遊水池建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東禅寺・ 黒山遺跡	集落	古代	掘立柱建物	20棟	土師器
			溝	48条	須恵器
		中世	井戸	3基	土師質土器
			墓	2基	瓦質土器
			土坑	80基	磁器
			柱穴	約1,400個	石製品 土製品 金属製品

要約	東禅寺・黒山遺跡は、古代から中世の時期を主体とする集落遺跡である。今回の発掘調査でも、平安時代後期から江戸時代初期にかけての掘立柱建物20棟や土坑、溝等の遺構を多数確認することができた。遺構は調査区中央部に密集しており、特に調査区を東西に流れる比較的大きな溝ならびにその周辺の遺構から多量の遺物が出土した。
	出土遺物は、古代から中世にかけての土師器や瓦質土器を中心であるが、中世前半期からの墓から烏帽子に染布されたと考えられる漆膜が確認された。また、中世後半期の井戸から、小柄の完形品が出土した。
掘立柱建物跡の規模と数ならびに青磁・白磁の輸入磁器等が多数出土したことから、中世の集落としては比較的経済的に豊かな集団が居住していたものと考えられる。	

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第88集

東禪寺・黒山遺跡VIII

2014年3月24日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印 刷 大村印刷株式会社

〒747-0849 山口県防府市西仁井町1-21-55